

# KOGAKUIN DAIGAKU KENKYURONSO

— Kogakuin University Bulletin —

No. 61 – 2

工学院大学研究論叢

第 61 – 2 号

Kogakuin University

Tokyo Japan

2024



# 目 次

## 第 61-2 号

1. ソ連作家同盟外国委員会での日本文学界についての  
徳永直・岩上順一との懇談記録  
..... 梅津 紀雄・吉田 司雄 ..... 1
2. 短期留学が大学生に与える影響  
—— 工学院大学のニュージーランド語学研修のケース ——  
..... 山田 朋美 ..... 19
3. 日本の現代小説における「てくれる」に対応する中国語表現について  
..... 安 明姫 ..... 35
4. 文部省職業教育課と『産業教育』誌 (16)  
..... 丸山 剛史・尾高 進 ..... 47
5. 工学院大学学習支援センター物理科利用による教育効果の統計分析  
..... 高橋 浩久・永井 朋子・紀 基樹・細谷 哲雄 ..... 57  
露木 孝尚・武藤 恭之・小麥 真也
6. COVID-19 下で障害のある子どもたちが直面する英語教育の環境と格差  
—— 質問紙調査による特別支援学校と一般校の比較から ——  
..... 貝原 千馨枝・柴田 邦臣 ..... 73

# Contents

## No. 61- 2

1. The Proceeding of the Meeting with Sunao Tokunaga  
and Junichi Iwakami on the Japanese Literary Scene  
at the Foreign Committee of the Union of Writers of the USSR  
..... UMETSU Norio, YOSHIDA Morio ..... 1
2. The Impact of Short-term Study Abroad Programs  
on University Students:  
A Case Study of the New Zealand Language  
Training Course Offered by Kogakuin University  
..... YAMADA Tomomi ..... 19
3. Chinese expression corresponding to “tekureru”  
in modern Japanese novels  
..... AN Mingji ..... 35
4. Vocational Education Section in Ministry of Education,  
Science and Culture and the Journal “Industrial Education” (16)  
..... MARUYAMA Tsuyoshi, ODAKA Susumu ..... 47
5. Statistical Analysis of Educational Effects  
by Using Academic Support Center at Kogakuin University  
..... TAKAHASHI Hirohisa, NAGAI Tomoko, KINO Motoki, ..... 57  
HOSOYA Tetsuo, TSUYUKI Takanao,  
MUTO Takayuki, KOMUGI Shinya
6. English Education for Children with Disabilities during COVID-19:  
Insights from a Questionnaire Survey Focusing  
on Learning Difficulties and Educational Environments  
..... KAIHARA Chikae, SHIBATA Kuniomi ..... 73

# ソ連作家同盟外国委員会での日本文学界 についての徳永直・岩上順一との懇談記録

訳・註：梅 津 紀 雄

解 説：吉 田 司 雄

## The Proceeding of the Meeting with Sunao Tokunaga and Junichi Iwakami on the Japanese Literary Scene at the Foreign Committee of the Union of Writers of the USSR

UMETSU Norio, YOSHIDA Morio

### 訳者まえがき

以下に掲げるのは、1954-55年の冬に作家の徳永直と文芸評論家で翻訳家の岩上順一がソ連作家同盟の招聘により、第2回全ソ作家大会に招かれてソ連を訪問した際、作家同盟の外国委員会で日本文学の研究者や翻訳家と懇談した際の記録である<sup>1</sup>。訳者は、いわゆる「雪どけ期」の日ソ文化交流に関する研究を進める上で、ロシア国立文学・芸術文書館に所蔵されているソ連作家同盟の文書の目録を調べ、この議事録を見出した。同文書館はソ連時代から存在し、モスクワを拠点とする文学・芸術関係の国家機関および個人の文書を広く所蔵している。ソ連時代の公的機関は国や共和国、州・市などに属していて、それらで作成された文書は多くが破棄されることなく保存の対象となった。作家同盟以外には、例えば、作曲家同盟、ボリショイ劇場、文化省などの文書が保存されている。

徳永も岩上もそれぞれ訪ソ体験をいくつかの雑誌記事に記した他、徳永は『ソヴェト紀行』（河角書店、1957年）、岩上は『モスクワ・北京・文学の旅』（河出書房、1955年）を出版しているが、いずれもこの懇談についてはなぜか言及していない（おそらくは話題がソ連ではなく、日本の状況になるからであろう）。ただし、徳永は「ソヴェト同盟をたずねて」においてこの懇談が実施されたことについて言及していた<sup>2</sup>。この議事録により、その詳細が再現できると考え、訳出することにした。当時のソ連側での近現代の日本文学についての理解水準や、日本の状況についての徳永と岩上の認識について具体的に知ることができる。この後、多くの作家・評論家がソ連側の招きで訪ソすることになるが<sup>3</sup>、そのはしりとしても興味深い。

ただし、このロシア語の議事録には誤記が多数存在する。それは単なるタイプミスというレベルを超えた数と質の誤りであり、おそらくそれが公表されてこなかった原因であると思われる。今回の訳出に当たっては、できる限りそれらを推定して修正するよう努めたが、不明な箇所や不確実な箇所があるため、以下の措置を行った。

1. 推定して訳した箇所や推定不可能な箇所に関しては、ローマ字に翻字して原綴を示した。推定した箇所は推定した語句に続けて、推定不可能な箇所は原綴のみを示した。原綴は、米国議会図書館方式を用いてローマ字に翻字した。その際、йはjとし、я、юはja、juで表記した。ここでのjは「ジャ」音ではなく、短い「イ」を示す。
2. ロシア語による日本語の翻字は原文のものを尊重した。特徴としては、ザ行はдз-/dz-/で示される。またハ行の音がないため、х-/kh-/で代用される。例えば、ザはдза/dza、ハはха/kha、またシはси/si、ワはва/vaとなる。

誤記の一例を挙げると、原文 6 頁（本稿 4 頁）目にある Сиганауэ の表記は、翻字すれば、Siganaue となる。日本近代文学に関する基礎知識があれば、これは Сига Наоя/Siga Naoya 志賀直哉の誤記であることがわかる。しかし、それが訂正されていないため、速記者（S.A. ユージナと記載）にはその知識がなかったと判断される。したがって、他の箇所もそれを前提とし、速記録の誤読の可能性も踏まえた読解を要する。

今回、可能な限り、推定を行ったが、不明箇所も残り、推定そのものも不適切である可能性がある。お気づきの点があれば、ご指摘いただければ幸いである。

アブレチン<sup>4</sup>：同志の皆さん、私たちの尊敬すべき客人である、日本の作家の徳永直さんと岩上順一さんが、ご厚意で我が国の日本文学研究者、専門家と、現代日本文学について懇談することを快諾してくださいました<sup>5</sup>。どんな手順で進めたらよろしいでしょうか。質問をするか、あるいはお二人に報告をしていただいて、それから質問をしましょうか。

徳永直：質問をしていただけたらと思います。

お招きにととても感謝しております。本日は、日本文学に関心を寄せる方々がこんなにたくさん集まってくださり、とても嬉しいです。現代日本文学の状況を知っていただきたいと思うのですが、どんな点にみなさんが興味をお持ちか、存じ上げませんので、まずはみなさんからの質問をお聞きしたいと思います。

アブレチン：ご質問はいかがですか。

同志リヴォーフ<sup>6</sup>：私は次のようなことに関心があります。私たちが知っているように、近年外国に、共産党員でもなく、平和のための闘争にも参加していないけれども、その作品において一般庶民の生活や、その生活の重苦しい状況、そして彼らの闘争を正しく示している、たくさんの数の作家がおります。私たちは、日本にそうした作家がいるのかどうか、どんなことに彼らが取り組んでいるのか、そしてどんな作品を書いているのか、ということに関心があります。これが最初の質問です。

最近、私は比較的若い日本の作家、野間宏〔1915-91〕の作品に接する機会があり、この作家は作品ごとにますます著しい成功を収めています。彼は今どんなことに取り組んでいるのか、彼にはどんな計画があるのか、彼の創作についてお聞かせいただきたいと思います。

1954年に雑誌『文学の友』において〔伊藤整の〕長編『火の鳥』が広く宣伝されました<sup>7</sup>。これは本当に、この雑誌が宣伝したように、興味深い本でしょうか。

そして最後の質問です。私は徳永直さんご自身の創作計画に関心があります。徳永さんは何に取り組んでいらっしゃるでしょうか、どんな計画がありますか。モスクワ滞在中に何か書くことは考えていらっしゃいませんか。

徳永直：野間宏についてですが、彼は日本共産党員です。戦後、彼は『青年の環』<sup>8</sup>という大作に3年間取り組みました。この作家の初期の作品には心理主義の痕跡があります。朝鮮戦争が始まった1949年に、彼は『真空地帯』という本を書き上げています<sup>9</sup>。この作品はリアリスティックですが、終戦直後の3～5年間の彼の作品を見るならば、この時期のこの作家の創作にはまだ心理主義が観察されます。しかし現在、彼はきっぱりとリアリスティックな立場へ移行しており、私たちは彼に大きな期待をかけています。1950年に彼は共産党に入党しました。

共産党員ではないけれども進歩的な作家たちの中では、阿部知二、田宮虎彦 Tamaja Torokhiko、中野孝次 Nakhadz Konuzo、青野季吉 Aogo Suekitchi、広津和郎、宇野浩二 Uno Kootjan、武田泰淳、梅崎春生、堀田善衛 Khotta Dzjun"aj などが挙げられます。しかし、彼らの作品のいずれかを選び、彼らの社会的活動と比較してみるなら、それらの間に大きな断絶が見られます。例えば、平和のための闘争に積極的に参加しているある作家が、それにもかかわらず、自分の文学的信条においてはシュールレアリストだということがあります。

しかしそれに関わらず、作家たちは皆、平和のための闘争という事業に強い関心があり、そうした作家たちを私たちは進歩的とみなしています。

私の創作計画に関して何かお話しできますでしょうか。昨年末に自作の『静かなる山々』の第2部を完成させ、休息後は、第3部に着手することを考えています。モスクワでは、私は『新潮』600号を記念した寄稿を考えており<sup>10</sup>、それ以外に、モスクワでの自分の印象を雑誌『Chiokharu』に書きたいと思っています<sup>11</sup>。

私の本『静かなる山々』に対するソ連での好意的な評価<sup>12</sup>は、私が日本で困難な状況にあっ

たとき、私を大いに助けてくれたといえます。そのため、私はあなた方に深く感謝したいと思っております。

キム<sup>13</sup>：私には次のような質問があります。同志徳永と岩上に、ここ数年の日本文学における最も重要な出来事について、かいつまんでお話いただければと思います。それから、それに関連してもう一つの質問があります。日本共産党は民主的な人民解放統一戦線のスローガンを放棄しました<sup>14</sup>。文学の領域では、そうした戦線は存在していますか。同志徳永が挙げてくださった進歩的な作家たちのリストに、阿部知二や堀田善衛 Khotta Dzun“aj といった名前を私は見出しました。彼らは反動的な作家でしたが、現在は進歩的な作家として取り上げられています。ということは、文学において民主的な統一戦線が存在するということなのでしょう。

そして2つ目の質問です。同志徳永と岩上に、ロシア語に訳すべき一連の小説を推薦していただければと思います（翻訳できるのは10作ほどかもしれませんが）。

岩上順一：戦後日本文学の道は、とても複雑です。よく知られているように、日本はアメリカ占領軍の抑圧下にありました。アメリカのイデオロギーは文学の領域にも浸透しています。特にサンフランシスコ講和条約締結後は日本がアメリカの従属下にあることが明白になり<sup>15</sup>、それについては、共産党員のみならず非党員の作家たちも知っております。

朝鮮半島におけるアメリカの侵略〔朝鮮戦争〕は、日本の状況を非常に複雑にしました。アメリカ占領軍に対する人民の抵抗の増大とともに、日本の作家たちの闘いも強化されました。日本共産党は、民族解放と平和、民主主義のために、人民の先頭に立って闘っています。そして、文学の問題についての共産党の路線は困難な道をたどっています。組織統一の運動は多くの段階をたどり、いっそう大きな発展を遂げています。まさにそうした闘争（原爆に対する闘争や朝鮮における侵略戦争に対する発言、松川事件<sup>16</sup>に関する逮捕者解放のための運動、そして平和闘争一般）がイデオロギー的、政治的な方向で行われています。こうした運動には、進歩的で「左翼的」な作家たちだけでなく、ずっと多くのそれ以外の作家たちも加わっています。明らかに、ここで良い例となっているのは松川事件です。

松川事件における逮捕者の解放闘争は、進歩的な作家たちによって先導されており、この闘争には、志賀直哉 Siganaue や川端康成 Kaubato Nasinari、石川達三 Isikava Takhuzo のように、最も反動的とみなされているブルジョワ作家たちも加わっています。

今彼らは、松川事件の参加者に対する公平な裁判のための署名集めの運動に加わっています。

阿部知二は平和闘争の諸問題において特に積極的です。彼は中華人民共和国に招かれ、中国で中国の作家たちと会い、特に袁犀と何度も会いました。中国からの帰国後は、彼の作品はとても進歩的になりました。



それ以外にも、彼は共産党の指導のもとに創設された〔日本〕文学学校<sup>17</sup>の校長を務めています。

したがって、共産党員の作家たちだけでなく党員ではない作家たちも、党の活動に参加し、党と同じ道を歩んでいます。

こうしたことがすぐに人民統一戦線のための闘争へとなだれ込んでいくと考えるのは困難です。しかしながら私たちは、このように作家たちの闘争への参加が繰り返されたおかげで、統一戦線を達成できるかも知れないと考えることはできます。

ロシア語に訳しても良い作品の推薦に関しては、『静かなる山々』の第2部を挙げるができます。

キム：それは推薦がなくとも私たちは皆採用します。

岩上：それから、宇野浩二、足柄 Asigora〔定之〕、阿川弘之『魔の遺産』<sup>18</sup>が挙げられます。

会場から：足柄と阿川は、初めて聞く名前です。

岩上：足柄は労働者で鉄道員<sup>19</sup>、阿川は志賀直哉 Siganauje の弟子で、新しい作家です。（さらに）挙げられるのは、春川鉄男『日本人労働者』<sup>20</sup>…

会場から：それはすでに学位論文として訳されています。

岩上：杉浦明平 Sagiura Minte<sup>21</sup>『基地六〇五号』…

会場から：二章が訳されていますが、まだ終わっていません。それは雑誌から訳されました。

岩上：霜多正次 Simoita Masadzi『軍作業』<sup>22</sup>、山田うた子<sup>23</sup>、〔江馬修〕『山の民』<sup>24</sup>、〔中野重治〕『むらぎも』<sup>25</sup>、佐多稲子『若い意欲』<sup>26</sup>、それから〔同じく佐多稲子の〕『ズボンを買いに』、これらは短編小説です。ここでは、日本の学生たちとアメリカの帝国主義者たちとの闘いが描写されており、『若い意欲』はアメリカの抑圧に対する朝鮮と日本の若者の闘争が描写されています。

民主主義と平和のための闘いに積極的に参加している進歩的な作家の数には Kawadzhura を加えることができますし、速記録が編まれるときには、補足としていくつかの名前をこのリストに付け加えたいです。特にこのリストに推薦したいのは、児玉花外<sup>27</sup> Newato Rinoto

『鶏の歌』、そしてゼネストが鎮圧されたときのメーデー事件について書いている Kasisada Masaru です。この事件には多くの若者が参加し、多くが逮捕され、勾留されています。この作品は若者の闘いに捧げられているのです。

会場から：私は宮本百合子 Yamota Udako<sup>28</sup> の作品を研究しています。彼女の作品の評価がまちまちであることを知っていますし<sup>29</sup>、岩上さんの最新の批評も知っています<sup>30</sup>。現在、この作家がどのように評価されているのか、興味深いです。

岩上順一：ブルジョワ・インテリゲンツィヤの環境の出身であるにも関わらず、宮本百合子 Yamota Udako が最も進歩的な女流作家であることはまったく疑いありません。彼女は著しく変わり、確たる創作の道を歩みました。

当初、彼女の作品にはヒューマニスティックな傾向がありました。彼女はプロレタリア文学において重要な位置を締めていました。戦後、彼女は日本文学の民主化のための闘いに多大な努力を費やし、日本文学に大きな貢献をし、非常に沢山の自伝的な作品を残しました。しかし時折生じる問題は、彼女のいくつかの作品にブルジョワ的なイデオロギーの残余が感じられるということです。そして彼女の創作手法は完全にリアリスティックな立場に接近したのか、という問題が生じるのです。

その他にも、さらに細かい問題についての見方においても、食い違いがあります。もしそれが単に芸術の問題にのみ関わっているのなら、その克服も容易だったでしょうが、そこには政治的な問題も加わっています。それゆえここでの議論は困難になるのです。

私たちはこの問題に関しては、さらに大いなる闘いを行わねばならないと考えています。

徳永直： 宮本百合子の作品全集はありますか<sup>31</sup>。

会場から：ええ、あります。

徳永：『二つの庭』はとても人気のある作品です。

会場から：高倉輝<sup>32</sup>〔1891-1986〕は何を執筆していますか。

徳永：彼は党活動の関係で何も書いていません。彼は地下活動をしています。

会場から：山田うた子 Yamajo Utako の健康状態はいかがですか。彼女の作品はとても興味深いです。

徳永：私は彼女には会っていません。聞いたところでは、彼女には軽い病がありますが、回復に向かっているとのことでした。

会場から：彼女に宜しくお伝えください。岩上さんの執筆計画をお聞きしたいです。

岩上順一：私は志賀直哉 Siganauja について書き終えて、現在はそれを改訂しています<sup>33</sup>。また私は『ゴリキー文学論』の翻訳にも取り組んでいます。第1部と第2部を訳し、今は第3部に取り組んでいます<sup>34</sup>。

キム：いまフランスの進歩的な作家たちは、低俗な冒険小説の戦線でアメリカ人と競おうとして、同様に推理小説を書くようになりました。日本でもこうした「大衆文学」が存在していますが、これに対して進歩的な作家たちはどのように反応していますか。こうした文学は非常に広く普及しているものですから。

そしてぜひ伺いたいのは、岩上さんが志賀 Chinga をどのように評価しているかということです。私たちは、彼が小説の巨匠であることを知っていますが、あなたは彼の作品をどのように評価していますか。

岩上：ブルジョワ・リアリズムの観点から、彼はその典型的な代表者です。しかし、彼の作品を取り上げるならば、それは良心的な知識人をとらえる矛盾の描写として評価できます。彼はトルストイと同様に、矛盾に満ちています。私はこうした志賀直哉の矛盾をできる限り暴きたいと思っています。

他方で、低俗な出版物については、[田村]泰次郎 Tajzera を挙げられるでしょう。彼は十分にこの路線を歩みました。ここで彼以外になんらかの一定の傾向を挙げることは難しいです。

キム：農村や事業所で、手書きの雑誌（いわゆる「ガリ版雑誌」）はどのくらい出されていますか。

徳永直：合わせれば千を超えますが、正確な数字は挙げられません。

リヴォーワ：私が興味を持っているのは、雑誌間の相互の関係です（名前を挙げる）。これらはどういった雑誌ですか。

徳永直：『新日本文学』は、戦後 1945 年に創設された新日本文学会の機関誌です。この会は、志賀直哉、広津、宇野浩二といった作家たち、戦時中に、心に秘めていたとしても、敵

を支持せず、戦争に反対した人々、ベテランの日本の作家たちからなる人々の指導で創設されました。この会のメンバーには同様に、かつて日本作家同盟に加わっていた、ベテランのプロレタリア作家たちも加わっています。

2-3 年後、作家グループや共産党の活動が活発になってきた頃、志賀直哉や広津和郎は脱会しました。

新日本文学会は、戦後の時期の進歩的な日本の作家たちの代表者のメガフォンでした。

1950 年夏、日本共産党に分裂が生じ、それは新日本文学会の組織にも影響し、同様に分裂が生じ、分裂に異を唱えた作家たちは連帯し、自分たちの雑誌『人民文学 Dzhimi Mungab』を持ちました。こうした対立は 3 年間に渡って続きました<sup>35</sup>。

日本共産党の分裂は 3 年後に一掃されました。かつて新日本文学会に入会し、同会から排除された作家たちも、自己批判を行って同会の会員の権利を復活させました。『人民文学』の課題は解決したため、〔後継誌の〕雑誌『文学の友』があらゆる問題に取り組み始めました<sup>36</sup>。組織的統一に関してはある種の成果を達成しましたが、理論的な不一致の問題はあまり解決を見ていません<sup>37</sup>。

組織的な点からは、雑誌『文学の友』は新日本文学会のメンバーであり、統一的な組織の全体のメンバーを構成しており、『新日本文学』と『文学の友』との関係は敵対的なものではなく、両者は協同の原則において活動しています。

(休憩が告げられる)

ネムゼル<sup>38</sup>：私たちの客人たちにもっと質問がありますでしょうか。

会場から：私たちの客人たちは、私たちの新しい雑誌『ソ連の東洋学』に日本文学の状況についての論攷を書くことに同意していただけないでしょうか。モスクワにいらっしゃる間にその論攷を書いていただいても構いません（同志徳永：私たちは喜んでそうさせていただきます）。

会場から：日本の古典文学では何が翻訳に値するでしょうか。それからもう一点、我々はどうかがたいことがあります。藤森成吉 Khvazilodo Khenichi [1892-1977] は何に取り組んでいますか。よろしければ、彼について、彼の社会活動についてお話しいただけますか。

岩上：藤森成吉<sup>39</sup>に関しては、彼は平和のための活発な闘士であり、平和擁護日本委員会委員であります。彼は近年、長編小説に取り組んでおり、その題名を私は思い出せませんが、その小説は若者を扱っていて、その人生、愛と闘いを描いているということだけ覚えています。この小説は今ほとんど完成しており、近く出版される予定です<sup>40</sup>。こうしたことすべて

を私は聞いただけで、原稿自体を見たわけではありませんので、詳細についてお伝えすることはできません。

古典文学に関してお勧めしたいのは、詩のアンソロジーである万葉集、長編物語の源氏物語、平家物語、それから近松〔門左衛門〕が優れています。それから、〔国木田〕独歩 Dolio<sup>41</sup>の短編、二葉亭 Futotateja〔四迷〕の『浮雲』、島崎〔藤村〕の小説『家』、『芽生』、夏目〔漱石〕の『道草』、徳富〔蘆花〕『不如帰』『黒潮』です。

リヴォーワ：『黒潮』は、現代日本にはアクチュアルではない問題を取り上げています。それによって小説の民主的傾向が消えたわけではありませんが、具体的でアクチュアルな問題は提起されていません。

会場から：でもその作品は歴史的観点において興味深いかもしれません。

岩上：ブルジョワとの闘争という観点からは、この小説は今日においてもアクチュアルな意義を持っています。というのは、今日も同様の状況が続いているからです。吉田内閣の瓦解<sup>42</sup>は、ブルジョワ内部の衝突の結果です。

会場から：私は詩についてお聞きしたいです。詩集や雑誌で、民主的な良い詩人の、どんな良い作品が現れていますか。

徳永：峠三吉 Kavadzi Roko〔1917-53〕<sup>43</sup>の詩を挙げることができます。彼は共産党員で、広島 Khorasimo にいて、そこで原爆の事件を経験しました。去年亡くなっています。さらに、原爆を扱った詩のアンソロジー『死の灰』<sup>44</sup>を挙げることができます。この詩集は、作家同盟に持参しており、ここに 있습니다。また『松川詩集』<sup>45</sup>も挙げられます〔宝文館、1954〕。松川事件で逮捕された人々を釈放させる闘争に捧げられた詩集です。この詩集も私たちが持参しました<sup>46</sup>。

詩人の中からは、さらに壺井繁治、深尾須磨子、岡本潤と、日本に住んでいて日本の民衆のスタイルで書いている朝鮮人の詩人、許南麒 Kholambi〔ホ・ナムギ〕を挙げるできます。

さらに多くの詩人がいますが、すぐに名前を挙げられないため、後で速記録に加えさせていただきます<sup>47</sup>。

会場から：私たちに興味があるのは作家だけではありません。日本の統一的な民族芸術のための、文化、芸術、絵画、音楽の活動家の統一戦線はどのように発展しましたか。

徳永：文学界では、統一戦線のための闘いは、松川事件以後に鮮明に現れました。この運動は非常に広範囲の人々をとらえました。この運動に加わらなかった作家は一人もいなかったでしょう。しかし他方では別の状況もあります。それは、広津の指導する派閥と私たちが所属している新日本文学会の運動に関することで、ここでは統一はまだありません。広津和郎 Khirota Tsukadze [1891-1968] は、自分が共産主義者とみなされるのを望んでいません。しかしながら、個人的な関係においては、私たちは非常に緊密にやり取りを行っており、彼は私を大いに援助してくれているほどのです。

松川事件で逮捕された人々の解放のための闘争が私たちを糾合し、私たちがそこで共通の路線を見出したことは、まったく疑いありません。しかし、この方向での統合で警戒されているのは、危惧されているように、「自分たちが共産主義者とみなされる」ということです。

文学と政治の関係の問題に対して、私の見方は広津和郎 Khirotsu Tsukadze の見方とは異なっています。広津の言明では、文学が政治に従属するような状況は許されません。この立場は、日本および日本の文学界で非常に普及しています。しかしながら、若い作家たちはこの問題に関して、もっと自覚的であり、もっと意識的にこの問題に対しています。このため私たちは、徹底的に、文学界にこのような見方が存在する限り、戦わねばならないと考えています。私たちはこの問題の正しい理解のために戦わなければならないのです。

しかし、文学的制度的問題の観点から克服されていない壁が存在するとしても、作家間の個人的な関係は、非常に緊密で非常に良好です。

その他の芸術領域においても同様の困難な状況があります。困難な時期を迎えています。しかしながら、統一戦線のための闘争は、それでもなお格段の進歩を遂げました。民主的な歌や詩のための運動は、大衆の中にも非常に深く浸透しました〔うたごえ運動を指す〕。そして、以前は進歩的ではなかったような作曲家たちが大衆とともに活動し始めています。

そうした運動は、勤労大衆と知識人とを結びつけました。昨年作曲家の大会が三日間開催され、約3万人の人が参加しました<sup>48</sup>。これは良い指標です。特別のオーケストラが組織されましたが、東京交響楽団との統合はまだです。ただし、東京交響楽団は現在、しばしばショスタコーヴィチやプロコフィエフらソ連の作曲家の作品を演奏しており<sup>49</sup>、統合のための前提条件は熟しつつあります。

日本の画家たちや造形芸術の活動家たちは、まだ統一を達成していないとは言えませんが、それでもなお、彼らはまだ自分たちの芸術家協会を持っていません。平和のための闘争の展覧会やその他の展覧会に参加している画家たちがいますが、一人で活動する画家たちもいます。

日本の映画製作者たちは、『太陽のない街』[1954]、『蟹工船』[1953]、『女ひとり大地を行く』[1953]といった多くの進歩的な映画を製作しました<sup>50</sup>。これまで反動的な映画会社で働いてきた俳優たちだけでなく、映画監督も、今や進歩的な映画へ深い共感と友好的な態度を示しています。しかしながら、すでに述べたように、これまでアメリカの占領下のプロパガ

ンダ、アメリカのイデオロギーが存在していたため、文化活動家の完全な統合はおそらく、困難な事業となるでしょう。彼らは合同し、人民のために活動するために全力を注いでいますが、そのすべてには苦勞が伴っています。

会場から：作家は常に、歴史家との緊密な結びつきのもとで執筆しています。現代日本や中世日本の歴史を専門とする、進歩的な歴史家の名前を上げていただけますか。

徳永：私たちは進歩的な歴史家として、渡部義通、〔松本〕新八郎、禰津正志、豊田武、伊豆公夫〔赤木健介〕、羽仁五郎、高橋碩一、井上清らをあげることができます

それから、私はお尋ねしたいのですが、森鷗外の『山椒大夫』、『阿部一族』といった作品は訳されていますか。これらの作品は、翻訳が望まれる作品のリストに入れていただきたいと思います。それらは歴史的事実に依拠している作品です。それらの事実の叙述に関して、我が国で見解の違いはあり得るとはいえ、これらの作品における再現の真実性と高度なリズムを指摘しなければなりません。

岩上：私はみなさんと、こうしたことのためにもっと長い時間を費やして、ソ連でどのくらい日本文学が研究されているか、一体何が研究されているのか、ソ連の同志たちがどんな問題に関心を寄せているのかを話し合いたいです。

ネムゼル：東洋学研究所は、研究所の研究員たちと特にこうした問題について話し合えるよう、日本の同志たちを招聘することを望んでいます。

徳永：喜んでその招待を受け入れましょう。

ネムゼル：同志徳永に結びの言葉をいただけませんか？

徳永：現代の（民主的な）日本にとって大きなサポートとなるのは、日本文学がソ連で研究されることであり、批評も存在し、印刷物に掲載されています。昨年日本で掲載された日本文学についての同志〔イリーナ・〕リヴォーワの記事は、我が国で非常に強い印象を与えました。

一方、日本の文学界は、『若き親衛隊〕〔ファジェーエフ〕や『真実の人間の物語〕〔ポレヴォイ〕、『昼となく夜となく』、『ロシア問題〕〔いずれもシーモノフ〕、『金星勲章の騎士』、『地上の光〕〔いずれもババエフスキー〕などの影響を受けています。こうした文学は、戦後ソ連に登場したもので、日本の労働階級や若者の中に大衆的読者を得ています。それ以外に、言わなければならないのは、莫大な数の人々がロシアの古典文学やオストロフスキーの『鋼

鉄はいかに鍛えられたか』のような戦前のソ連文学をも読んでいるということです。日本の進歩的な若者は、そうした作品を何度も読み直しています。

日本の作家たちの基本的な思想と願いは、労働者階級や農民の生活を叙述する文学は、もっと力強くなければならない、ということです。私たちはそのような文学がもっと力強くなれば、作家たちの間の統一が達成され、何らかの運動が前進すると考えています。しかしながら、こうした文学は、労働者階級と農民のテーマの解決の点では、まだ弱いままです。この弱さの原因は、すでに指摘したように、日本の文学界が、複雑な状況に陥り、覆われていることにあります。そして新日本文学会のような進歩的な作家組織は、すでに7年もの間、文学作品の批評のための指標（基準）を欠いているのです。

こうしたことから、ソ連文学、そして同様にソ連の理論や批評は、私たちに大きな指導的な影響を及ぼしていると言わねばなりません。

日本の労働者と日本の農民は、朝鮮戦争の時点から大きく成長しました。昨年の石炭産業の労働者の闘争、そして三大財閥の闘争、金属工業の労働者の闘争、これら全ては、日本の労働者階級がいかに思想的に成長したかを物語っています。他方で、労働者、農民や学生の文学サークルが非常に大規模に組織されています。

そして私たちの文学は、労働者階級や農民の運動や闘争から取り残されています。私たちはこの欠点を一掃するために全力を注いでいます。そしてそのために、ソ連文学と日本文学がもっと緊密に接近することを望んでいます。

ネムゼル：出席者を代表して、我らが客人に対し、興味深く内容のある懇談に感謝を申し上げます。我が客人の興味のある問題全てに関しては、東洋学研究所で開催される懇談会で回答がなされる予定です（拍手）。

### 【解説】

作家の徳永直と評論家の岩上順一は1954年12月の第2回全ソ作家大会に参加、モスクワ滞在のあと中国の北京に寄って翌年3月に帰国する。旅の記録は、岩上順一『モスクワ・北京・文学の旅』（河出新書、1956年7月31日）、徳永直『ソヴェト紀行』（角川新書、1957年8月30日）にまとめられているが、徳永によれば、二人は12月22日未明に羽田飛行場を出発、香港、ベトナムのサイゴン（現ホーチミン）、タイのバンコック、インドのカラチ、エジプトのカイロ、イタリアのローマ、スイスのジュネーヴ、ドイツのデュッセルドルフ、デンマークのコペンハーゲン、ノルウェーのオスロを経由してスウェーデンのストックホルムへ、そこで飛行機を乗り換えフィンランドのヘルシンキへ、さらに飛行機を乗り換えレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）を経てモスクワまで赴いた。わざわざ遠回りの行程をとったのは、当時ソ連とは国交がなく、直接向かうことはできなかったからである。到着したのは12月24日深夜で、全ソ作家大会はほとんど終了、翌25日は休会で、26日午後4



時からの閉会式に出席しただけとなった。その後、モスクワに二ヶ月滞在、イルクーツクからモンゴル経由で中国に入り、中国の北京に一月月滞在したあと、広東、香港経由で帰国の途に着いた。

印刷所植字工時代に体験した共同印刷争議を題材とする『太陽のない街』（『戦旗』1929年6月～11月）の作者は、『ソヴェト紀行』でも「勤労者」に目を向け、レニングラードのウリツキー煙草工場やモスクワの製鉄工場、モスクワ郊外の「モロトフ」コルホーズ（集団農場）、新聞のプラウダ社などの訪問を印象深く書きとめている。『モスクワ・北京・文学の旅』はソビエトの文学者たちの活動により目が注がれ、全ソ作家大会閉会式やレセプションでの会話から、ゴーリキー博物館近くの作家同盟本部で出会った人々の印象、工場の文学サークルの若い作家たち、レニングラード作家同盟支部で出会った人たちなど、実名入りで文学者との交流を語っている。しかし、徳永や岩上がソビエトの文学者に日本について何を語り、またどう受け止められたかは、紀行文という性格からほとんど知ることはできない。この作家同盟外国委員会での会合の記録は、そうした空白を埋める貴重な資料である。

会合が行われたのが1955年1月7日であることは、『新日本文学』1955年3月号に掲載された徳永直「ソヴェト同盟をたずねて」という中野重治宛書簡の形式を採った報告文からわかる。作家同盟本部の「外国委員会の室で午後四時から日本文学関係者五十人ばかりの人が集つて」行われたそうで、徳永はどのような質問があったかも具体的に記している。しかし、この記録と必ずしも一致している訳ではない。速記記録という性格からどちらが正しいとも言いきれないが、あわせ読むことで、まだ国交もない異国での交流やソビエト側の日本文学に向けられた関心のありようを知ることができる。

1954年12月15日から26日までモスクワのクレムリン宮殿で開催された全ソ作家大会は日本でも注目されていた。スターリンの提唱した社会主義リアリズムが公式の創作方法として確立した1934年8月の第1回大会から20年を経て、ソ連の指導的創作理論はどういう方向へ向かうのか。敗戦後の1945年12月に旧プロレタリア文学運動に関わった文学者たちが中心となって創立された新日本文学会にとっても、大きな関心事であった。新日本文学会の機関誌『新日本文学』を繙くと、1955年1月号の鹿島保夫「ソヴェト作家・批評家の仕事と生活」では作家同盟の中央機関紙「文学新聞」が大会準備のために設けた欄の文章を紹介しており、2月号には「全ソヴェートの文学僚友へ」という新日本文学会中央委員会からの挨拶文と徳永直「そわそわしながら—ソヴェト作家大会に招かれて—」という二つの短文が掲載されている。3月号には先に触れた徳永直「ソヴェト同盟をたずねて」が載っており、4月号で「ソヴェト作家大会・特集」が組まれ、山村房次「第二回ソヴェト作家大会と社会主義リアリズムの諸問題」と大会における演説からルイ・アラゴン「詩における伝統とリアリズム」、リンゼイ「社会主義リアリズムと国民的伝統」が掲載される。

5月号では「ソヴェト・中国から帰つて」という座談会が載り、徳永直と岩上順一に桑原武夫、高杉一郎、蔵原惟人が聞き手として出席している。6月号には江川卓「第二回ソヴェ

ト作家大会と詩の問題点」、7月号には岩上順一「『鎌と槌』工場文学サークル訪問記」、9月号にはイギリスの作家ジャック・リンゼイの大会演説の全文「われわれの創作方法」が「社会主義国における社会主義リアリズムと、資本主義国における社会主義リアリズムとの相違が、労働のテーマにたいする適用においてももっとも明確に看取されると論ずるリンゼイの主張につよい興味を感じた」という山村房次「まえがき」をつけて掲載され、さらに徳永直「全ソ作家第二回大会に出席しての報告」が載っている。これは6月25日に法政大学講堂で行われたもので、『ソヴェト紀行』にも収録されている。大会の全貌は300頁を超える『ソヴェト文学』No.1「第2回作家大会特集」（至誠堂、1955年6月20日）にまとめられ、大会に参加したフランスの詩人ルイ・アラゴンの「第二回ソヴェト作家大会をめぐる小論」（と言っても180頁近い）を中心とした『アラゴン ソヴェト文学論』（小島輝正訳、大月書店、1956年12月15日）も刊行されている。

新日本文学会常任委員会で承認されての参加ゆえ、この会合での徳永や岩上の発言も、思っていたことを率直に述べたものだとは即断することはできない。徳永直は「全ソ作家第二回大会に出席しての報告」で、「日本代表の一部また新日本文学会代表として」振る舞ったことを強調している。「日本代表の一部」というのは、「ひろく民主的な平和を愛する文学勢力を基調」とするためか作家同盟からの招待が一国三名で、日ソ親善協会の斡旋で他に志賀直哉と広津和郎が行くことになっていたにもかかわらず、健康上の理由などから二人が行けなくなり、他の代表の斡旋もうまく行かず、結局新日本文学会に所属する徳永と岩上だけが参加することになったという経緯があったからである。

加えて、「新日本文学会代表」という意味あいも微妙である。徳永は新日本文学会創立メンバー9名に名を連ねていたが、1950年に新日本文学会の運営に対する意見書を栗栖継と連名で提出、同年11月創刊の『人民文学』では岩上も徳永も1951年に亡くなった宮本百合子への攻撃に加わった。背景には、日本共産党がコミンフォルムからの批判が引き金となって所感派と国際派とに分裂した「五〇年問題」とその後の内部抗争とがあった。従って、1927年から28年にソ連に滞在し帰国後多くのソビエト紹介記事を執筆、自伝小説『二つの庭』（『中央公論』1947年1月号～8月号）、『道標』（『展望』1947年10月号～1950年12月号）に描くなどソ連と関係の深い宮本百合子の文学に関する質問は、もっとも答えにくいものだったかも知れない。徳永の発言にあるように、3年間にわたった共産党の分裂は一掃され、新日本文学会を一度は脱退した文学者たちも新日本文学会に復帰してはいたが、宮本百合子を一時期のように声高に批判せずとも、「政治的な問題も加わって」「それゆえここでの議論は困難」だと口ごもりながら、しかし「さらに大いなる闘いを行わねばならない」と続ける岩上の応答からは、当時の微妙な空気を読みとるべきかも知れない。

徳永も「ソヴェト同盟をたずねて」で『新日本文学』と『文学の友』という二つの雑誌の関係について質問されたが、「私たちは、政党内におこった対立が文学団体内に対立をうみ、「新日本文学」と「人民文学」の対立をうみだしたこと、それが解決に達し「人民文学が廃刊

され、「文学の友」は労働者農民の文学を育てるという特定の任務をもつて刊行されたこと、したがって「新日本文学」と「文学の友」は協力関係となり統一の方向へ前進したことを、出来るだけ慎重に答えました」と書いている。わざわざこう報告していることにも注意すべきかも知れない。

たとえそうだとしても、野間宏の初期の作品には「心理主義が観察され」るが、共産党に入党した「彼に大きな期待をかけてい」という徳永の発言や、「文学において民主的な統一戦線が存在する」のかという質問に対する、松川事件に対する広津和郎ら進歩的文学者の闘争や阿部知二の平和闘争への積極的関わりを例に挙げての岩上の応答は、第2回全ソ作家大会の雰囲気をも過分に意識したものに見える。座談会「ソヴェト・中国から帰つて」での徳永の発言によれば、作家同盟の作家代表約1000名に資本主義国を含む32カ国から招待された約100名、さらに政府委員と国民一般の傍聴者約1500人が参加した大会は、芸術家による国際的な人民戦線結成の可能性を感じさせるものだったからだ。

しかし今日から振り返れば、つかのまの夢は歴史の荒波の中で霧散していったように思える。作家大会前年の1953年3月にはスターリンが亡くなり、エレンブルグ『雪解け』（1954年）が物議を醸していた。作家大会の翌々年1956年のソ連共産党第20回大会では、フルシチョフのスターリン批判が行われ、ソ連と中華人民共和国との深刻な亀裂へとつながった。前年日本共産党は第6回全国協議会（六全協）で武装闘争路線から平和路線への転換を決定するが、新日本文学会内部では共産党の政治介入をめぐって対立が深まっていった。

この間に、国際的にはソ同盟共産党第二〇回大会とスターリン批判、フルシチョフのチトー訪問、ポーランド事件、つづいてハンガリー事件、中国共産党の「プロレタリア独裁の歴史的経験について」から、「人民内部の矛盾の正しい解決について」などの文章が発表されるという一連の出来事があいついておこった。

さらに国内的には日本共産党の第六回全国協議会の諸決定があり、労農党は解体して社会党に合併する出来事などがあり、劃時代的な岸内閣の出現までには、鳩山首相が自らモスクワに飛んで国交回復に調印する等の、内に外に複雑な波紋をおこしながらも一貫した“歴史のまがり角”とでもいったような大変化と飛躍があった。

徳永直も『ソヴェト紀行』の1957年8月付の「あとがき」でこう書いているが、徳永や岩上にとって、1954～55年のソ連・中国訪問と作家同盟外国委員会での会合は「歴史のまがり角」一歩手前の至福な出来事であったのかも知れない。

## 注

- 1 ステノграмма беседы с Иностранной комиссией с Токунага Сунао и Иваками Дзюнити о литературной жизни Японии. РГАЛИ (Российский государственный архив литературы и искусств), ф. 631 (Союз советских писателей), оп. 26, ед. хр. 5667 (『外国委員会と徳永直、岩上順一との懇談記録』、ソ連作家同盟、国立ロシア文学芸術文書館所蔵、1955 年 1 月 7 日。以上は目録のタイトルで、文書のタイトルは「日本の作家、徳永直と岩上順一との会合記録」)。徳永直 (とくながすなお、1899-1958) は熊本県生まれのプロレタリア作家。印刷工として労働運動に参加した体験を『太陽のない街』(1929) として発表、戦後は新日本文学会創立に参加した他、『静かなる山々』などを執筆した。岩上順一 (いわがみじゅんいち、1907-58) は文芸評論家、翻訳家。戦前の著作に『歴史文学論』『横光利一』、戦後の著作に『変革期の文学』がある他、ロシア・ソ連文学の翻訳を多数残した。2 人は、1954 年 12 月に開催された第 2 回全ソ作家大会に、日ソ親善協会の斡旋を受け、新日本文学会の代表として招かれて訪ソした。当初は、志賀直哉、広津和郎の訪ソが期待されていたが、彼らは健康上の理由などで辞退していた。ただ唯一、徳永直「ソヴェト同盟をたずねて」『新日本文学』1955 年 3 月号 (10(3))、184-187 頁に中野重治宛公開書簡の形で言及されている。この「書簡」では徳永は、「会常任委の決定にしたがって、会代表として全ソ作家大会に行ってきます」と自らの立場を記している (180 頁)。作家大会は 12 月 15 日に開幕したが、徳永らは旅券の入手の遅れなどから出発が遅れたため、モスクワ到着が 12 月 24 日深夜となった。翌日は幹部会のみだったこともあり、26 日の閉会式にろうじて出席できたのみで、徳永が発熱を起こした関係で挨拶も行われていない。ただし、公式の議事録に二人の名前は掲載されている。Второй всесоюзный съезд советских писателей, М., 1955. С.604.
- 2 注 1 に触れた徳永直「ソヴェト同盟をたずねて」を参照のこと。
- 3 例えば、以下を参照のこと。秋草俊一郎「ソ連より愛をこめて——冷戦期日本における文化交流とソフトパワー」、『これにくさ』(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室編) 第 10-1 号、29-31 頁。
- 4 アブレチン、ミハイル・ヤコヴレヴィチ アプレтин, Михаил Яковлевич (1885-1981)。教育・労働運動関係の活動家で、対外文化交流協会 (БОКС) 教育局長、同書記長、副会長を歴任し、1938 年よりソ連作家同盟外国委員会副委員長 (～1958)。徳永は「ハリコフ会議の前の、世界革命作家同盟時代の書紀」であり、「外国委員会ではなくてはならない」「生き字引」と評している。徳永直、岩上順一、桑原武夫、高杉一郎、蔵原惟人「座談会 ソヴェト・中国から帰って」『新日本文学』第 10 巻第 5 号、1955 年、175 頁。
- 5 徳永によれば以下の通り。「〔作家同盟の〕外国委員会の室で午後四時から日本文学関係者五十人ばかりの人が集って、私と岩上氏にいろいろの質問を出してきました」(「ソヴェト同盟をたずねて」134 頁)。
- 6 リヴォワ、イリーナ・リヴォーヴナ Львова (Июффе), Ирина Львовна (1915-1989、本名ヨッフエ)。日本学者、文学者。翻訳に、高倉輝『箱根用水の話』(1954)、徳永直『静かなる山々』(1952)、小林多喜二『党生活』(1957)、徳富蘆花『黒潮』(1957)、石川達三『風にそよぐ葎』(1970)、『平家物語』(1982) など。日本文学に関する多数の業績があり、後述のように、日本での議論にも影響を与えた。
- 7 伊藤整『火の鳥』光文社、1953 年。出版直後から多くの批評が文芸雑誌に掲載されたが、『文学の友』の 1954 年の各号には見いだせない。『新日本文学』、『文学界』、『近代文学』の各誌には繰り返し批評が掲載された。例えば、武井昭夫「批評の衰弱と頹廃——「火の鳥」と「黄金伝説」その他をめぐって」『新日本文学』第 9 巻第 2 号、126-135 頁、日高八郎「火の鳥」の問題点」『新日本文学』第 9 巻第 5 号、162-165 頁。
- 8 野間宏『青年の環』第 1 部、第 2 部、河出書房、1949 年。
- 9 野間宏『真空地帯』河出書房、1952 年。
- 10 雑誌『新潮』は、明治 37 (1904) 年 5 月 5 日に発刊された。昭和 21 年 (1946) 12 月号で創刊 500 号、昭和 30 年 (1955) 4 月号で創刊 600 号を迎えた。徳永直は当初小説の寄稿を考えていたが、「レニングラード見物記」を寄稿した。「表紙と目次で見る『新潮』110 年」、新潮社 (<https://www.shinchosha.co.jp/shincho/100year/>)。
- 11 どの雑誌を示すのかは不明。ソ連滞在にかんする寄稿は『新潮』の他、『新日本文学』、『群像』、『小説公園』の各誌に行われている。
- 12 『静かなる山々』は、この場にも同席していたリヴォワにより翻訳され、1952 年にソ連で出版されている。Токунага С. Тихие горы. Роман. М., 1952. またリヴォワの批評「徳永直の小説について」が『人民文

学』1952年10月号（第3巻第10号）に宮本春也訳で掲載されている。

- 13 キム、ロマン・ニコラエヴィチ Ким, Роман Николаевич (1899-1967)。ウラジオストク生。7歳で来日し、慶應義塾幼稚舎に入学、さらに慶應義塾普通部に進学。その後、ウラジオストクに戻り、極東大学を卒業するとモスクワに上京し、東洋学研究所で日本語などを担当。並行して芥川龍之介作品の翻訳などに従事。1930年前後からは諜報活動に携わるが、37年にスパイ容疑で逮捕、45年に釈放、1950年頃よりスパイ小説家となる。
- 14 この時期の日本共産党は、1950年1月のコミンテルン機関誌掲載の批判論文「日本の情勢について」を受けて（所感を発表して反論した）所感派と（批判を受け入れた）国際派に分派した後、レッドパージを受けて所感派が非合法活動に移行し、中国に亡命して北京機関を創設するなど、分裂状態にあった。
- 15 1945年8月の日本の敗戦後、ポツダム宣言および降伏文書に基づき連合国総司令部（GHQ）が設置され、対日政策にあたった。1951年9月8日にサンフランシスコ講和条約が調印され、日本は独立を回復してGHQは廃止されたが、同日、日米安保条約も締結された。これらの動きと並行して、レッドパージ（共産党員とその支持者の公職追放）や（戦争犯罪者の）公職追放の解除、再軍備が行われた。これを「逆コース」と呼ぶ。この背景に中華人民共和国成立（1949）と朝鮮戦争（1951-53）があった。
- 16 1949年8月17日、福島県の東北本線松川駅付近で列車が転覆して乗務員3名が死亡した事件。共産党員ら労組員20名が起訴されると、労働運動への弾圧として、作家の広津和郎を始めとする知識人らが公正な裁判を求める運動を起こし、無罪を勝ち取った。真相は不明のままだが、初代宮内庁長官の田島道治が遺した昭和天皇との「拝謁記」には「松川事件はアメリカがやつて共産党の所為にした」との天皇の言葉が残されている。田島道治『昭和天皇拝謁記 初代宮内庁長官田島道治の記録5』岩波書店、2022年、214頁。
- 17 現・文藝学校。1953年に新日本文学会の『人民文学』のグループを母体として開校。ねじめ正一、野崎六助、河林満、樋口有介、辻内智貴、盛田隆二らを輩出した。2003年、新日本文学会の解散を機に、現名称に改称。
- 18 阿川弘之「間の遺産」は『新潮』1953年7-11月号に連載され、1954年に新潮社より刊行。
- 19 足柄定之『鉄路のひびき』理論社、1954年。『人民文学』に連載された後、単行本化された。
- 20 春川鉄男『日本人労働者』作家出版社、1954年。
- 21 杉浦明平（1913-2001年。すぎうらみんべい）。杉浦明平『基地605号』大日本雄弁会講談社、1954年。
- 22 霜多正次『軍作業』、『新日本文学』1954年9月号掲載。
- 23 宮城県塩竈市の坂病院に入院中の患者で、周囲の人々の協力を得て、「生きる」を『人民文学』1954年3-7月号に連載した。
- 24 江馬修（1889-1975年。1946-66年、日本共産党員）。『人民文学』初代編集長。『山の民』（飛騨考古土俗学会、1938-40）は幕末の岐阜高山を舞台とした歴史小説。
- 25 中野重治『むらぎも』筑摩書房、1949年。
- 26 佐多稲子（1904-98）。1932年共産党入党、64年に野間宏らとともに除名。「若い意欲」は『文藝』1954年10月号に掲載、後に『夜の記憶』（河出書房、1955年）に収録された。「ズボンを買いに」は『文藝』1951年7月号に掲載、後に『みどりの並木路』（新評論社、1955年）に収録された。
- 27 『鶏の歌』という作品があることから、児玉花外を当てたが、時代がずれているため、異なる可能性も高い。
- 28 原文は山田うた子を示唆するが、前後関係からは宮本百合子以外の可能性はないと判断した。
- 29 『人民文学』の紙面ではその死の直後から宮本百合子は繰り返し糾弾された。
- 30 以下を指すと思われる。岩上順一「宮本百合子の生涯と生涯と文学（上・下）」『人民文学』4(2)、(3)、1953年。
- 31 この時点ですでに『宮本百合子全集』（河出書房、1951-1953年、全15巻）が刊行されていた。
- 32 筆名タカクラ・テル。当時、日本共産党の北京機関に加わり、中国滞在中だった。北京機関とは、1950年のコミンフォルムの批判に伴う日本共産党の分裂後に、団体等規正令に伴う出頭命令を拒否した、いわゆる所感派の徳田球一や野坂参三らが中国に亡命して創設したもので、中央党学校のほか、日本自由放送を日本向けに行っていた。
- 33 岩上順一『志賀直哉』三笠書房、1955年。
- 34 ゴーリキー『作家論』みすず書房（ゴーリキー文学論集1）、1954年。

- 35 1950 年 10 月発刊。藤森成吉、江馬修、徳永直、除村吉太郎・岩上順一、松田解子、野間宏らを中心とし、後に安部公房や杉浦明平も加わった。註 14 も参照のこと。
- 36 雑誌『人民文学』が『文学の友』と改称して、再出発したことを指す。1953 年 11 月 /12 月合併号（第 4 巻第 11 号）まで『人民文学』、1954 年 1 月号（第 5 巻第 1 号）から『文学の友』として発行された。1955 年 2 月号（第 6 巻第 2 号）が最終号となった。発行継続の意志とともに「財政上の困難」が繰り返し表明されていた（64 頁）。
- 37 『新日本文学』での徳永の説明は以下の通り。「『私たちは、政党内におこった対立が文学団体内に対立をうみ、『新日本文学』と『人民文学』との対立をうみだしたと、それが解決に達し『人民文学』が廃刊され、『文学の友』は労働者農民の文学を育てるという特定の任務を持って刊行されたこと、したがって、『新日本文学』と『人民文学』は協力関係となり統一の方向に前進したことを出来るだけ慎重に答えました」（『ソヴェト同盟をたずねて』134 頁）。
- 38 ネムゼル、レフ・アナトリーエヴィチ Немзер, Лев Анатольевич。日本学者、露和辞典の編者。
- 39 藤森成吉は、1930 年にドイツ行きの査証で出国し、ソ連に密航し、世界プロレタリア作家会議ハリコフ大会に出席し、日本のプロレタリア文学を紹介するなど、ソ連において日本の代表的なプロレタリア作家として知られていた。『人民文学』の創設者の 1 人であり、創刊号（1954 年 11 月号）には「文学者と平和を守る運動」を寄稿していた。
- 40 1955 年に『悲しき愛』（角川小説新書）が刊行された。
- 41 Dolio をロシア語で綴ると Долно、独歩は Донпо となり、非常に似ているため、誤記したものと思われる。
- 42 吉田茂内閣の 1954 年 12 月 9 日の総辞職を指す。この直後に日本民主党単独により鳩山一郎内閣が成立、翌年 12 月、いわゆる保守合同により自由民主党が結成され、日本社会党の再統一とともにいわゆる 55 年体制の成立に至った。
- 43 広島市翠町（爆心より約 3 km）で被災し、49 年に新日本文学会に入会、同年、日本共産党に入党。52 年に『原爆詩集』（青木文庫）を出版。翌年 3 月 10 日に死去（伝記事項から推定。原文表記は、理由は不明だが、川路柳虹と混同した可能性がある）。
- 44 現代詩人会編『死の灰詩集』宝文館、1954 年。
- 45 松川詩集刊行会編『松川詩集』宝文館、1954 年。
- 46 「峠三吉の『原爆詩集』をはじめ、持参した『広島』、『松川詩集』、『死の灰詩集』、『松川歌集』などあげたらみんな喜んでくれました」（徳永「ソヴェト同盟をたずねて」134 頁）。
- 47 速記録自体には加筆された痕跡はないが、「ソヴェト同盟をたずねて」にはモスクワ滞在中にまとめられた推奨作品のリストが掲載されている。
- 48 1954 年 11 月 27 日から三日間、神田共立講堂（11/27-28）・東京体育館（11/29）で開催された「原爆許すまじ 1954 年日本のうたごえ祭典」を指すと思われる。
- 49 東京交響楽団は常任指揮者の上田仁のもと、ソ連音楽の初演を次々に行っていたことで知られる。
- 50 いずれも、大映画会社ではなく、いわゆる「独立プロ」の作品。順に山本薩夫、北星、亀井文夫が監督を務めた。

（うめつ のりお 教育推進機構 国際キャリア科 非常勤講師・客員研究員）

（よしだ もりお 教育推進機構 国際キャリア科 教授）

# 短期留学が大学生に与える影響

——工学院大学のニュージーランド語学研修のケース——

山 田 朋 美

## The Impact of Short-term Study Abroad Programs on University Students:

A Case Study of the New Zealand Language  
Training Course Offered by Kogakuin University

YAMADA Tomomi

### 0. 概要

工学院大学では在学生の英語力および異文化コミュニケーション能力を高めるため、さまざまな留学プログラムを実施している。2018年度からはニュージーランドにおいて語学研修を行ってきた。参加学生にアンケートをした結果、2022年度に実施された語学研修は英語力はもちろんのこと、異文化理解、そして日本に対する理解を深める効果があったと捉えることが可能であることがわかった。

### 1. はじめに

近年のグローバル化に対応するため、英語によるコミュニケーション能力や異文化理解能力の必要性が広く認識されている。そして、それらを身につけるために海外留学が有効であることは日本においてもしばしば指摘されている<sup>1</sup>。工学院大学でも、英語力およびコミュニケーション能力の向上と異文化理解のために、1990年代から語学研修を実施している。本稿では、本学の語学研修プログラムが参加者の英語力や異文化理解に対してどのような影響を与えたのかを考察するための準備段階として、2022年度に実施されたニュージーランド語学研修の参加者を対象に実施したアンケートの調査結果について報告する。

## 2. 語学研修概要

まず、2022 年度に工学院大学で実施された語学研修の概要について説明する。研修は 2022 年 2 月 25 日から 3 月 18 日までの 22 日間、ニュージーランドのオークランドで実施され、24 名の学生がこれに参加した。参加学年は、1 年生 8 名、2 年生 12 名、3 年生 2 名、4 年生 2 名であった。また参加者の内 1 名はアジアからの留学生であった。

### 2-1 事前授業

ニュージーランド出発の約 2 週間前に対面で事前授業が実施された。この授業は国際キャリア科の教員が担当し、ニュージーランドの歴史に関する講義や、現地フィールドワークの説明、参加にあたっての目標設定に関する指導が行われた。加えて、担当教員がニュージーランドを理解するために設けた多岐に渡るテーマ（地理と気候、火山・温泉・地震、政治、女性首相、エコツーリズム、文学、映画、スポーツ、宗教、教育、料理等）の中から、参加者が関心を持ったものを一つ選び、それについて調べプレゼンテーションを行うことを通じて、ニュージーランドについての理解を深めると同時に、参加者が主体的に滞在先について学ぶことの重要性が指導された。

### 2-2 現地研修

現地では英語の習得およびニュージーランド文化の理解を重視するプログラムが実施された。英語の習得に関しては、参加者は現地語学学校において週 5 日英語の授業を受講した。滞在形式はホームステイで、学んだ英語の実践の他、異文化交流の経験を積む場が設けられた。さらに、ニュージーランドに対する理解を深めるために、国際キャリア科教員の引率の下、オークランド美術館（Auckland Art Gallery）、ニュージーランド海洋博物館（New Zealand Maritime Museum）、ホリー・トリニティ大聖堂（Holy Trinity Cathedral）および聖メアリー教会（St Mary's Church）、オークランド博物館（Auckland War Memorial Museum）でフィールドワークが行われた。フィールドワークでは、参加者は 4 名ずつグループに分かれ、グループのメンバーと対話しながら展示物を見学したり、展示物に関するクイズに挑戦したりした。参加者はこのフィールドワークを通して、ニュージーランドの歴史や社会、文化、宗教を学ぶと同時に、自分の考えを言語化しわかりやすく説明したり、自分とは異なる見解に触れる機会を重ねたりするなど、チームワークやコミュニケーション能力を養う経験をした。

## 3. 調査方法

本調査は、語学研修が参加学生に与える影響を把握するために、語学研修先のニュージー



ランドに出発する前および帰国後に参加者に対して実施された。調査方法は、Google Formsを用いたアンケートを実施し、Google FormsにアクセスするためのURLは、本学のLMSで参加者に通知した。回答期間は、出発前アンケートに関しては2023年2月22日から25日まで、帰国後アンケートは2023年3月19日から4月8日までとした。調査対象は、語学研修に参加する学生24名とし、出発前のアンケートに対しては17名（参加者の約70%）から、帰国後のアンケートに対しては20名（参加者の約83%）から回答があった。調査項目は出発前アンケートが41項目（選択式9問、自由回答式32問）、帰国後アンケートが26項目（選択式8問、自由回答式18問）の質問から構成されている。なお、調査項目に関しては資料に掲載した。

## 4. アンケート結果分析

### 4-1 プログラムの参加者層

まず、語学研修の参加者層についてアンケートから明らかになったことを述べる。図1は参加者の海外渡航経験の有無を示したものである。回答者の82.4%（14名）が海外渡航経験が「ある」と回答し、「ない」と答えたのは17.6%（3名）であった。また海外渡航経験が「ある」と回答した学生に対し、渡航理由を尋ねた結果をまとめたものが図2である。回答者の内10名が「観光」と答えた一方で、「親の仕事」や「留学」での海外滞在経験がある学生もいた。

海外滞在期間については、図3が示す通り回答者の85.7%が「3ヶ月未満」であり、「1年以上」の長期滞在経験のある学生は14.3%であった。また、渡航経験のある国はアジアが9名と最も多く、次いで北米（グアムを含む）が6名、オセアニアが3名、ヨーロッパが2名であった（図4）。なお、語学研修の実施先であったニュージーランドに滞在経験のある学生はおらず、全員が初渡航であった。

語学研修参加の動機については、図5で示す通り、「英語力」の向上を挙げた学生が最も多かった。次いで、ニュージーランドの文化や社会への関心、留学や海外渡航、異文化体験へ

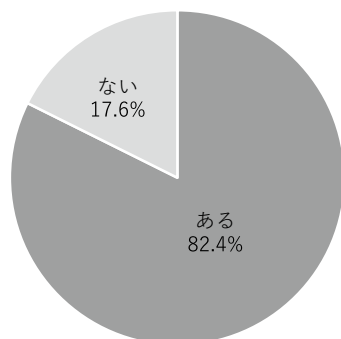


図1 語学研修参加者の海外渡航経験の有無

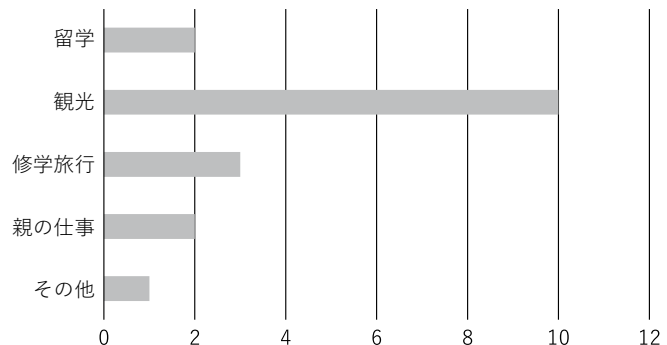


図2 海外渡航経験者の渡航目的（複数回答可）

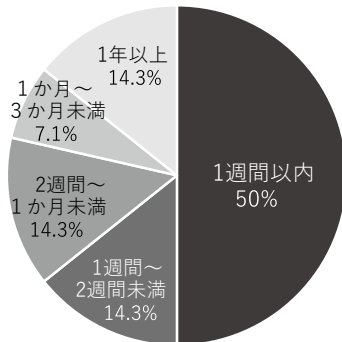


図 3 海外滞在期間

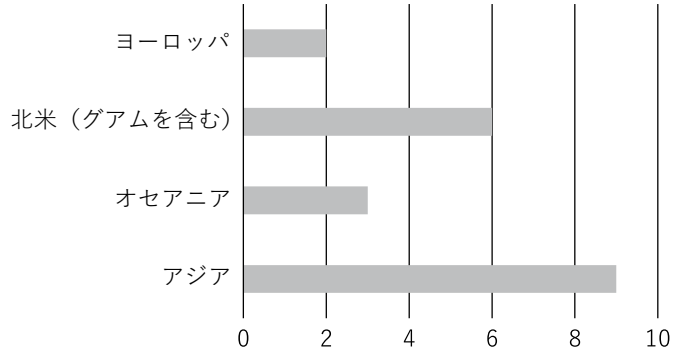


図 4 渡航経験のある地域

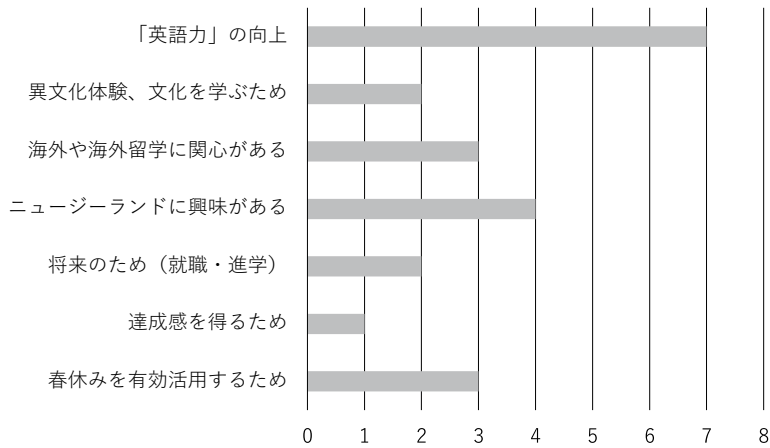


図 5 語学研修に参加した動機

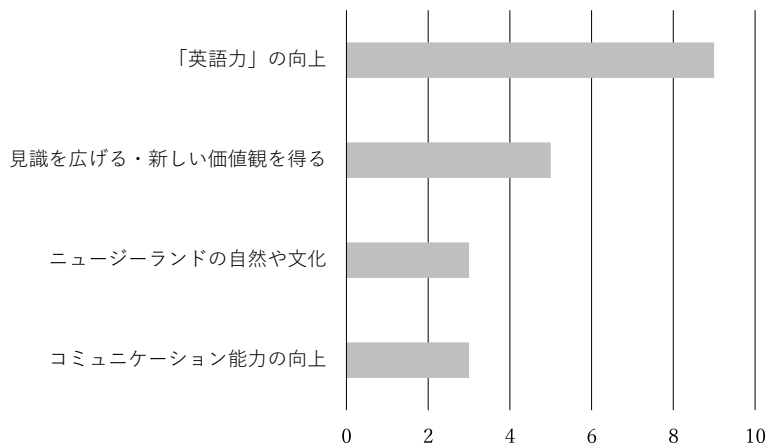


図 6 語学研修に期待すること

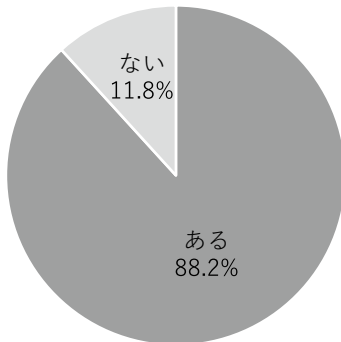


図7 語学研修参加にあたって不安に思っていること

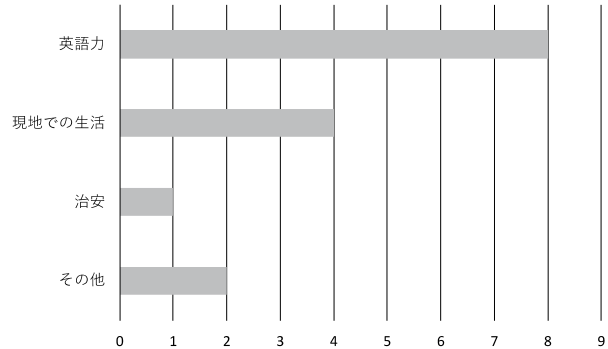


図8 語学研修参加にあたって不安に感じていること

の関心が続いた。これらは自分とは異なる文化と触れることを目的とする点では同じカテゴリーに分類することができる。他方で、就職や進学のためという将来を見据えた回答をした学生は2名となった。語学研修に期待することについては、やはり「英語力」の向上を挙げた学生が最も多く9名であった。次いで、見識や価値観を広げること、ニュージーランドの自然や文化を体験すること、コミュニケーション能力の向上への期待が見られた(図6)。

さらに、参加にあたって不安に感じることを尋ねたところ、全体の88.2%(15名)の学生が「ある」と回答した(図7)。そして、不安を感じている参加者の53.3%(8名)が英語を使っのコミュニケーションをその理由として挙げた一方、現地の生活に馴染めるかどうかを挙げた学生は、回答者の26.6%(4名)であった。

これらからは、今回の語学研修の参加者の多くが、既に海外滞在経験があったり、もともと海外に関心を持っており、英語力の向上だけではなく異文化交流や視野を広げることが目的に参加したことがわかる。また、図7および図8が示すように、参加に当たり語学力に不安を感じる学生が多い一方で、海外渡航経験者が多かったためか海外での生活自体に不安を感じた学生はさほど多くはなかったことが伺える。

#### 4-2 「英語力」に及ぼした影響

この語学研修が参加学生に及ぼした影響を「英語力」の視点から見ていく。図9は、学生が語学学校の授業で最も勉強になったことを示したものである。回答者の70%(14名)が英語と回答し、その中では発音やアクセントを挙げた学生が最も多く、リスニング、スピーキング、語彙、文法が続いた。

また、この語学研修によって自分の英語力が伸びたと感じる参加者も多かった。図10は、帰国後のアンケートで、参加者が語学研修に参加したことで自分の英語力がどれくらい伸びたと思うかを10段階(1が「伸びなかった」、10が「大いに伸びた」)で示した結果である。回答者の半数が「8」以上と回答し、その理由としてはスピーキング能力に言及した参加者が

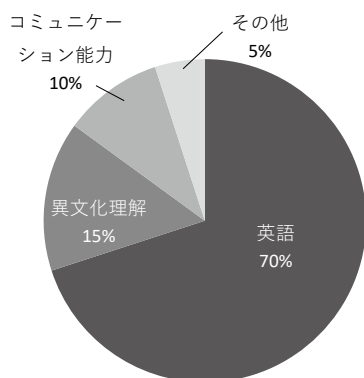


図 9 現地語学学校で最も勉強になったこと

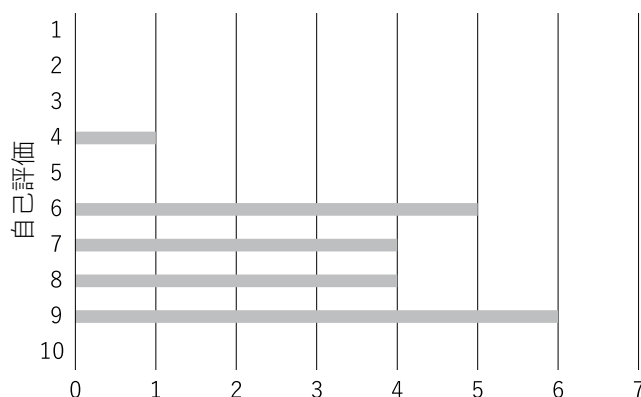


図 10 語学研修による「英語力」の伸び

最も多く 9 名であった。しかし、その内訳を見ると、6 名は語学研修参加前よりも向上したと肯定的に評価する一方で、3 名は十分に身に付かなかったという評価であった。スピーキング能力が向上したと評価している参加者のうち 3 名は、文法をより意識して話せるようになった点を評価していた。次に多かったのが、リスニング能力が参加前よりも伸びたとの回答で 6 名であった。また、発音やアクセントが上達した、語彙力が身についたという理由も挙げられた。また、具体的に伸びたと感じるスキル以外に、参加前よりも英語を話すことに自信が持てるようになったと評価する学生もいた。なお、これらはあくまで参加学生の自己評価であり、英語の伸びを試験等で測ったものではない。ただ、参加学生の多くが語学研修前と比べ、特にスピーキングとリスニングにおいて英語力の伸びを実感していることがわかった。

#### 4-3 異文化理解に及ぼす影響

次に、この語学研修が参加学生に及ぼした影響を異文化理解の視点から見ていく。ニュージーランド滞在を通し、現地の社会や人々、文化に対する理解がどのように深まったかを考察するために、出発前のアンケートでニュージーランドとその社会・文化・人々に対するイメージを尋ねた。その結果は表 1 で示されている通りである。ニュージーランドと聞いてイメージするものとして最も多く挙げられたのは「羊」であった。続いて「豊かな自然」や「温暖な気候」が挙げられた。また社会に対するイメージとしては、「女性の社会進出が続いている」、「治安がいい」が最も多かった。文化については「マオリ文化」が最多で、その次が「イギリス文化の影響」（ラグビーも含む）であった。「ニュージーランド人」については「優しい・温厚」が最も多く、「多人種・多国籍」、「背が高い」がそれに続いた。また、これらのイメージ形成の情報源を尋ねたところ、テレビを挙げた参加者が最も多く 7 名、次いでインターネットと事前授業が各 6 名、本やガイドブックが 4 名であった（図 11）。

表1 【語学研修参加前】ニュージーランドに対するイメージ

項目	人数	回答
ニュージーランド	10	羊
	4	自然が豊か
	3	温暖な気候
	3	治安がいい／平和
	2	ラグビー
	各1	島国／独特の文化／火山／ロードオブザリングの撮影地／他
ニュージーランド社会	6	女性の社会進出が進んでいる
	6	治安がいい／平和
	各1	酪農が盛ん／テクノロジーが最先端／福祉が充実／環境問題に取り組んでいる／平等／日本より生活しやすい
ニュージーランド文化	6	マオリ／先住民がいる
	5	イギリス文化に近い／ラグビー
	各1	日本に似ているところもある／伝統を重んじる／島国文化／自然を大切にする／差別が少ない／他
ニュージーランド人	5	優しい／温厚
	3	背が高い
	3	様々な人種の人がいる／多国籍
	2	マオリ／先住民民族がいる
	2	明るい／外交的
	各1	愛国心が強い／スポーツが強い／お酒に強い／白人が多い／他

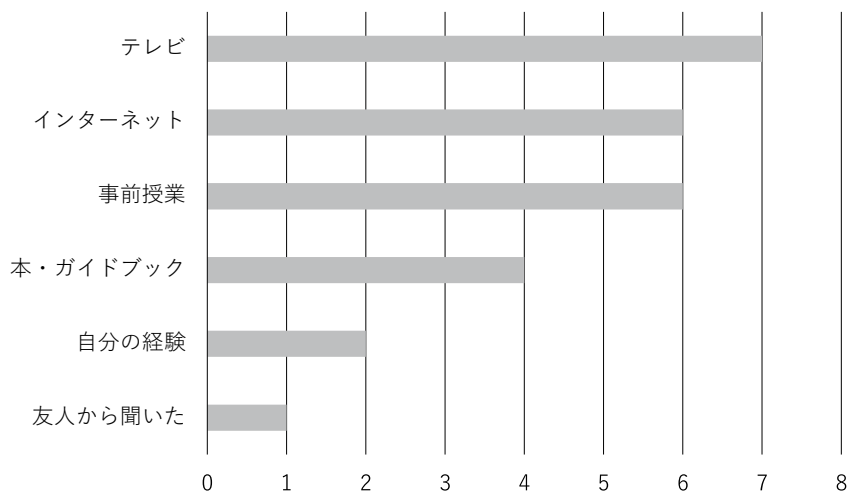


図11 ニュージーランドイメージの情報源

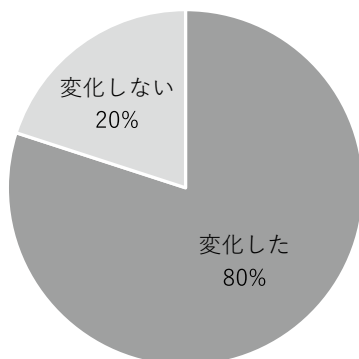


図 12 ニュージーランドに対する  
イメージ

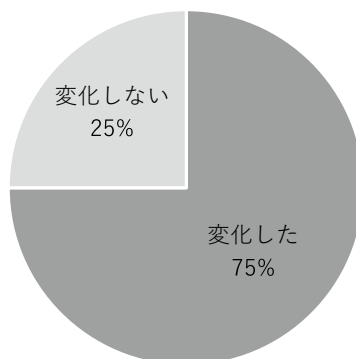


図 13 ニュージーランド社会に対  
するイメージ

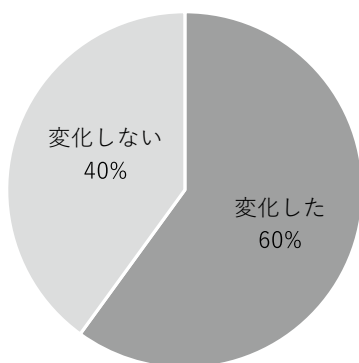


図 14 ニュージーランド文化に対  
するイメージ

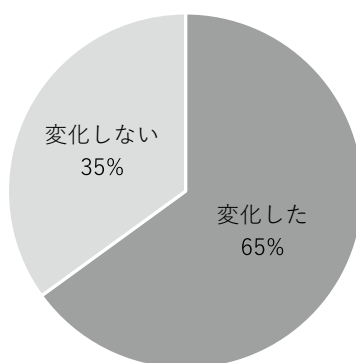


図 15 ニュージーランド人に対す  
るイメージ

そして、帰国後、参加者に上述のそれぞれのイメージが変化したかを尋ねたところ、図 12～図 14 から分かるように、いずれの項目でも 3 分の 2 以上の参加者が「はい」と回答した。その具体的な回答の一部を挙げたのが表 2 である。

まず、国家としてのニュージーランドについては、出発前は旅行番組で報じられるようなイメージが主であったが、帰国後には「思ったよりも多文化・多民族国家」であった等、多様な人々が共存している国家であることを挙げた回答が最も多かった。ニュージーランド社会については、「プライベートの時間を大切にしている」、「社会の構成メンバーに民族的多様性がある」等の回答が寄せられた。文化については、「マオリ文化の尊重」が最も多かった。ニュージーランド人については、「優しい」と回答した参加者が最多であった。その理由としては、知らない人でも気軽に挨拶してくれる、困っていると助けてくれる、話しやすい等の説明が加えられており、多くの学生たちが現地の人々の温かい助けに支えられていたことが読み取れる。国家としてのニュージーランドと、その社会、文化、国民はもちろん相互に関

表2 【語学研修参加後】 ニュージーランドに対する認識

項目	人数	回答	
ニュージーランド	4	人種・文化の多様性	思っていたよりも様々な国の文化が混合していた／どこの出身の人なのかはわからないがアジア系だろうなという人がかなり多かったのは発見だ。アジアに対する関心や理解力のある国だと実感できた／他
	2	国民性	日本とは違う人の目を気にしない大胆さがあり、話しかけたら笑顔で対応してくれる／思っていたより自由に暮らしている
ニュージーランド社会	3	ライフスタイル	多くの人が時間を大切にしており、日本よりも時間が遅く流れているような感覚だった／自己肯定感が高く人生を楽しんでいるように見えた／終業時間が早い
	3	多様性	様々な国にルーツを持つ人々が暮らしている／自分が想像していたよりも多様性が認められている／他
	2	インフラ	想像以上にインフラがしっかりしている／他
ニュージーランド文化	10	マオリ	皆マオリに対しては特別な敬意を持っており、グローバル化の中でもマオリ文化を保存するという強い意志を感じた／バスのアナウンスなど、マオリの文化が日常的／マオリのパフォーマンスやティキなどを知り、興味を持った／他
	3	多様性	1つの文化というよりはたくさんの文化に触れられたから／複数の文化がごった煮になっていた／他
ニュージーランド人	5	優しい・親切	非常に穏やかで優しく、街中で困っていた時も通りがかった人が声をかけて助けてくれた／海外の人は少し怖いイメージがあったがニュージーランド人はとても優しくしてくれた／アジアに対する理解力があり温かった／他
	1	隣国との関係	同じオセアニアであるオーストラリアには絶対に負けられないというライバル意識はあるが、普段はとても仲が良いのは興味深かった。日本と隣国との関係とは異なる

係しているものではあるが、回答者の中にはそれらの違いを明確に認識せず回答が重複しているものもあった。

語学研修参加後のニュージーランドに対する認識を参加前のものと比較すると、主に2つの指摘が可能である。まず、自国との大きな違いがその国の特徴として印象に残るということである。帰国後のアンケートでは、ニュージーランド、ニュージーランド社会、ニュージーランド人に対するイメージで、多様性やマオリに言及する回答の増加が見られた。語学研修の出発説明会や事前研修等でニュージーランドが多文化社会であるということやマオリ文化が尊重されていることは伝えられていたものの、出発前にそれらに関心を寄せていた学生はさほど多いとは言えなかった。しかし、オークランド滞在経験を通じて、複数の学生がニュージーランド社会やその文化の特徴として人種や文化の多様性を挙げるようになった。日本においては、全国でも外国人の割合が多いとされている東京でさえ、その割合は約4%に過ぎない<sup>2</sup>。そのような日本と比較すると、海外出身者が人口の42%を占めるオークランドの様子は<sup>3</sup>、参加者にとって大きな驚きであったことが想像できる。また、ニュージーランドにおけるマオリ文化の位置付けについても、先住民族のアイヌをはじめとするマイノリティーの権利への関心が薄い、場合によっては軽視される言動が罷り通っている日本において、例えばバス車内でのアナウンスが英語よりも先にマオリ語でなされる等マオリ文化を尊重する意思が感じられるニュージーランドの経験は、学生達の知見を広げるものであったことと思われる。2点目としては、ニュージーランド人に対する見方の変化が挙げられる。語

学研修前から、「優しい」、「温厚」というイメージはあったものの、同時に「マオリ」「白人」といった属性で他者を捉える視点も存在した。しかし、帰国後のアンケートではそのような視点は大幅に減少し、個人でニュージーランド人を捉える視点に変化したことがわかる。もちろん、参加者の行動範囲や英語でのコミュニケーション能力、それに伴う情報収集能力の限界等の影響はあるものの、語学研修を通じてニュージーランドに対する理解は広がり、また現地の人々に対しては同じ人間として型にはめない見方が可能になったことが伺える。

#### 4-4 日本に対する認識の変化

最後に、ニュージーランドでの語学研修の経験が、日本に対する認識にどのような変化を与えたのかアンケート結果から確認する。帰国後のアンケートで日本に対する認識の変化を尋ねたところ、75%の参加者が日本に対する認識が変化したと回答した(図16)。以下で、どのように変化したのかを見ていく。

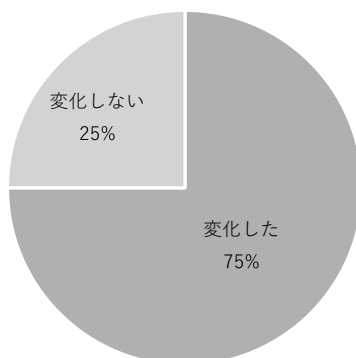


図 16 日本に対する認識

参加者が語学研修に参加する前の日本に対する認識は、表3で示される通り「治安がいい」、「四季がある」、「平和」、「独自の文化・伝統的な文化を持っている」といった全体的に肯定的もしくは中立的と解釈できるものであった。他方で、日本社会に対する認識については、今後改善が必要とされる問題を抱えた社会としての側面を取り上げたものが少なくない。解答した学生の半数以上が、「高齢化」、「経済の低迷」、「男性優位」等の問題点を取り上げた。他方、肯定的な認識を示したものとしては、「ルールを守る」、「治安がいい」などが挙げられた。日本文化の特徴については、「独自の文化・特殊」、「長い歴史を持っている」、「伝統がある」等の回答が寄せられた。意外なことに、アニメや漫画、ゲームといったサブカルチャーを挙げた学生は1名のみであった。日本人に対する認識としては「内向的・消極的」が最も多く、続いて「優しい・お人好し」、「礼儀正しい」であった。これらから、日本という国家やその文化、日本人に対しては肯定的に捉えている参加者が多数を占める一方で、日本社会に対してはやや否定的な見方が示されていたことがわかる。



表3 【語学研修参加前】日本に対する認識

項目	人数	回答
日本	4	安全／治安がよい
	3	四季がある
	2	平和
	2	歴史が長い／伝統的な行事がある
	2	独特の文化を持ちつつ、他国の文化も取り入れている
	2	独自の文化がある
	2	島国
	2	自然に恵まれている
	各1	生活ペースが早い／きれい／都市が発展している
日本社会	4	少子高齢化
	3	規律がある／治安がよい
	2	経済的に低迷
	2	男性優位
	2	女性の社会進出が進みつつある
	各1	面倒／几帳面／歪／懐古主義／政治への関心が低い／堅実
日本文化	7	独自の文化がある
	4	伝統がある
	各1	サブカルチャー／海外のものを独自に進化させるのに長けている／植物を使った文化が多い／和／豊か／閉鎖的
日本人	10	内向的／おとなしい／消極的
	6	優しい／お人好し
	3	礼儀正しい
	各1	面倒／慎重／丁寧／綺麗好き

では、帰国後の日本に対する認識はどのように変化したのだろうか。学生の回答をまとめた表4からは、二つの傾向があることがわかる。1つ目は日本の良い点を改めて実感したものである。現地で日本のことを褒められる等の経験をし、日本はいい国であると実感したとの回答が見られた。2つ目は、日本の問題点を具体的に指摘するものである。その問題点も、さらに3つに分類される。1点目は日本における人間関係の堅苦しきや、それゆえの生きづらさを指摘するものである。これは、人の目を気にせず自由に暮らす一方で、困っている人には積極的に手を差し伸べる人々を目の当たりにしたことにより認識するようになったものと考えられる（表2）。2点目はライフスタイルである。ホストファミリーを含め現地の人々が自分の時間を大切にしながら人生を楽しんでいる様子から、自分の時間より仕事を優先する日本人の生き方に対しての問題提起が見られた。3点目は多様性の欠如である。先住民族や

表 4 【語学研修参加後】日本に対する認識

項目	参加学生のコメント（一部抜粋）	評価	人数
社会	LSI での経験から、日本はアジアの中でも特に先進国であるのだと、改めて実感しました。授業で男女平等についてディスカッションした際に、特に日本はその点では優れていると言っていて、改めて実感するきっかけとなりました。	日本の良い点	3
文化	出会った多くの人が日本の何かしらの文化に対してリスペクトを持っていた。日本には悪い側面もあるが、多くの魅力的な文化をもっていて世界中から愛されている国であると感じた。自分は日本のネガティブな部分しか見ていなかったが、ニュージーランド生活を経験して日本に対する考え方が変わった。		
生活	家での生活から、日本の水を幾らでも使えるような環境が当たり前のことから、ありがたいことだと感じる。		
人間関係	LSI の学生やホストファミリーとの交流を通して、ニュージーランドと日本を比較してニュージーランドの人々は社会的でラフな雰囲気ということが分かりました。もっと日本でも社会的な雰囲気を取り入れると、柔軟な考え方が身につくのではないかと考えます。	日本の課題	4
	日本は気を遮う文化で、良いことがある反面、生きづらいと思った。／他		
ライフスタイル	今までは今の日本人の生活スタイルが当たり前で考えたこともなかったが、日本人はもっと自分の時間を持つべきという視点を持つようになった。自分の時間を持ち、自分の趣味のためにお金を使うべきだと思った。ニュージーランドでは皆が仕事とは別に、自分の人生を楽しんでいた。日本は仕事で働きすぎて、帰宅してからの自分の時間を過ごすという余裕がない。／他		3
マイノリティ	ニュージーランドの先住民のマオリの人たちの象徴である刺青を誇りに思っていることが伝わってきた。日本では、刺青を入れている人は公共のお風呂に入れない。日本でも刺青を入れている人に対する恐怖心をなくすためのとりくみをしたほうがよいと考えられるようになった。		2
	ニュージーランドでは、特に性的マイノリティへの理解が強かった。日本は、変わってきているとは考えていたが、日本ではまだまだ理解されていないのだろうと思った。		
多様性	ニュージーランドには様々な人がいて、多くの言葉や文化があった。そのため、日本に戻ってから、日本語以外を話していたら浮いてしまう、というような点に疑問を持った。これまで特に気にしていなかったが、閉鎖的な国だと思うようになった。		2
	アジア系、ヨーロッパ系など多民族、多国籍国家のニュージーランドでの生活を経て、日本という国が多国籍人（ママ）の少ない鎖国国家なのだとわかった。		

LGBTQ、移民等の権利を尊重しようとするニュージーランド社会で生活することにより、日本における多様性の欠如や閉鎖性を認識する学生も見られた。これは語学研修参加前に日本の多様性の欠如や排他性に言及していた学生がほぼいなかった（表 3）ことと比較すると大きな変化である。

## 5. まとめ

このように、2022 年度に実施した語学研修のアンケート調査は、語学研修が英語力の向上はもちろん、研修先の社会や文化への理解を深め、さらには日本に対する理解や問題意識をも深める効果があったことが伺える結果を示した。もちろん、参加者が接した現地の人々は限られており、またニュージーランドの一側面を垣間見たに過ぎないが、語学研修が自分たちの「当たり前」を問い直す契機になったことは、参加者が大学卒業後に社会の一員としてよりよい社会を築くためには特に重要な視点であると言える。今後はこのアンケート結果を通じて語学研修プログラムの効果の分析をより深めると同時に、プログラムを改善するために検討を積み重ねていきたい。

### 謝辞

語学研修の現地フィールドワークを担当するにあたり、事前授業を共に担当して下さった吉田司雄先生には多くのご助言をいただきました。また、グローバル事業部の皆様には語学研修の実施にあたり多方面でご協力をいただきました。ご助力を賜りありがとうございます。

### 注

- 1 平成 16 年度から 3 度にわたって実施されている日本学生支援機構における一連の調査（日本学生支援機構「海外留学経験者の追跡調査」）では、留学が語学や異文化理解において参加者に与える影響が指摘されている。他方、野水らによる研究（野水勉・新田巧「海外留学することの意義：平成 23・24 年度留学生交流支援制度（短期派遣・ショートビジット）追加アンケート調査分析結果から」『留学交流』第 40 号、2014 年、[https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/\\_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201407nomizunitta.pdf](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201407nomizunitta.pdf)）では、留学期間によってはその効果は限定的なものであるとも指摘されている。
- 2 「くらしと統計 2023 年」東京都統計局統計部  
<https://www.toukei.metro.tokyo.lg.jp/kurasi/2023/ku23-29.htm>（閲覧日：2023 年 12 月 1 日）
- 3 Auckland Index. *Tātaki Auckland Unlimited*  
<https://industry.aucklandnz.com/auckland-index/people>（閲覧日：2023 年 12 月 1 日）

### 参考文献

- 上村妙子「留学を通して学ぶ異文化コミュニケーション——英語学習と異文化理解の側面からの考察——」『専修人文論集』102 号、2018 年。
- 工学院大学「工学院大学留学プログラムガイド」[https://www.kogakuin.ac.jp/about/action/fbb28u0000007nap-att/guide\\_202304.pdf](https://www.kogakuin.ac.jp/about/action/fbb28u0000007nap-att/guide_202304.pdf)（閲覧日：2023 年 12 月 1 日）
- 東京都統計局統計部「くらしと統計 2023 年」<https://www.toukei.metro.tokyo.lg.jp/kurasi/2023/ku23-29.htm>（閲覧日：2023 年 12 月 1 日）
- 日本学生支援機構「海外留学経験者の追跡調査」[https://www.jasso.go.jp/statistics/ryugaku\\_abroad\\_tsuisei.html](https://www.jasso.go.jp/statistics/ryugaku_abroad_tsuisei.html)（閲覧日：2023 年 12 月 1 日）
- 野水勉・新田巧「海外留学することの意義：平成 23・24 年度留学生交流支援制度（短期派遣・ショートビジット）追加アンケート調査分析結果から」『留学交流』第 40 号、2014 年、[https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/\\_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201407nomizunitta.pdf](https://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2021/02/18/201407nomizunitta.pdf)（閲覧日：2023 年 12 月 1 日）
- Auckland Index. *Tātaki Auckland Unlimited*. <https://industry.aucklandnz.com/auckland-index/people>（閲覧日：2023 年 12 月 1 日）

**資料：アンケート項目一覧****【出発前実施アンケート】**

1. 海外渡航経験はありますか？
2. (1で「ある」と回答した人) 何を目的とした海外渡航でしたか？(複数回答可)
3. (1で「ある」と回答した人) どのくらいの期間の海外渡航でしたか？
4. (1で「ある」と回答した人) これまで滞在したことのある国を答えてください。
5. (1で「ない」と回答した人) これまで海外渡航しなかった理由を答えてください。
6. これまで、国際交流をしたことはありますか。
7. (5で「ある」と回答した人) 具体的にいつ、誰と、どのような交流をし、それに対してどのように思いましたか。
8. (5で「ない」と回答した人) これまで国際交流をしなかった理由を答えてください。
9. 本学の語学研修プログラムをいつ、どのように知りましたか？
10. ニュージーランド語学研修に参加した理由を可能な限り詳しく説明してください。
11. ニュージーランド語学研修に期待していることはありますか？
12. (11で「ある」と回答した人) 具体的にどのようなことを期待していますか。
13. (11で「ない」と回答した人) その理由を答えてください。
14. ニュージーランド語学研修に参加するにあたって不安に思っていることはありますか？
15. (14で「ある」と回答した人) 具体的にどのようなことに不安を感じていますか。
16. (14で「ない」と回答した人) その理由を答えてください。
17. ニュージーランド語学研修終了後、また海外渡航をしたいと考えていますか？
18. (17で「はい」と回答した人) どの国で何をしたいですか。具体的に説明してください。
19. (17で「いいえ」と回答した人) その理由を答えてください。
20. 今回のニュージーランド語学研修に参加するにあたって、これまでどのような準備をしましたか？ 現時点でしたことを挙げてください。
21. ニュージーランド語学研修について、先輩から体験談を聞いたり、アドバイスをもらったりしましたか。
22. (21で「はい」と回答した人) どのようなことを聞いたか(またはどのようなアドバイスをもらったか) 具体的に説明をしてください。
23. (21で「いいえ」と回答した人) その理由を答えてください。
24. ニュージーランドという国に対するイメージを思いつく限り挙げてください。
25. ニュージーランド社会に対するイメージを思いつく限り挙げてください。
26. ニュージーランド文化に対するイメージを思いつく限り挙げてください。
27. ニュージーランド人に対するイメージを思いつく限り挙げてください。
28. 主にどのような媒体から 24～27で回答した内容の情報を得ましたか。
29. 日本という国はどのような特徴を持っていると思いますか。

30. 日本社会はどのような特徴を持っていると思いますか。
31. 日本文化はどのような特徴を持っていると思いますか。
32. 日本人はどのような特徴を持っていると思いますか。
33. あなたの考える代表的な日本文化とは何ですか。
34. ニュージーランド滞在中に機会があれば紹介したい日本文化を挙げてください。
35. 最近、どのようなニュース（国内外問わない）に関心を持っていますか。
36. 35 のように考えた理由を答えてください。
37. 自分は海外に対して関心をどのくらい持っていると思いますか。10段階で答えてください。
38. あなたがよいイメージを持っている国を1つ挙げてください。
39. 38. のように答えた理由を可能な限り具体的に説明してください。
40. あなたが悪いイメージを持っている国を1つ挙げてください。
41. 40. のように答えた理由を可能な限り具体的に説明してください。

#### 【帰国後実施アンケート】

1. LSI での授業で、最も勉強になったことを具体的に説明してください。
2. LSI での授業で、最も困難を感じたことを具体的に説明してください。
3. ホームステイを経験し、最も面白い／興味深いと思ったことを具体的に説明してください。
4. ホームステイを経験し、最も困難を感じたことを具体的に説明してください。
5. あなたは事前に立てた目標をどの程度達成できたと感じていますか？ 事前授業で記入した「NZ 語学研修 2022\_事前授業\_ワークシート」に書いた内容も確認しながら、回答してください。
6. 5 のように回答した理由を具体的に説明してください。
7. あなたは NZ 語学研修に参加し、どれだけ自分の英語力が伸びたと感じますか？ 事前に録音・録画した自己紹介も確認した上で、回答してください。
8. 7 のように回答した理由を具体的に説明してください。
9. 今回ニュージーランドに3週間あまり滞在したことで、この国に対するイメージは変化しましたか？
10. 9 のように回答した理由を具体的に説明してください。
11. 今回ニュージーランドに3週間あまり滞在したことで、ニュージーランド社会に対するイメージは変化しましたか？
12. 11 のように回答した理由を具体的に説明してください。
13. 今回ニュージーランドに3週間あまり滞在したことで、ニュージーランド文化に対するイメージは変化しましたか？

14. 13 のように回答した理由を具体的に説明してください。
15. 今回ニュージーランドに 3 週間あまり滞在したことで、ニュージーランド人に対するイメージは変化しましたか？
16. 15 のように回答した理由を具体的に説明してください。
17. 今回ニュージーランドに 3 週間あまり滞在したことで、日本に対する見方は変わりましたか？
18. 17 で「はい」と回答した人は、①ニュージーランドでのどのような経験から、②日本のどの部分に対する見方が、③どのように変わったのか、具体的に説明をしてください。
19. 17 で「いいえ」と回答した人は、その理由を具体的に説明してください。
20. 最近、どのようなニュース（国内外問わない）に関心を持っていますか。
21. 22 のように考えた理由を答えてください。
22. 自分は海外に対して関心をどのくらい持っていると思いますか。10 段階で答えてください。
23. あなたがよいイメージを持っている国を 1 つ挙げてください。
24. 23 のように答えた理由を可能な限り具体的に説明してください。
25. あなたが悪いイメージを持っている国を 1 つ挙げてください。
26. 25. のように答えた理由を可能な限り具体的に説明してください。

(やまだ ともみ 教育推進機構 国際キャリア科 准教授)

# 日本の現代小説における「てくれる」に対応する 中国語表現について

安 明 姫

## Chinese expression corresponding to “tekureru” in modern Japanese novels

AN Mingji

### 1. はじめに

日本語の「てくれる」は補助動詞として用いられる授受表現である。小学館（2015）及び講談社（2006）発行の日中辞典では、補助動詞「てくれる」は“给”、“给我”、“我(们)”を用いて訳されている。しかし、「てくれる」に対応する中国語表現には“给”が含まれない場合がある。つまり、原文に日本語の「てくれる」という表現があっても、中国語では“给”が省略されることが多く、“给”で訳されるとは限らない。本稿では森田（2002）の意味分類に基づき、地の文と会話の文から構成されていて「てくれる」の用例が豊富な日本の現代小説5冊及びその訳本である中国語版を対象にして「てくれる」の表現がどのように翻訳されているのかを明らかにする。

### 2. 先行研究

授受表現の構造に関する研究としては、宮地（1965）、村上（1986）、三宅（1996）などを挙げることができる。宮地（1965）では、受給補助動詞「～てやる・くれる・もらう」を述語末尾に持つ構文の基本は、受給動詞述語句の構文<sup>1</sup>にあると見るべきではあるが、それだけでなく、ちょうど受身の格の助動詞が構成した格関係と対応的な、内的な複雑さ<sup>2</sup>が加わると述べている。村上（1986）では site-yaru, site-kureru, site-morau のかたちの動詞を述語に持つ文、つまり「やりもらい構造の文」とか「受給表現の文」とよばれている文について大量の例を挙げて考察している。site-kureru 構文においては、一人称の人間が利益、恩恵の受け手として補語の位置にすえられるのが基本的な構造であると述べている。三宅（1996）で

は日本語の受益構文<sup>3</sup>における与格名詞句<sup>4</sup>の生起ということに着目して考察を行っている。

「てくれる」に着目して考察を行った西川（1995）では、「てくれる」は事象についての表現主体の感情表現であり、恩恵の受け手は表現主体であり、恩恵の与え手は行為の与え手ではなく、事象全体であると述べている。「雨が降ってくれた。」「花子は大助に私との秘密を話さないでいてくれた。」「娘の病気がやっと治ってくれた。」などの例を挙げている。例えば、「雨が降る」という事象自体は、表現主体に恩恵をもたらすものであるから「くれる」を用いることができる、という説明が適当であると主張している。新版日本語教育事典（2005）では、「（夫に向かって）ご飯作った？」と「（夫に向かって）ご飯作ってくれた？」両者の場合、後者が「夫がご飯を作る」という事態を恩恵的なものと捉えていて前者よりも待遇的な配慮が含まれた表現であると記述している。そして、例えば「とんだことをしてくれたな。」のような文脈から明らかに非恩恵とわかる場合は、恩恵を表さない用法となると述べている。

中日対照研究に関しては党淑蘭（1991）の研究がみられる。党淑蘭（1991）では、中日授受表現について補助動詞による表現とやりとりの描き方について分析し、一、中国語では、授受における積極的な行為者がはっきりしているが、日本語では曖昧である。二、視点が、中国語では積極的な行為者の表示に関わるが、日本語では待遇的な側面に関わることがあると指摘している。その理由として日本語では、行為の積極性ということは焦点にならないが、中国語では、欠かせない情報となっていると述べている。

授受表現の意味・用法の分類については森田（2002）が挙げられる。森田（2002）では「てくれる」の意味について、①感謝（BガAニCヲ～てくれる）（例：一生懸命働いてくれた。／自然が人々に豊かな恵みを与えてくれる。）②迷惑（例：とんでもないことをしてくれたよ。）③許可・許容（AニCヲ～（さ）せてくれる）（例：今からでも試験を受けさせてくれるといいが。）④希求・懇願（～てくれ／～てください／～てちょうだい）（例：お先に帰らせてください。／早く帰ってくれ。／わかってくれよ。）⑤不利益の供与（AガBニ～てくれる）（例：目にもの見せてくれようぞ。／（時代劇で）成敗してくれる！）に分類されている。そして、ここでいう①感謝の意味は「てくれる」の本来の基本的意味であり、②～⑤はその状況がもたらす結果的意味、すなわち文脈による派生義と考えられると述べている。

日本語の「てくれる」についての研究および中日授受表現についての研究はそれぞれ多数あるが、日本語の特徴でもある「てくれる」が中国語ではどのように表現され、翻訳されているかについては研究が十分とは言えない。そこで、本稿では、「てくれる」の構造よりも意味用法に焦点を当て、森田（2002）の分類に従い、各々の意味用法がどのように中国語の表現に対応しているかを個々の事例に従って詳しく提示して論じる。



### 3. 日中辞典に収録された「てくれる」の中国語訳

まず、「くれる」「てくれる」の中国語訳が日中辞典では、どのように収録されているのかをあらためて確認しておきたい。『日中辞典（小学館）』、『日中辞典（講談社）』では、それぞれ以下のように記述されている。

『日中辞典（小学館）』（2006：551）：くれる【呉れる】1. 給（我）兄が本をくれる。／哥哥给我书。彼女は毎晩電話をくれる。／她每天晚上都来电话。息子はめったに手紙をくれない。／儿子很少来信。父のくれた時計が私の宝物だ。／父亲给的表是我的宝贝。金には目もくれない。／连看也不看钱一眼；不为金钱所动。2. 物をやる（含有鄙意地）给 そんなにほしけりゃくれてやろう。／既然那样想要就给你吧。3. （（「…てくれる」の形で））先生がよく教えてくれる。／老师耐心地教我（们）。新聞を持ってきてくれ。／把报纸拿给我。

『日中辞典（講談社）』（2015：545）：くれる【呉れる】给◆父は高校進学祝いに電子辞書を買ってくれた。／爸爸为了祝贺我上高中，送了一个电子词典给我。◆この歌は母が教えてくれた。／这首歌是妈妈教给我的。◆彼女はわざわざ駅まで迎えに来てくれた。／她专门到车站来接我了。◆出て行ってくれ。／你给我出去！◆目もくれない。／不放在眼里。◆目に物見せてくれる。／给苦头吃。◆げんこをくれる。／给吃拳头。◆このことはだまっていってくれ。／这件事不要说给别人〔跟别人说〕。

上記から、小学館の『日中辞典』と講談社の『日中辞典』の共通点は、どちらも「てくれる」が主に“给”“给我”で訳されている、ということがわかる。相違点は、『日中辞典』小学館では、動詞「くれる」と補助動詞の「てくれる」を分けて記述しているが、『日中辞典』講談社では、分けず、例文も「てくれる」の例文が主となっていることである。そして、「てくれる」についての例文を見ると、『日中辞典』小学館では、森田（2002）の分類の①感謝④希求・懇願の例文を挙げているのに対し、『日中辞典』講談社では、①感謝④希求・懇願⑤不利益の供与の例文を挙げている。

### 4. 日本の現代小説における「てくれる」の出現状況

本稿ではまず、近年刊行された日本の現代小説のうち、中国で広く知られ、翻訳されている異なる著者の5冊、及び中国語訳本5冊を対象に「てくれる」がどのような意味用法で、どれくらい使われているかを調査・分析した。この5冊に出現している「てくれる」の意味用法の分類は、筆者と長年の中国語教育経験のある日本語母語話者の1名計2名が森田（2002）に従い、客観的に認定した。表1はその結果である。

5冊の現代小説及び中国語の訳本は以下のとおりである。

1. 『ある閉ざされた雪の山荘で』東野圭吾著 講談社（1996）

- 《大雪中の山庄》李盈春译 北京出版集团公司 北京十月文艺出版社 (2017)
2. 『火車』 宮部みゆき 著 新潮文庫 (1998)  
《火车》张秋明译 南海出版公司 (2009)
3. 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』 村上春樹 著 文藝春秋 (2013)  
《没有色彩的多崎作和他的巡礼之年》施小炜译 南海出版公司 (2013)
4. 『羊と鋼の森』 宮下奈都 著 文藝春秋 (2015)  
《羊与钢的森林》罗越译 中信出版集团 (2017)
5. 『天気の子』 新海誠 著 角川文庫 (2019)  
《天气之子》林青华译 百花洲文艺出版社 (2019)

表 1 「てくれる」の作品・意味別使用数と割合

作品	①感謝	②迷惑	③許可・許容	④希求・懇願	⑤不利益の供与	作品別 合計
ある閉ざされた 雪の山荘で	17 (31%)	2 (4%)	0 (0%)	36 (65%)	0 (0%)	55
火車	128 (70%)	1 (1%)	7 (4%)	46 (25%)	0 (0%)	182
色彩を持たない 多崎つくると、 彼の巡礼の年	73 (94%)	0 (0%)	0 (0%)	5 (6%)	0 (0%)	78
羊と鋼の森	59 (78%)	0 (0%)	4 (5%)	13 (17%)	0 (0%)	76
天気の子	22 (58%)	0 (0%)	0 (0%)	16 (42%)	0 (0%)	38
用法別合計	299 (70%)	3 (1%)	11 (3%)	116 (27%)	0 (0%)	429

表1をみてわかるように補助動詞として用いる「てくれる」の出現数は全作品中429例ある。作品ごとにみると、『ある閉ざされた雪の山荘で』を除いて「感謝」の意味として用いられる使用数と割合が最も多い。その次が、「希求・懇願」の意味用法である。全体的にみても最も多い使用数と割合は「感謝」であり、70% (299例) を占め、次が「希求・懇願」で27% (116例) である。「許可・許容」と「迷惑」の用法は全作品中、それぞれ11例と3例で、3%と1%を占めるのみである。「不利益の供与」の意味用法は1例も出現していない。

なお、5冊の作品の中に動詞「くれる」の用法として現れたのはごくわずかであり、7例しかなかった。

表2は依頼表現形式である「てくれる?」、「てくれます?」、「てくれない?」、「てくれないか」、「てくれませんか」、「てくださいますか」の使用数であるが、森田 (2002) の分類には該当せず、今回は分析対象外とする。

表2 「てくれる」を用いた依頼表現の使用数

作品	てくれる？	てくれます？	てくれない？	てくれないか	てくれませんか	てくださいますか	作品別 合計
ある閉ざされた雪の山荘で	1	0	1	3	0	2	7
火車	1	0	0	8	4	1	14
色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年	4	0	1	4	1	0	10
羊と鋼の森	1	0	0	1	0	0	2
天気の子	3	1	0	0	1	0	5
合計	10	1	2	16	6	3	38

## 5. 「てくれる」に対応する中国語表現についての分析

「てくれる」が具体的にどのような中国語表現で訳されているかを明らかにするために、意味用法ごとにその表現を集計した。日本語の各小説に現れた「てくれる」に対応する中国語表現についても、筆者と中国語教育経験のある日本語母語話者1名計2名で認定した。

表3は「てくれる」に対応する各意味用法における中国語の表現別出現数である。表3

を見るとわかるように、「①感謝」の意味を表す「てくれる」に対応する中国語表現が豊富でいろいろなバリエーションがあることが明らかになった。そして、中国語表現がない「訳なし」が203例で最も多く、68%を占めている。その次に“我”で対応しているのが26例(9%)である。“他”と“她”で表現しているのが13例で、“帮他”(3例)、“给他”(1例)、“对他”(1例)、“为他”(1例)を含めると19例ある。日中辞典に提示されている“给”、“给我”、“我”、“我们”の表現に比べて、実際は表3のように表現が多様であり、“给”のみで表現しているのはわずか1例である。“给”の他に“给我”(7例)、“给自己”(1例)、“给他”(1例)、“给+人名”(2例)、“給人”(1例)を含めても計13例で4%しか占めていない。中国語表現が多様な理由として、日本語の「てくれる」の特有の性質と構文に関係があると言える。そして文学作品において、作家は登場人物の立場に立って、描写することができ、中国語の翻訳では、その利益・恩恵の受け手を明らかにしているからであろう。三人称及び人物名が「てくれる」文で利益、恩恵の受け手となっているのも文学作品だからである。村上(1986)ではsite-kureru構文において利益、恩恵の受け手は、「わたし(ぼく)のために、自分のために」のかたちで明示されるものあるし、明示されないものもある、文の構造上は利益の与え手から述べながらも、「話し手(わたし)」は利益の受け手の立場にたつ表現であると指摘している。そして、site-kureru構文は、文学作品、とくに小説などの地の文にとっては、都合の良い構文で、作家は、作品のなかに露骨に自分を登場させずに、登場人物の行動

表 3 「てくれる」に対応する各意味用法における中国語の表現別出現数

①感謝	出現回数	合計	299
訳なし	203	②迷惑	出現回数
我	26	訳なし	3
帮我	8	合計	3
给我	7	③許可・許容	出現回数
让我	3	訳なし	6
对我	3	我	3
跟我	2	给他	1
替我	1	给 + 人名	1
为我	1	合計	11
向我	1	④希求・懇願	出現回数
自己	2	訳なし	51
为自己	2	请	32
给自己	1	吧	11
我们	2	请…吧	3
帮我们	2	请让我…吧	1
帮你们	1	请帮我	1
他	9	请我们	1
她	4	帮我们…吧	1
帮他	3	得帮我	1
帮 + 人名	1	我	3
帮忙	6	让我	1
给他	1	要让我	1
给 + 人名	2	要我	1
对他	1	给我	1
为他	1	要	3
为 + 人名	1	想要	1
给	1	要求	1
给人	1	希望	1
让	2	快	1
让人	1	合計	116

の中に自分自身をひそませていくと述べている。

例(1)～(4)は「感謝」の意味で「訳なし」の場合である。日本語の地の文である例(1)、(2)(4)では利益、恩恵の与え手と受け手が顕在されている。会話文である例(3)では利益、恩

恵の与え手と受け手の話し手が明示されている。この場合、中国語では、日本語特有の補助動詞の「てくれる」を訳さなくてもその授受関係をはっきり示すことができる傾向がある。

- (1) そこでは穏やかに時間が流れ、心を許せる友人たちが彼を待っていてくれた。

(村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』)

在那里，时间平稳地流淌，可以推心置腹的友人在等着他。

(施小炜译《没有色彩的多崎作和他的巡礼之年》)

- (2) 泳ぐことは身体に蓄積された疲労を和らげ、緊張した筋肉をほぐしてくれた。

(村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』)

游泳缓解了身体积蓄的疲劳，松弛了紧张的肌肉。

(施小炜译《没有色彩的多崎作和他的巡礼之年》)

- (3) 「その人に会える?」「頼んでみます。きっと時間をつくってくれると思うから」

(宮部みゆき『火車』)

“可以跟他见面吗?”“我试试看，我想他应该能够抽空。” (张秋明译《火车》)

- (4) 大事なことはちゃんと大事な誰かがやってくれる。(宮下奈都『羊と鋼の森』)

重要的事情自然会由重要的人去做。(罗越译《羊与钢的森林》)

例(5)(6)は「感謝」の意味で“我”で訳されている場合であり、例(7)“他”で訳されている場合である。例(7)は作者が小説の中で登場人物の立場にたって描写しているため、「てくれる」が“他”で訳されていることがわかる。

- (5) 世界と私とは隔てられていることを、肌がはっきり教えてくれる。

(新海誠『天気の子』)

肌肤清晰地告诉我，世界和我是隔开的。

(林青华译《天气之子》)

- (6) 「あなたは前にもそんなふうにはめてくれたわね。もしこれが現実の事件なら、素晴らしい殺人計画だと」

(東野圭吾『ある閉ざされた雪の山荘で』)

“你之前也这样夸奖过我，说如果这是真实发生的命案，就是完美的杀人计划。”

(李盈春译《大雪中的山庄》)

- (7) 実際、本間がローゼラインを辞するとき、通用口のところまで送ってくれた片瀬の顔は、洗濯を繰り返してすり切れてしまったシーツのように白っちゃけて見えた。

(宮部みゆき『火車』)

事实上，本间离开玫瑰专线，片濑送他到员工出入口时，表情就像被洗涤过很多遍的床单一样惨白。

(张秋明译《火车》)

例(8)は「感謝」の意味で“帮我”に訳され、例(9)は、“帮忙”で訳されている場合である。

- (8) 「そう。難しいと思っていた。ずっと調べていてくれたんですか」  
(宮部みゆき『火車』)  
“哦，我想很难吧。你一直都在帮我查？”  
(张秋明译《火车》)
- (9) 碇が取り寄せてくれた喬子の戸籍・除籍謄本、附票などに記載された所番地を足場にたぐってゆき、本間は彼の所在を突き止めた。  
(宮部みゆき『火車』)  
本間根据碇贞夫帮忙调出的乔子户籍、除籍誊本、居民卡等文件记载的地址一一探索，找到了他的住处。  
(张秋明译《火车》)

表3で示しているように、「②迷惑」の意味を含む「てくれる」の使い方は3例で、3例とも対応する中国語表現がない。例(10)(11)がそのパターンである。「てくれる」構文で受け手である「私」を表す場合は、中国語では“我”で訳す場合と訳さない場合とがあるが、例(10)(11)は訳さない場合である。

- (10) 「分析とは大層な言葉を使ってくれるね」  
(東野圭吾『ある閉ざされた雪の山荘で』)  
“你竟然用分析这么夸张的字眼。”  
(李盈春译《大雪中的山庄》)
- (11) おまけにいいところになると、本多雄一が現れて邪魔をしてくれる。  
(東野圭吾『ある閉ざされた雪の山荘で』)  
好不容易正聊得投机，又冒出本多雄一来打扰。  
(李盈春译《大雪中的山庄》)

「③許可・許容」の意味を表す「てくれる」は11例あるが、「訳なし」が6例、“我”“给他”“给+人名”で訳されている場合がそれぞれ3例、1例、1例である。例(12)は「訳なし」で、例(13)は“我”で訳されている場合である。例(14)は、例(7)と同様に作者が小説の中で登場人物の立場にたって描写しているため、“给+人名”で訳されていると考える。

- (12) 脚の下についている真鍮のキャストの向きを変えるとピアノの重心が変わる。それを板鳥さんは、ひと目で僕にもわかるようにやってみせてくれた。腕を肩より開いて腕立て伏せをしたら力の入り方が変わる。  
(宮下奈都『羊と鋼の森』)  
调节支撑腿底部琴轮的方向，可以改变钢琴的重心。板鸟先生今天为我亲身示范了一次，还深入浅出地举了个俯卧撑的例子。  
(罗越译《羊与钢的森林》)
- (13) 「最初に声をかけさせてくれるって、約束、忘れてないですよね？」  
(宮部みゆき『火車』)  
“你还记得答应过我，让我第一个跟她说话吧？”  
(张秋明译《火车》)
- (14) ボケの首輪は真新しい頑丈なもので、埋める前に智が見せてくれたが、内側にちゃんとイニシャルが刻んであった。  
(宮部みゆき『火車』)

呆呆の项圈很新很结实，埋葬之前小智曾拿给本间看过，内侧印有呆呆的姓名缩写。

(张秋明译《火车》)

「希求・懇願」を表す「～てくれ／～てください／～てちょうだい」の内訳をみると、「～てくれ」が全 116 例中 55 例、「～てください」が全 116 例中 60 例、「～てちょうだい」は 1 例のみである。中国語で表現されていない「訳なし」が 51 例で最も多い。しかし、「希求・懇願」を示す中国語の表現“请”(32 例)、“吧”(11 例)、“请”・“吧”を含む中国語の表現“请…吧”(3 例)、“请让我…吧”(1 例)、“请帮我”(1 例)、“请我们”(1 例)、“帮我们…吧”(1 例)を合わせると 50 例になる。さらに、「希求・懇願」を示すことができる“得帮我”、“要让我”、“想要”、“要求”、“希望”、“快”の各 1 例と“要”の 3 例を合わせると 59 例となる。「てくれ」は「てくれる」の命令形であるため、中国語の「希求・懇願」を示す中国語の表現“请”、“吧”に“让我”“帮我”“帮我们”の訳が加わったと考えられる。

例(15)～(17)は「希求・懇願」の意味で「訳なし」の場合である。

(15) 「じゃあ、気をつけて帰ってくださいね」 (宮下奈都『羊と鋼の森』)

“那好，路上小心。” (罗越译《羊与钢的森林》)

(16) 「ちょっと待てくれ。シロがどんな死に方をしたか、おまえは本当にそれも知らないのか？」 (村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』)

“等一等。白是怎么死的，你真的知道吗？”

(施小炜译《没有色彩的多崎作和他的巡礼之年》)

(17) 「だけどさ、そのことをあまりとやかくいわないでやってくれ。結構皆に気を遣ってるらしいんだ」 (東野圭吾『ある閉ざされた雪の山荘で』)

“不过你最好别提起这件事，因为他们似乎对公开很有顾虑。”

(李盈春译《大雪中的山庄》)

例(18)(19)は「希求・懇願」の意味で“请”で訳されている場合である。

(18) 「ちょっとちょっと！ 勝手なことしないでくださいよ、誰もいませんよ！」

(新海誠『天気の子』)

“等等，等等！请别乱闯，里面没有人！”

(林青华译《天气之子》)

(19) 「本当のことをいってくれ」と彼はいった。

(東野圭吾『ある閉ざされた雪の山荘で』)

“请你说实话。”他说。

(李盈春译《大雪中的山庄》)

例(20)は「希求・懇願」の意味で“吧”、例(21)は“请帮我”で訳されている場合である。

(20) 僕たちを、もうすこしだけこのままでいさせてください。(新海誠『天気の子』)

让我们就这样再待一会儿吧。

(林青华译《天气之子》)

- (21) 今度は「番号を調べてくれ」とは言わなかった。「この住所に、この名前の会社の登録がありますか?」と訊いた。

(宮部みゆき『火車』)

这一次本间没说“请帮我查电话号码”，而是问：“这个地址有没有登记这家公司?”

(张秋明译《火车》)

## 6. おわりに

本稿では、日本の現代小説に現れる「てくれる」表現が、どのように中国語に翻訳されているかを明らかにした。その結論を以下の5点にまとめる。

①「てくれる」は誰(何)かが自分または自分の側の者に対して何かをすることを示す表現である。そのため、上記の例(5)(6)(7)(8)(9)(13)(14)のように、中国語はその恩恵あるいは迷惑を受ける側をはっきりさせて訳出し、日本語の「てくれる」表現が示す「だれに」を中国語で明示する傾向がある。

②日本語の原文で、動作の主体、利益、恩恵の与え手あるいは話し手と受け手が明示されている場合、例(1)(2)(3)(4)(10)(12)のように中国語は、与え手と受け手により「てくれる」構文の授受関係を明示できるため、「てくれる」に当たる表現があまりなく、省略する場合が多い。

③「てくれる」は、日本語では感謝(恩恵)を表すことが多いが、中国語では動作行為そのもので恩恵を表すことができるため、中国語では「てくれる」に対応する意味での恩恵を表すことが少ない。そのため、例(1)~(4)のように訳されない場合が多く、“給”で表現されることもごくわずかであると考えられる。

④「許可・許容」は、森田(2002)で示された「(AニCヲ~(さ)せてくれる)」の形式に従っている。そのため、例(13)(14)のように「させる」が中国語の使役動詞“让”に当たり、「てくれる」は対象が誰であることを示す役割をしていると考えられる。

⑤「希求・懇願」も、同様に「~てくれ/~てください/~てちょうだい」の形式に従っている。そのため、例(18)~(21)のように“请”、“吧”等て訳出する場合と例(15)~(17)のように訳さず、中国語の文全体で「希求・懇願」の意味を表す場合がある。

以上のことから、日本語に「てくれる」という表現があっても無理に“给”で訳す必要はなく、逆に中国語に“给”の表現がなくても、日本語では「てくれる」を表示しなければならないことを指摘しておきたい。

今後は、「てくれる」以外に「てもらう」、「てあげる」の中国語表現についても調査・分析を進めていきたい。



## 注

- 1 とくに顕著な受給動詞「やる・くれる・もらう」を述語とする構文である。
- 2 たとえば、「書いてもらう」においては、「書く」主者と「もらう」主者とは、明らかに別であって、「A が B に書いてもらう」という場合ならば、「B が書く」という内的主述関係が、文の外的主述関係「A が～シテもらう」に包括され、「A が B に打たれる」という受身構文の内外二重の主述関係と対応的であると述べている。
- 3 補助動詞「～てやる（あげる）／くれる」を述語に伴った構文をあるとしている。
- 4 [着点]を表す二格名詞句を指す。

## 参考文献

- 相原茂（2006）『日中辞典』講談社。
- 進藤真理（2012）「日韓両言語における授受表現の対照研究」人間文化研究所年報 26：203-217。
- 対外経済貿易大学・商務印書館・小学館編（2015）『日中辞典』小学館。
- 党淑蘭（1991）「中日の授受表現比較」『佐賀大國文』19、佐賀大学教育学部国語国文学会編：34-38。
- 成戸浩嗣（2017）「日中対照研究方法論（3）——“V+O+ 給・N”表現をめぐる日中対照（下）——」『現代マネジメント学部紀要』第6巻第1号、愛知学泉大学現代マネジメント学部：19-34。
- 西川真理子（1995）「『てくれる』についての一考察『てやる／もらう』との比較から」『言語文化研究』21、大阪大学言語文化部：241-254。
- 日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育事典』、大修館書店。
- 馮富榮（1995）「中国人の日本語授受文の学習過程における母語（中国語）の影響について」、『名古屋大学教育学部紀要、教育心理学科』42、名古屋大学教育学部：135-147。
- 古川俊雄（1996）「通時的観点から見た現代日本語における「くれる」の特殊用法」、『広島大学教育学部紀要』6、広島大学教育学部日本語教育学科：45-52。
- 前田富祺（2001）「あげる」「くれる」成立の謎——「やる」「くださる」などとの関わりで、『月間言語』4月号、大修館書店：34-40。
- 前田直子（2021）「敬語表現と文法——授受動詞の用法を中心に——」待遇コミュニケーション研究 18：52-67。
- 水野かほる（1994）「日本語授受表現に対する中国語話者の認識」、『名古屋大学人文科学研究』23、名古屋大学大学院文学研究科：105-122。
- 三宅知宏（1996）「日本語の受益構文について」『国語学』186：91-104。
- 宮地裕（1965）「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について『国語学』63：21-33
- 村上三寿（1986）「やりもらい構造の文」『教育国語』84号、むぎ書房：2-43。
- 森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房。
- 安本美典（2001）「あげる」「くれる」表現と「甘えの構造」、『月間言語』4月号、大修館書店：74-79。

（あん めいき 教育推進機構 基礎・教養科 非常勤講師）



## 文部省職業教育課と『産業教育』誌(16)

丸 山 剛 史  
尾 高 進

### Vocational Education Section in Ministry of Education, Science and Culture and the Journal “Industrial Education” (16)

MARUYAMA Tsuyoshi, ODAKA Susumu

#### [14]

本稿は、前報につづき、文部省（現・文部科学省）技術・職業教育行政研究の基礎調査報告として同省初等中等教育局職業教育課所属専門職事務官および教科調査官の著作・論文刊行状況に関して若干の特徴を明らかにすることを目的としている<sup>1</sup>。取り上げる専門職および教科調査官は既報掲載の「表 職業教育課在籍専門職・教科調査官」にもとづくこととし、表に掲載された順に取り上げて検討する。本稿では鈴木寿雄（すずき・ひさお）を取り上げる。本来ならば坪田元雄を取り上げるはずであるが、坪田に関しては国立公文書館に坪田に関する文書があり、閲覧許可申請に時間がかかることが判明したため、坪田に関しては次号以降において検討することとする。

鈴木寿雄は1925年生まれ、東海科学専門学校電気工学科に学び、東京都立中学校教諭を務めた後、早稲田大学文学部哲学科（心理学専攻）に学び、その後1953年に文部省へ入省した。1966年に教科調査官となる。1978年に学科目増設による補充のため、宇都宮大学に配置換えとなり、教育学部教授として技術科教育を担当することになった。1982年4月には横浜国立大学に配置換えとなった。1991年に同大学を定年退官。2014年逝去。

鈴木に関しては、鈴木が大学教員として定年退職を迎えたこともあり、関係者が退職記念誌（横浜国立大学教育学部技術学教室編集発行『鈴木教授退官記念誌』1991年2月）を編んでおり、同冊子に著作目録（1990年8月刊行の論考まで収録）が収録されている。

また学会でも活動し、名誉会員等にも選出されたため、追悼記事が学会誌にも掲載されている<sup>2</sup>。鈴木「技術教育論」を検討した論考もある<sup>3</sup>。これらの記事により、鈴木の人と仕

事に関しては概要を把握することができる。ただし、横浜国立大学定年退職以降の著作・論文は集約されていない。確認した限りでは単著 5 点、共編著書 34 点、論文等 70 点以上に及ぶ。5 冊の単著を刊行していたことには注目しておきたい。

鈴木は文部省職業教育課勤務年数が長い職員の一員であるが、文部省入省の経緯や担当業務に関して、長谷川淳の追悼文において鈴木自らが次のように記している<sup>4</sup>。

「中産審の職業・家庭科の改善策は、昭和二十八年三月に第一次建議としてまとめられたが、その趣旨をふまえて教育内容を具体化する作業が残されていた。長谷川先生（長谷川淳：引用者）は引き続きこの仕事を遂行するため、工業専門職の増員を要求され、私に目をつけられた。最初はお断りをしてしたが、周囲の勧めもあり、先生の手伝いをしながら、じかにご指導をいただける魅力も捨てがたいと思い、文部省に勤務することになった。／それから毎日、私は先生の警咳に接して暮らすようになった。日常的には、高校の工業科の教科書編集の仕事があり、自動車や工芸など、自分の専門外の分野のものが多かったので大変苦労したが、このとき習得した知識があとで技術・家庭科の担当になったとき、おおいに役だった。」

このように、鈴木は、長谷川淳の導きにより文部省へ入省し、当初は高等学校工業科教科書編集に従事し、その後技術・家庭科を担当したとされる。

なお鈴木の前蔵資料については、生前のうちに開隆堂出版株式会社に寄贈され、「鈴木寿雄／技術・家庭科文庫」として保管されている<sup>5</sup>。資料は年代別に分けられ、文部省在職時代の教育課程行政に関する文書も多数含まれている。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP22K02303 の助成を受けたものです。

(注)

- 1 丸山剛史・尾高進「文部省職業教育課と『産業教育』誌(1)－(15)」『工学院大学研究論叢』第 53-2 号(2016 年)－第 59-2 号(2023 年)につづくものである。
- 2 齋藤健次郎「鈴木寿雄先生の御逝去について」『産業教育学研究』第 45 巻第 1 号、2015 年、55 ページ。大谷忠「鈴木寿雄先生を追悼する」同前、54 ページ。
- 3 亀山寛・塩崎厚史「一技術科創設者の技術教育論の研究——鈴木寿雄の第一期(1949～1957 年)の技術教育論——」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』第 27 号、1996 年、121-135 ページ。
- 4 鈴木寿雄「長谷川先生を偲ぶ」長谷川淳先生追悼記念誌編纂委員会編『かわりびょうぶ』、1996 年、70-71 ページ。
- 5 開隆堂出版編集第二部「「鈴木寿雄／技術・家庭科文庫」新設のお知らせ」『KGK ジャーナル』第 33 巻第 1 号、14 ページ。

## 『産業教育』誌目次集 (16) : 1991-1993 年

- ・本目次集は、宇都宮大学附属図書館所蔵の『産業教育』誌の内容を確認しながら作成した。同館欠号分に関しては、編者が所蔵機関に向くなどして、目次及び誌面を確認し作成した。
- ・所蔵機関名を巻号・発行年月右横のカッコ内に記した。
- ・執筆者名右横のカッコ内の数字はページ数を表す。

第 41 巻第 11 号 : 1991 年 10 月 1 日 (宇都宮大学附属図書館)

巻頭特集 職業教育における新科目の指導の在り方

「課題研究」の設置とその指導 …… 小林一也 (2)

情報に関する教育とその指導 …… 中澤興起 (7)

職業に関する教科・科目の研究等

商業教育活性化に向けた特色ある取組み (Ⅱ)  
…………… 岡田修二 (12)

「水産情報処理」の取組み …… 海老名稔 (15)

家庭科における「課題研究」の指導 (その 4)  
…………… 河野公子 (18)

「看護情報処理」の指導計画の作成と学習指導 (2)  
…………… 大橋泰久 (21)

ずい想 わが師の恩 …… 花房 保 (24)

教科等実践シリーズ

農業高校における情報処理教育の指導方法  
…………… 岸本伍郎 (26)

新科目「課題研究」の研究と実践  
…………… 山上 清 (31)

商業における情報処理関連科目の実践研究  
…………… 椎谷福男 (36)

ホームルーム活動を通じての自主的・実践的な進路  
学習 …… 荒瀬克己 (41)

産業界の動向

ベビーシッター業界の動向 …… 中館慈子 (46)

がんばってます

税務のスペシャリストをめざして  
…………… 穂積さとみ (50)

職業高校見聞録

大分県立情報科学高等学校 …… (52)

都道府県産業教育だより—大分県

高等学校家庭科の男女共修の在り方 …… 藤井昭義 (54)

文部省だより

平成 3 年度高等学校専攻科・別科設置状況 …… (58)

教育・文化の再発見! (第 33 回教育・文化週間)  
…………… (64)

第 41 巻第 12 号 : 1991 年 11 月 1 日 (宇都宮大学附属図書館)

巻頭特集 新しい教育課程編成の視点 I

農業教育における教育課程編成の視点  
…………… 角田順三 (2)

工業教育における教育課程編成の視点

…………… 岩本 洋 (7)

職業に関する教科・科目の研究等

研究指定校における情報処理教育の取組み  
…………… 佐藤順彦 (12)

新しい教育課程編成の試み …… 岩本宗治 (15)

経済社会の変化と商業教育  
…………… 岡田修二 (18)

進路指導における家庭・地域との連携 (その 1)  
…………… 鹿嶋研之助 (21)

ずい想 「或る仲間の集まり」から思うこと  
…………… 久保田亨 (24)

教科等実践シリーズ

水産におけるバイオテクノロジーの取組み  
…………… 吉川賢次 (26)

家政科の活性化を目指す類型の設置  
…………… 三木 忠 (31)

本校衛生看護科における情報処理教育の取組み  
…………… 稗田 貢 (36)

教科・科目の充実と正しい職業観の育成を図る勤労  
体験学習 …… 桑木紀雄 (41)

産業界の動向

農業後継者の育成確保対策 …… 吉野茂美 (46)

がんばってます

潜水教育に取り組む …… 亀井孝枝 (50)

職業高校見聞録

愛知県立稲沢高等学校 …… (52)

諸外国の職業教育

中国農村教育の改革 …… 田島重雄 (54)

文部省だより

学校における情報教育の実態等に関する調査結果  
…………… (58)

第 41 巻第 13 号 : 1991 年 12 月 1 日 (宇都宮大学附属図書館)

巻頭特集 新しい教育課程編成の視点 II

商業教育における教育課程編成の視点  
…………… 大倉芳雄 (2)

水産教育における教育課程編成の視点  
…………… 勝木 茂 (7)

## 職業に関する教科・科目の研究等

## 「水産一般」の取組み (その 1)

..... 中谷三男 (12)

## 「家庭情報処理」の指導 (その 1) ... 河野公子 (15)

## 「母子看護」の指導計画の作成と学習指導

..... 兼松百合子 (18)

## 勤労体験学習の進め方と実践 (2)

..... 浅見 匡 (21)

## ずい想 家庭科教育に想う ..... 丹羽清子 (24)

## 教科等実践シリーズ

## 自営者養成農業高等学校における科目「課題研究」

## の実践 ..... 永吉嘉博 (26)

## 工業における個性を生かす教育課程の実践

..... 櫛間伸幸 (31)

## 北海道における「課題研究」の実践

..... 田本武士 (36)

## 職業高校における進路指導の実践 ... 椎名信夫 (41)

## 産業界の動向

## 潜水業界の動向 ..... 清水信夫 (46)

## がんばってます

## おばあちゃんの杖になりたい ..... 安倍静穂 (50)

## 職業高校見聞録

## 高知県立須崎工業高等学校 ..... (52)

## 諸外国の職業教育

## 水産高校の国際交流 ..... 鯉川佳起 (54)

## 文部省だより

## 働きながら学ぶ人々のために ..... (64)

## 第 42 巻第 1 号：1992 年 1 月 1 日 (宇都宮大学附属図書館)

## 平成 4 年 年頭の所感 ..... 鳩山邦夫 (2)

## 巻頭特集 新しい教育課程編成の視点Ⅲ

## 家庭に関する学科における教育課程編成の視点

..... 森マコト (6)

## 看護に関する学科における教育課程編成の視点

..... 林 慈子 (11)

## 職業に関する教科・科目の研究等

## 生物工学科の現況と展望 (Ⅰ) ..... 古川仁朗 (16)

## 科目「国際経済」の指導手引書の作成研究

..... 金親照司 (19)

## 「家庭情報処理」の指導 (その 2) ... 河野公子 (22)

## 進路指導における家庭・地域との連携 (その 2)

..... 鹿嶋研之助 (25)

## ずい想 男・女——考 ..... 竹下純治 (28)

## 教科等実践シリーズ

## 農業後継者育成の取組み ..... 大山博史 (30)

## 類型と選択制を導入した教育課程の実態

..... 千葉 仁 (35)

## 実習船における「総合実習」の実践

..... 平野井篤 (40)

## 地元の町づくりと結びついた勤労体験学習

..... 前川竹雄 (45)

## 産業界の動向

## 小売業の QC サークル活動 ..... 大西 傑 (50)

## がんばってます

## 国立文楽劇場の「人形遣師」として

..... 吉田文司 (54)

## 職業高校見聞録

## 長崎県立佐世保商業高等学校 ..... (56)

## 都道府県産業教育だより—鹿児島県

## 本県の産業教育における改善への取組み

..... 鹿児島県教育委員会 (58)

## 文部省だより

## 学校 5 日制についての中間まとめ ..... (62)

## 表紙デザインの解説 ..... 西岡秀志

## 第 42 巻第 2 号：1992 年 2 月 1 日 (宇都宮大学附属図書館)

## 巻頭特集 全国産業教育フェア

## 全国産業教育フェアについて ..... 水野 豊 (2)

## 第 1 回全国産業教育フェアについて

..... 島田侑児 (4)

## 活力ある職業教育の推進について ... 八木近直 (9)

## 職業に関する教科・科目の研究等

## 生物工学科の現況と展望 (2) ..... 古川仁朗 (14)

## 工業教育と物作り ..... 岩本宗治 (17)

## 情報ネットワークによる水産情報教育の推進

..... 立川 進 (20)

## 自主的・実践的な進路学習を進めるための指導の工夫

..... 鹿嶋研之助 (23)

## ずい想 日本のナイチンゲール 瓜生岩子の記

..... 佐藤仁作 (26)

## 教科等実践シリーズ

## アイデアロボット大会・作品展の実施と成果

..... 高川弘三 (28)

## 国際経済「総合実践」の取組み ..... 澤田良一 (33)

## 魅力ある学科を目指して ..... 大石英幸 (38)

## 職業科目の履修を通じた勤労体験学習の在り方

..... 竹本卓夫 (43)

## 産業界の動向

## 異業種交流の現状と展望 ..... 柳沢 剛 (48)

## がんばってます

## 高校駅伝と西脇工業高等学校 ..... 伊藤義矩 (52)

## 職業高校見聞録

## 愛知県立桃陵高等学校 ..... (54)

## 都道府県産業教育だより—埼玉県

先端技術教育等担当教員の研修制度の充実と免許状  
を有しない非常勤講師制度の活用

……………渡邊修一郎 (56)

## 文部省だより

第2回全国産業教育フェアの開催について …… (60)

表紙デザインの解説 ……………大西 心

第42巻第3号：1992年3月1日（宇都宮大学附属図書館）

## 巻頭特集 職業高校と国際技術協力

我が国の国際技術協力 ……………西野文雄 (2)

工業高校と国際技術協力 ……………大島正弘 (7)

## 職業に関する教科・科目の研究等

工業教育国際化の始まり ……………岩本宗治 (12)

教材資料集『和歌山県の地域産業』について

……………谷口治美 (15)

家庭情報処理の指導（その3） ……河野公子 (18)

「成人看護」の指導計画の作成と学習指導

……………林 滋子 (21)

ずい想 釣二題 ……………河野石根 (24)

## 教科等実践シリーズ

農業高校における情報処理教育 ……反甫昌三 (26)

「長商デパート」を通しての教育実践

……………石川 進 (31)

岩手県の水産クラブ及び課題解決型学習の取組み

……………和田 忠 (36)

進路指導への取組みとそれを活かした追指導

……………鈴木 宏 (41)

## 産業界の動向

国際協力事業団の技術協力 ……………熊倉 晃 (46)

## がんばってます

Y校の伝統を胸に ……………山崎誠久 (50)

## 職業高校見聞録

会津杏林学園高等学校 …………… (52)

## 諸外国の職業教育

職業教育と国際技術協力——サウジアラビア、ケニア、モロッコ——…………… (54)

## 文部省だより

社会の変化に対応した新しい学校運営等の在り方について…………… (57)

表紙デザインの解説 ……………向井幸子

第42巻第4号：1992年4月1日（宇都宮大学附属図書館）

## 巻頭特集 学校5日制とこれからの高等学校教育

学校5日制と高等学校教育 ……………金井 肇 (2)

職業高校における学校週5日制実施に伴う課題

……………小林一也 (7)

## 職業に関する教科・科目の研究等

岐阜県における「電子基礎」の指導について

……………末松照敏 (12)

「流通経済」の指導に向けての取組み

……………岡田修二 (15)

「水産一般」の取組み（その2）

……………中谷三男 (18)

「家庭看護・福祉」の指導（その1）

……………河野公子 (21)

OPINION 公園用遊具 ……………興梠三男 (24)

## 教科等実践シリーズ

新しい時代に生きる農業者の育成 ……高田 薫 (26)

「課題研究」の指導実践から ……………福田 稔 (31)

入口からの指導を意識した進路学習の実践

……………大池公紀 (36)

地域に根ざす教育の推進 ……………谷口 坦 (41)

## 産業界の動向

漁業無線の現状と課題について ……稲葉賢之助 (45)

## がんばってます

マリンスポーツへの挑戦 ……………渡辺広樹 (50)

## 職業高校見聞録

岩手県立黒尻工業高等学校を訪ねて …………… (52)

## 諸外国の職業教育

カナダにおける職業教育の現状 ……井出勇人 (54)

## 文部省だより

平成4年度産業教育振興関係国庫負担（補助）事業の概要…………… (58)

表紙デザインの解説 ……………大西 洋

第42巻第5号：1992年5月1日（宇都宮大学附属図書館）

## 巻頭特集 若年者の意識の変化と今後の進路指導の在り方

社会の変化と高校生の意識の変容 ……武内 清 (2)

若者の職業意識と進路指導の課題 ……天谷 正 (7)

## 職業に関する教科・科目の研究等

科目「課題研究」の学習評価について

……………影山博之 (12)

商業教育における英語コミュニケーション能力の育成……………岡本次夫 (15)

情報ネットワークによる水産教育の推進

……………福留弘夫 (18)

高等学校卒業者の就職をめぐる諸問題—その1—……………鹿嶋研之助 (21)

OPINION 英訳、和訳の落とし穴 ……トミー植松 (24)

## 教科等実践シリーズ

職業資格取得への取組み ……………原 隆司 (26)

学校5日制を実践して ……………福滝 隆 (31)

情報処理教育を推進するための教育課程の編成と指導方法について……………看護教育研究委員会 (36)	
ホームルーム活動における進路指導学習の指導 (その 2)……………星野秀文 (41)	
諸外国の職業教育	
学校進路指導の国際的動向……………仙崎 武 (45)	
がんばってます	
ガソリン 1 リットルで東京から北海道旭川まで……………山倉裕ほか (50)	
職業高校紹介	
大阪に白菊あり……………(52)	
産業界の動向	
若年労働者の減少期における企業の対応……………篠原邦彦 (54)	
文部省だより	
休日の拡大等に対応した青少年の学校外活動の充実について……………(60)	
表紙デザインの解説……………関口美端子	
第 42 巻第 6 号：1992 年 6 月 1 日 (宇都宮大学附属図書館)	
巻頭特集 新しいタイプの職業高校の魅力と課題	
生徒の個性・特性を伸ばす高校づくり……………竹内克好 (2)	
総合選択制高校への転換……………山崎 賜 (7)	
職業に関する教科・科目の研究等	
特色ある工業教育の実践……………岩本宗治 (12)	
特色ある商業教育への取り組み……………岡田修二 (15)	
高等学校栽培漁業技術検定の導入と課題……………石崎昭二 (18)	
「看護臨床実習」の指導計画の作成と学習指導……………田中靖子 (21)	
OPINION 実習船と共に 33 年……………服部保次郎 (24)	
教科等実践シリーズ	
生徒が意欲的に取り組む「課題研究」をめざして……………渡邊 修 (26)	
地域の実態に対応した学科の改善と課題……………西村栄一郎 (31)	
家庭に関する学科の活性化をめざして……………袴田 實 (36)	
自律性の育成と確立をめざした勤労体験学習の指導計画・指導法の改善……………山下 忍 (41)	
産業界の動向	
我が国の自動車産業の動向……………朝倉光景 (46)	
がんばってます	
家政科で学んだことを今、健康教育に生かして……………森川道子 (50)	
職業高校紹介	
仙台女子商業高等学校の現況……………米谷 稔 (52)	

諸外国の職業教育	
アメリカの消費者教育視察を終えて (1)……………河野公子 (54)	
文部省だより	
新しいタイプの職業学科……………(58)	
表紙デザインの解説……………宇野史子	
第 42 巻第 7 号：1992 年 7 月 1 日 (宇都宮大学附属図書館)	
巻頭特集 職業資格の現状と展望	
資格取得と学習成果の評価……………山本恒夫 (2)	
企業は資格取得をどのように奨励し評価しているか……………岩田一夫 (7)	
職業に関する教科・科目の研究等	
高等学校造園技術検定の導入と課題……………佐藤順彦 (12)	
電気主任技術者「学校等の認定基準」の改正について……………岩本宗治 (15)	
家庭に関する学科と職業資格……………河野公子 (18)	
商業教育と資格取得……………岡田修二 (21)	
OPINION 思いやりのインテリア……………山本其親代 (24)	
教科等実践シリーズ	
進路の実態に応じた農業教育……………水野 隆 (26)	
物づくり教育に重点をおいた教育課程の実践……………小笠原朋憲 (31)	
コミュニケーション能力の育成の取り組み……………来島 勲 (36)	
ホームルーム活動における進路学習の指導 (その 3)……………山野晴雄 (41)	
産業界の動向	
看護職員需給見通しについて……………矢野正子 (46)	
がんばってます	
水産高校から水産大学へ……………半藤逸樹 (50)	
職業高校紹介	
福井県立大野東高等学校……………川治宏友 (52)	
諸外国の職業教育	
アメリカの消費者教育視察を終えて (2)……………河野公子 (54)	
文部省だより	
高等学校職業教育と関連する公的職業資格……………(58)	
表紙デザインの解説……………津村早苗	
第 42 巻第 8 号：1992 年 8 月 1 日 (宇都宮大学附属図書館)	
巻頭特集 高等学校教育の今後の展望と職業教育「高等学校教育の改革の推進に関する会議 (第一次報告) を踏まえて」	
高等学校教育改革の理念と方向……………亀井浩明 (2)	



- 職業高等学校の今後の展望……………大橋信定 (7)
- 職業に関する教科・科目の研究等
- 農業に関する学科の改編の現状と展望  
……………佐藤順彦 (12)
- 「家庭看護・福祉」の指導 (その2)  
……………河野公子 (15)
- 「看護基礎医学」の指導計画の作成と学習指導  
……………大橋泰久 (18)
- 高等学校卒業者の就職をめぐる諸問題 (その2)  
……………鹿嶋研之助 (21)
- 教科等実践シリーズ
- 我が校のものの作り教育……………亀田光重 (24)
- 新しい情報処理教育への取組み  
……………越後谷稔 (28)
- 服飾デザイン科への改編……………森原正博 (32)
- 心豊かな職業人の育成をめざす勤労体験学習  
……………伊藤房子 (36)
- 文部省だより
- 高等学校教育の改革の推進について  
報告の概要……………(40)
- 高等学校教育の改革の推進について (第一次報告)  
……………(45)
- 表紙デザインの解説……………羽角 都
- 第42巻第9号: 1992年9月1日 (宇都宮大学附属図書館)
- 巻頭特集 新しい教育課程編成の実際
- 家庭に関する学科における教育課程編成の実際  
……………菅野栄子 (2)
- 看護に関する学科の教育課程編成の実際  
……………林 滋子 (7)
- 職業に関する教科・科目の研究等
- 看護に関する学科の教育課程の編成  
……………小田切希伊子 (12)
- 教育課程等質疑応答シリーズ<家庭>  
……………河野公子 (16)
- OPINION 出会い……………木村英士 (22)
- 教科等実践シリーズ
- 科目「交通安全」の実践……………小柳進介 (24)
- 生活デザイン科の設置……………六反田平 (29)
- 情報処理教育を推進するための教育課程の編成と指導方法……………服部愛子 (34)
- 地域に密着した勤労体験学習……………磯田 明 (39)
- 海技士資格に対応した教育課程の編成  
……………鎗田邦彦 (44)
- がんばってます
- 情報処理科に学び商業科教諭になって  
……………山崎洋子 (50)
- 職業高校紹介
- 富山県立高岡工芸高等学校……………(52)
- 都道府県産業教育だより—東京都
- 東京都公立高等学校教育課程編成基準・資料について……………東京都教育庁 (54)
- 文部省だより
- 高等学校教育の改革の推進について (第二次報告)  
の概要……………(58)
- 表紙デザインの解説……………増岡剛年
- 第42巻第10号: 1992年10月1日 (宇都宮大学附属図書館)
- 巻頭特集 新しい教育課程編成の実際 (Ⅱ)
- 商業の学科に関する新しい教育課程編成の実際  
……………竹之下幸一郎 (2)
- 水産に関する学科における新しい教育課程編成の実際……………勝木 茂 (7)
- 職業に関する教科・科目の研究等
- 教育課程等質疑応答シリーズ<商業>  
……………岡田修二 (12)
- 教育課程等質疑応答シリーズ<水産>  
……………中谷三男 (86)
- OPINION 貌 (かたち) と中身……………橋本保雄 (24)
- 教科等実践シリーズ
- 「課題への挑戦」手引の作成……………村松 轟 (26)
- 家庭に関する学科の活性化をめざして  
……………堀田正登 (31)
- 進路適性検査を利用・活用した多面的進路指導の実践……………釜我憲治 (36)
- 産業界の動向
- 高齢者福祉対策の現状と課題……………村川浩一 (41)
- 産業界の動向
- ビジネスにおけるコンピュータの利用状況と課題  
……………茂岡省三 (48)
- がんばってます
- 「家庭クラブ」での発表を体験して  
……………千葉朋子 (52)
- 職業高校紹介
- 愛媛県立宇和島水産高等学校……………(54)
- 都道府県産業教育だより—埼玉県
- 商業教育における国際交流の推進  
……………埼玉県教育局 (56)
- 文部省だより
- 平成3年度公立高等学校における中学生の体験入学等の実施状況……………(60)
- 表紙デザインの解説……………松井美与

第 42 巻第 11 号：1992 年 11 月 1 日（宇都宮大学附属図書館）

巻頭特集 新しい教育課程編成の実践（Ⅲ）

農業に関する学科における新しい教育課程編成の実  
際……………久保田旺（2）

工業に関する学科における新しい教育課程編成の実  
際……………岩本 洋（7）

職業に関する教科・科目の研究等

教育課程等質疑応答シリーズ＜農業＞  
……………佐藤順彦（12）

教育課程等質疑応答シリーズ＜勤労体験学習＞  
……………浅見 匡（18）

OPINION 体験的工業高校論……………信川仁道（24）

教科等実践シリーズ

学校における地域社会との連携事業  
……………上島雄次郎（26）

香川県立三豊工業における教育課程の取組み  
……………佐伯圭治（31）

課題解決型学習の展開と課題……………外村昭孝（36）

家政科から教養福祉科への学科転換  
……………佐藤 祝（41）

産業界の動向

「新しい食料・農業・農村政策の方向」について  
……………相馬厚司（46）

がんばってます

伝統ある農村歌舞伎の継承……………上野直哉（50）

職業高校紹介

山口県立岩国商業高等学校……………金谷 昂（52）

都道府県産業教育だより—秋田県

第 2 回秋田県職業教育フェアについて  
……………秋田県教育庁（54）

文部省だより

学校における情報教育の実態等に関する調査結果  
……………（58）

表紙デザインの解説……………柏田由香

第 42 巻第 12 号：1992 年 12 月 1 日（宇都宮大学附属図書館）

巻頭特集 変化に対応した教員等の資質の向上

産業技術の発展に対応した社会人のためのリカレン  
ト教育……………清水康敬（2）

産業技術の進展と求められる教員の資質  
……………芦田守道（9）

職業に関する教科・科目の研究等

教育課程等質疑応答シリーズ＜工業＞  
……………岩本宗治（14）

OPINION 暮らしとバイオテクノロジー

……………川村賢司（22）

教科等実践シリーズ

地域との連携を目指す教育活動……………吉松忠夫（24）

学校商業クラブ活性化への提言……………柏原敏之（29）

「ふれあい体験学習」事業について  
……………柴田昭二（34）

日常活動における勤労体験学習の在り方  
……………六車 梯（39）

産業界の動向

産業界における情報処理の動向……………塚本榮一（44）

がんばってます

バルセロナオリンピックに出場して  
……………漢人陽子（48）

職業高校紹介

沖縄県立北部農林高等学校……………村吉誠徳（50）

諸外国の職業教育

期待される高等学校長の新しい役割とリーダーシッ  
プ……………中留武留（52）

文部省だより

平成 3 年度公・私立高等学校における中途退学者数  
等の状況（抄）……………（56）

表紙デザインの解説……………森元亜紀

第 43 巻第 1 号：1993 年 1 月 1 日（国立国会図書館デ  
ジタルコレクション）

平成 5 年 年頭の所感……………森山真弓（2）

巻頭特集 職業教育と継続教育

職業教育と継続教育……………小林一也（6）

職業に関する教科・科目の研究等

農業経済学科の現況と展望（1）……………村川文彦（11）

商業における魅力ある「課題研究」をめざして  
……………大西邦彦（14）

家庭科男女必修の意義と課題（その 1）  
……………河野公子（17）

特別企画 第 2 回全国産業教育フェア

第 2 回全国産業教育フェアを振り返って  
……………杉田 豊（20）

産業教育フェアに参加して……………久保田幸弘（24）

産業教育フェアに参加して……………山梨高志（26）

産業教育フェアに参加して……………杉本裕幸（28）

OPINION 創造化社会の教育……………田結 年（30）

教科等実践シリーズ

福祉科への転換……………山岡信雄（32）

本校における看護情報処理教育の実践  
……………台野道子（37）

学校の特色を生かした勤労体験学習  
……………星野芳雄（42）

がんばってます

東海地区工業高校生ロボット競技大会技術賞受賞  
……………野田英樹（48）

## 文部省だより

- 平成5年度産業教育振興関係所要経費一覧(予定額)  
 ..... (50)
- 表紙デザインの解説 ..... 橋本浩彰

第43巻第2号：1993年2月1日(宇都宮大学附属図書館)

## 巻頭特集 地域の特色を生かした職業教育

- 地域の特色と職業教育 ..... 鮎川二郎 (2)
- 地域の特色を生かした職業教育 ..... 内田信正 (7)
- 職業に関する教科・科目の研究等

- 農業経済科の現況と展望 (2) ..... 村川文彦 (12)
- 地域産業の発展と工業教育 ..... 西澤 爽 (15)
- 地域の発展と水産教育 ..... 金子光徳 (18)
- 家庭科男女必修の意義と課題 (その2)  
 ..... 河野公子 (21)

- OPINION 第2土曜日に地域への貢献  
 ..... 中嶋三代支 (24)

## 教科等実践シリーズ

- 地域の特色を生かした農業教育 ..... 高橋常昭 (26)
- アプリケーションソフトを活用した情報処理教育  
 ..... 北野 修 (31)
- 課題解決型学習の展開と課題 ..... 原田 久 (36)

## 産業界の動向

- 食品産業のトレンド意識 ..... 加藤千士 (42)

## 職業高校紹介

- 青森県立八戸水産高等学校 ..... (46)

## 諸外国の職業教育

- ドイツ連邦共和国における職業教育  
 ..... 岩本宗治 (46)

## 文部省だより

- 平成5年3月高等学校卒業予定者の就職内定状況に  
 関する調査について ..... (52)
- 表紙デザインの解説 ..... 小田島幸江

第43巻第3号：1993年3月1日(宇都宮大学附属図書館)

## 巻頭特集 職業教育を通しての新しい学力観

- 高等学校における職業教育の新しい学力観  
 ..... 清水希益 (2)

## 職業に関する教科・科目の研究等

- 新技術に対応した新しい実験・実習の研究  
 ..... 岩本宗治 (7)

## 教育課程等質疑応答シリーズ&lt;進路指導&gt;

- ..... 鹿嶋研之助 (10)

- 課題解決型学習の展開と課題 ..... 麻生駿一 (16)

## OPINION 高校水産教育の流れに思う

- ..... 穴戸栄也 (20)

## 教科等実践シリーズ

- 農業構造の変化及び食品産業の拡大に対応した農業  
 経済系学科の教育課程の編成と指導方法  
 ..... 前田和人 (22)

- 新しい時代に対応した実験・実習の改善  
 ..... 高橋智夫 (27)

- 職業人の育成を目指した学科の改編  
 ..... 酒井雄一郎 (32)

- 本校の進路指導計画と本年度における就職希望者の  
 就職内定状況と指導上の課題  
 ..... 柴田重則 (36)

## 産業界の動向

- 我が国鉄鋼業の動向 ..... 相良直哉 (42)
- がんばってます  
 料理人テラから人々へのメッセージ  
 ..... 相原弘義 (46)

- 園芸業界の生産・流通・販売のネットワーク化を目  
 指して ..... 大林修一 (48)

## 職業高校紹介

- 熊本県立熊本農業高等学校を訪ねて ... 稲葉勝喜 (50)
- 都道府県産業教育だよりー岡山県

- 岡山県における職業教育の現状について  
 ..... 黒瀬定生 (52)

- 表紙デザインの解説 ..... 須藤正光

第43巻第4号：1993年4月1日(宇都宮大学附属図書館)

## 巻頭特集 高等学校における家庭科の男女必修

- 生涯学習社会と家庭科男女必修の意義  
 ..... 中間美砂子 (2)

- 家庭科男女必修に期待する ..... 水戸口道彰 (7)

## 職業に関する教科・科目の研究等

- 平成3・4年度研究指定校における新教育課程の実  
 践 ..... 小池純祥 (12)

- 商業教育の活性化を求めて ..... 岡田修二 (15)

- 個を生かす教育の現状と課題 ..... 石谷善英 (18)

- 家庭科男女必修の円滑実施 ..... 河野公子 (21)

- OPINION 家庭科必修と生涯学習 ... 小野元之 (24)

## 教科等実践シリーズ

- 「課題研究」の実践的な指導内容・方法・評価につ  
 いて ..... 秋葉福廣 (26)

- 工業高校における家庭科の指導 ..... 西野武雄 (31)

- 潜水教育の歩みと課題 ..... 森作継男 (36)

- 中学校における進路指導改善の動向と職業高校の課  
 題 ..... 鹿嶋研之助 (41)

## 産業界の動向

- 最近のロシア極東の漁業事情など  
 ..... 尾形悠紀夫 (46)

がんばってます

測量と地図に係わって ..... 豊田友夫 (50)

職業高校紹介

燃える新工志高く ..... 松川 護 (52)

都道府県産業教育だより—大阪府

家庭科男女必修に向けての整備計画  
..... 林 煥 (54)

文部省だより

平成 5 年度高等学校教員資格認定試験の案内  
..... (58)

表紙デザインの解説 ..... 福光千尋

第 43 巻第 5 号：1993 年 5 月 1 日（宇都宮大学附属図書館）

OPINION 新技術に想う ..... 吉武香代子 (2)

巻頭特集 新技術に対応した職業教育の在り方

新技術に対応した職業教育の必要性  
..... 清水武明 (4)

新技術に対応する農業教育 ..... 角田順三 (9)

職業に関する教科・科目の研究等

農業高校における学校農場の現状と課題 (1)  
..... 佐藤順彦 (14)

新技術を導入した「実習」と「製図」の指導計画と指導方法について ..... 池館速夫 (17)

情報企画科におけるコミュニケーション能力育成への期待 ..... 柳生雄久 (20)

「看護情報処理」への取組みと今後の課題  
..... 森山美佐子 (23)

がんばってます

保育者への道程 ..... 高木菜巳 (26)

職業高校紹介

生き生き、伸び伸び、爽やか——府商  
..... 坂根正一郎 (28)

教科等実践シリーズ

個々の生徒の特性等に対応するためのコース性の導入について ..... 早部賢一郎 (30)

新技術に対応した工業教育の実践 ... 菅野 清 (35)

情報処理教育を推進するための教育課程の編成と指導方法について ..... 橋本久一 (40)

郷土理解を深め、豊かな心を育てる勤労体験学習  
..... 別府俊紘 (45)

諸外国の職業教育

アメリカ合衆国における科学技術教育の実践状況  
..... 桑原 明 (50)

文部省だより

総合学科について ..... (54)

表紙デザインの解説 ..... 嶋谷友美

(まるやま つよし 教育推進機構 非常勤講師)

(おだか すすむ 教育推進機構 教授)

# 工学院大学学習支援センター物理科利用による 教育効果の統計分析

高橋浩久，永井朋子，紀基樹，細谷哲雄  
露木孝尚，武藤恭之，小麥真也

## Statistical Analysis of Educational Effects by Using Academic Support Center at Kogakuin University

TAKAHASHI Hirohisa, NAGAI Tomoko, KINO Motoki,  
HOSOYA Tetsuo, TSUYUKI Takanao,  
MUTO Takayuki, KOMUGI Shinya

### 概要

2023 年度入学生の学習支援センター物理科利用者について，その教育効果とサービスの利用傾向について回帰木による統計分析を行った．結果，どの学力層でも学習支援センター非利用に比べ利用による学力上昇傾向が確認されるとともに，複数回，継続的な利用をすることでより効果が大きいことが確認された．

### 1. はじめに

工学院大学（以後本学）に設置されている学習支援センター（以後当センター）物理科は主に初年次学生，特に高校で物理を未履修だった学生や苦手意識のある学生を対象に，自由参加の講義形式による基礎講座，個別指導を実施している．特に，コロナ禍における遠隔指導の仕組みを整える中で，遠隔による個別指導や，自学自習用として CoursePower（以後 CP）上にオンデマンド教材を設置して学習支援を行っている<sup>1,2</sup>．こうした当センターの学習支援の効果は，これまで定性的な意味で語られることが多く，定量的な分析はあまりされてこなかったが，2022 年永井らにより統計手法を用いた教育効果の分析が行われるようになった<sup>3</sup>．

本研究では，永井らの決定木を用いた当センターの教育効果の分析<sup>3</sup>をより深く，詳細に明

らかにすることを試みる。すなわち、当センター物理科の利用者がどのサービスをどのように利用して学力が変化したかを調べる。そのため、入学時に実施された「習熟度調査」から 1 クォータ（以後 1Q）末に実施された「物理学及び演習 I（運動学）」試験総点の間の偏差値変化を主な目的変数とし、個別指導利用回数、基礎講座出席回数、CP 資料ダウンロード数を主な説明変数として回帰分析を行った。

その結果、23 年度における「習熟度調査」と「物理学及び演習 I」1Q 試験総点との間で、当センター物理の利用者は約 3.0 の偏差値上昇を示し、一方で非利用者では約 1.6 の減少でその差は約 4.6 となり、当センター物理科の利用が学力向上に寄与したことが明らかになった。また回帰分析により、個別指導を複数回利用することの影響が大きく、2 回以上利用することで、約 7.1 の偏差値上昇が見込まれることが分かった。また各サービスの効果を個別に回帰分析したところ、いずれのサービスも利用回数が多いことが強く影響し、偏差値上昇にも寄与すること、すなわち、当センターの継続利用による効果が高いことが明らかになった。さらに各学力層に分けて分析を行った結果、いずれの学力層でも非利用者に対して学習支援の効果があることが示された。なお、また下位層と中位層では個別指導の影響が、上位層には CP 資料ダウンロードの影響が大きく、利用方法に違いが見られた。

本論文は以下のように構成される。第 2 章において本研究で用いた解析手法について述べる。当センター利用による学力変化（教育効果）を詳細に分析した結果を第 3 章で述べ、第 4 章でその結果について考察する。最後に第 5 章で結論をまとめる。

## 2. 解析手法

本研究では、当センターが提供している 3 つのサービス（個別指導、基礎講座、CP オンデマンド教材）のどれが学力変化に影響を及ぼすかを知るために決定木分析を実施した。

### 2.1 決定木分析

決定木分析とは、ルールに合致した説明変数の分割を基にノードを分岐して木構造（樹形図）を生成し、目的変数に影響を及ぼしている説明変数を見つけ出す分析手法である<sup>4,5</sup>。なお決定木分析には、目的変数として質的変数を採用する分類木分析と、量的変数を用いる回帰木分析がある。本研究では試験間の偏差値変化やレポート点といった量的変数を用いるので、専ら回帰木分析を行う。

分岐とは、ノードサンプルをある説明変数の値で分割することであるが、一般にサンプルの分割方法は複数存在し、その中でどの分割方法を木構造の分岐として採用するかにはルールを設定しておく必要がある。分岐のルールにもいくつか種類があるが、本研究では、分岐前後で平均二乗誤差の変化を最小にする（＝最も減少させる）というルールを採用する。その詳細を説明する。分割前ノード  $n_0$ （サンプル数  $N_0$ ）を、 $n_1$ （サンプル数  $N_1$ ）と  $n_2$ （サン

プル数  $N_2$ ) の 2 つに分割したとする. 分割前ノード  $n_0$  についてサンプルの平均値とそれに対する二乗誤差  $\varepsilon_0$  を求める. 分割後ノード  $n_1, n_2$  についてもそれぞれの平均値とその二乗誤差  $\varepsilon_1$  と  $\varepsilon_2$  を求める. これらを用いて分割前後での平均二乗誤差の変化

$$\Delta\varepsilon = \left( \frac{N_1}{N_0} \varepsilon_1 + \frac{N_2}{N_0} \varepsilon_2 \right) - \varepsilon_0$$

を計算する. あらゆる分割パターンについてこのような計算を行い,  $\Delta\varepsilon$  を最小にするような分割を木構造の分岐として採用するのが回帰木分析の分岐のルールである<sup>5,6</sup>.

このような分岐は  $i$  番目のノード  $n_i$  の平均二乗誤差が  $\varepsilon_i = 0$  となるまで繰り返される. こうして, 最上位の分岐は母集団に最も影響を与えた分岐条件が何であったかを示し, 下位の分岐は, 分岐後ノードのサンプルの中で最も影響を与えた分岐条件を示す. 本研究では集団に大きく影響した分岐条件が何であるかを調べるため, あまり深く取らず分岐数 (木の深さ) を 2 で打ち切ることにする.

## 2.2 本研究の設定

以下で本研究の問題設定の詳細を述べる.

回帰木分析するサンプルは, 1Q「物理学及び演習 I」試験受験者かつ当センター物理科の利用者 (個別指導利用または基礎講座出席または CP 資料をダウンロードした者) であるような 322 名である. (なお後述するように, 詳細を分析するためこの母集団をさらに学力層に分けた集団に対して分析も行った.)

本分析の主な目的変数に, 「習熟度調査」と 1Q「物理学及び演習 I」試験総点 (レポート点含む) の間での偏差値変化を採用する. 偏差値の定義には日本でよく利用されている学力偏差値 (以後偏差値) を採用する. すなわち, 平均値を 50, 標準偏差を 10 とするような正規分布に従うとして試験の得点分布を標準化したもので, 試験の得点分布における平均値を  $\mu$ , 標準偏差を  $\sigma$  としたとき, 偏差値は,

$$(\text{学力偏差値}) = 50 + \frac{10 \times (\text{得点} - \mu)}{\sigma}$$

と定義される. なお本研究では偏差値の算出は以下のように行った. 本学では「物理学及び演習 I」を受講 (受験) しない学生も「習熟度調査」を受験する. そこで「物理学及び演習 I」1Q 試験を受験した 1 年生 911 名を対象に「習熟度調査」の偏差値を算出した. また「物理学及び演習 I」1Q 試験の偏差値を算出して「習熟度調査」と「物理学及び演習 I」との差により学力推移を見積もる. これにより利用者 (322 名) と非利用者 (589 名) との変化の違いを調べることができる.

本分析の説明変数として, 主に個別指導利用回数, 基礎講座出席回数, CP 資料ダウンロード

ド数を採用する。なお、CP の説明変数として接続数（アクセス数）を用いることも可能であるが<sup>3</sup>、接続数には資料閲覧以外の数も含まれており、教育効果を調べる上では適切でない可能性がある。CP 資料ダウンロード数であれば、自学自習に活用したと解釈することができ、より適切な説明変数とみなすことができる。

以上のような設定で、1Q 間で当センター物理科の利用者が、全体の中でどれほど学力が変化し、また当センターのサービスをどのように利用したことが学力変化に影響したかを分析していく。

なお本研究では Python の scikit-learn ライブラリ標準の CART<sup>4</sup> アルゴリズムに基づいた回帰木分析のコードを実装した。

### 3. 学力変化と教育効果の解析結果

#### 3.1 試験総点への影響

まず初めに目的変数として、試験総点（レポート点を含む）との偏差値変化を採用した場合の分析結果を述べる。レポート点を含んだ評価なので、物理概念の理解力や計算力に加えて記述力を含んだ総合力を評価しているとみなせる。このときの偏差値変化の全体平均は -0.0 であり、偏差値を指標としたので当然全体ではほとんど変化はない。一方利用者と非利用者でそれぞれ平均をとったところ、利用者平均が 3.0 の上昇、非利用者平均が -1.6 で、その差は 4.6 となり、当センター物理科の利用による学力上昇が大きいことが分かった（表 1）。この効果の詳細についての回帰木分析の結果を以下で述べる。

表 1 23 年度入学生学習支援センター利用者 / 非利用者の 1 クォータ間学力変化の比較

偏差値変化	全体	利用者	非利用者	差
全学力層	-0.0 (911)	3.0 (322)	-1.6 (589)	<b>4.6</b>
上位層 習熟度偏差値 55 超	-5.1 (349)	-4.7 (83)	-5.3 (266)	<b>0.6</b>
中位層 習熟度偏差値 45 ~ 55	-0.2 (236)	1.4 (84)	-1.0 (152)	<b>2.4</b>
下位層 習熟度偏差値 45 未満	5.6 (326)	7.9 (155)	3.5 (171)	<b>4.4</b>

入学時「習熟度調査」と 1Q 末「物理学及び演習 I」試験総点との間の偏差値変化。なお、差は利用者と非利用者の変化の差であり、また括弧内は人数である。

#### a) 全サービスでの回帰木分析

当センター物理科利用者 322 名を母集団とし、当センターで実施している 3 つのサービス（個別指導利用、基礎講座出席、CP 資料ダウンロード）を全て説明変数として採用した場合の回帰木分析の結果を図 1 に示す。最上位分岐は、個別指導を 2 回以上の利用か 1 回以下か



が大きく影響した。すなわち、個別指導を複数回利用したかどうかによる影響と解釈される。2 回以上の利用では偏差値変化が 7.1 で、1 回以下では 1.6 だった。次の分岐では、個別指導 1 回以下利用したグループは CP 資料ダウンロードが大きく影響し、70 回以上ダウンロードで 13.2 の変化、69 回以下では 1.3 だった。個別指導 2 回以上利用したグループではより個別指導を利用したかどうかの影響し、5 回以上利用で 10.0 の変化、2 回以上 4 回以下の利用で 6.4 の変化だった。

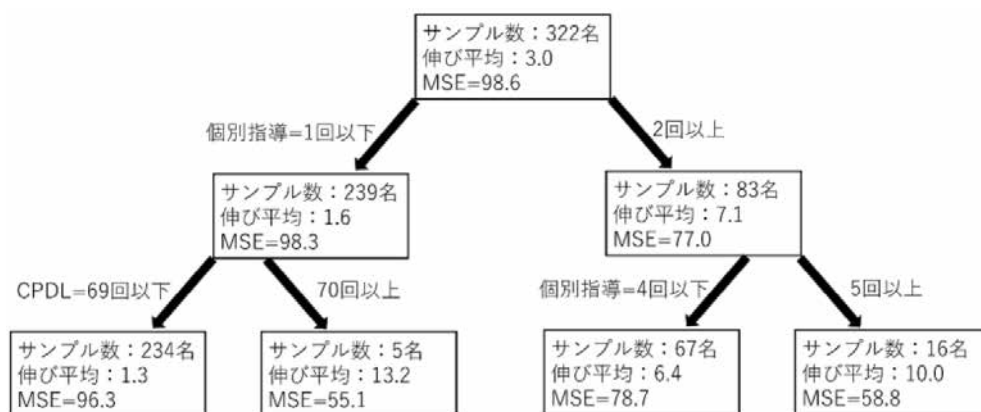


図 1 23 年度入学生学習支援センター物理利用者の 1 クォータ間学力変化についての回帰木分析

入学時「習熟度調査」と 1 Q 末「物理学及び演習 I」試験総点の偏差値変化を目的変数とし、3 つのサービス全てを説明変数とした。

## b) サービスごとの回帰木分析

続いて、各サービスの中での影響を詳細に分析するため、同じ母集団の中で 3 つのサービス（個別指導利用、基礎講座出席、CP 資料ダウンロード）から一つだけを説明変数として選んで回帰木分析を行った。

### b-1) 個別指導

説明変数を個別指導利用数のみとした場合の結果を図 2 に示す。最上位分岐は個別指導の利用 1 回以下か 2 回以上かであるが、これは全サービスを説明変数とした場合には個別指導利用回数を含んでいるので最上位分岐は同じものになる。次の分岐では、個別指導 1 回以下利用したグループは個別指導を利用したかどうかの影響し、利用（1 回）では変化が 1.6、非利用（0 回）では 1.5 だった。個別指導 2 回以上利用したグループではより個別指導を利用したかどうかの影響し、5 回以上利用で変化が 10.0、2 回以上 4 回以下の利用で 6.4 だった。この回帰木から個別指導をより多く利用するほど偏差値上昇が大きいことが分かる。

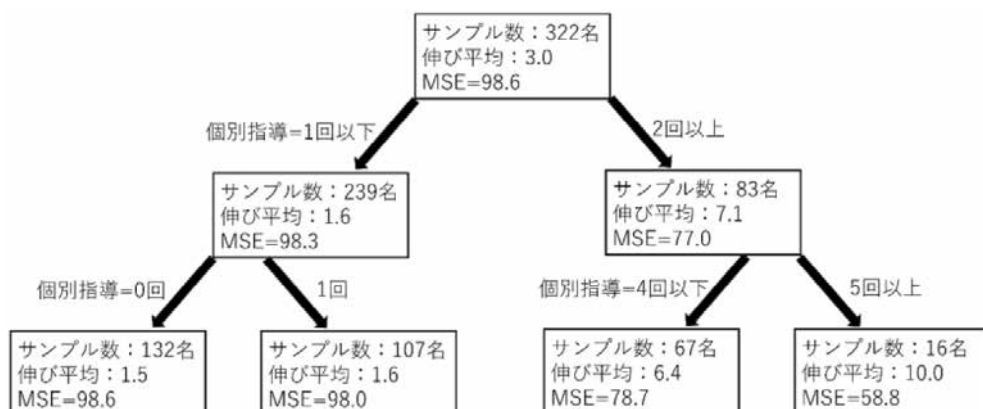


図 2 23 年度入学生学習支援センター物理利用者の 1 クォータ間学力変化についての回帰木分析

目的変数は図 1 と同じ。個別指導利用回数のみを説明変数とした。

## b-2) 基礎講座

説明変数を基礎講座出席回数のみとした場合の結果を図 3 に示す。最上位分岐は、基礎講座出席が 1 回以下か 2 回以上であるかが大きく影響した。すなわち、基礎講座に複数回出席したかどうかによる影響と解釈される。2 回以上出席で変化が 6.8、1 回以下で 2.4 だった。次の分岐では、基礎講座出席 1 回以下のグループは基礎講座に出席したかどうかの影響し、利用（1 回）では変化が 1.5、非利用（0 回）では 2.5 だった。基礎講座出席 2 回以上のグループはより多く基礎講座に出席したかどうかの影響し、6 回出席では変化が 10.6、2 回以上 5 回以下では 5.8 だった。この回帰木から基礎講座に多く出席するほど偏差値上昇が大きいことが分かる。

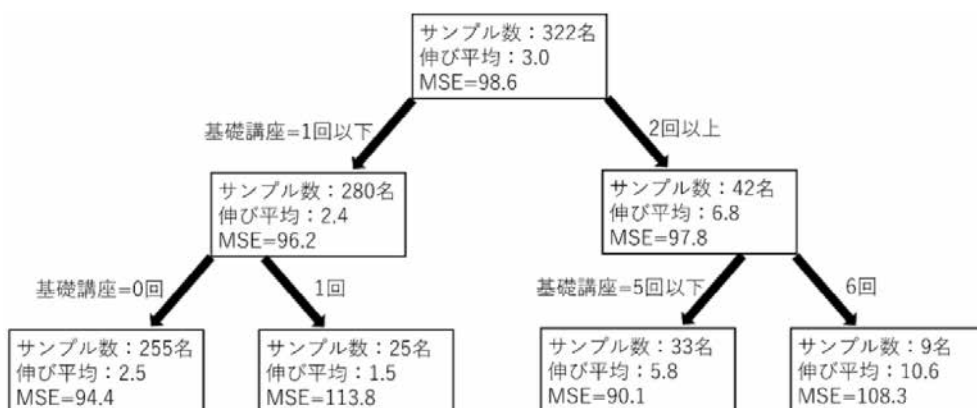


図 3 23 年度入学生学習支援センター物理利用者の 1 クォータ間学力変化についての回帰木分析

目的変数は図 1 と同じ。基礎講座出席回数のみを説明変数とした。

## b-3) CP 資料ダウンロード

説明変数を CP 資料ダウンロード数のみとした場合の結果を図4に示す。最上位分岐は、ダウンロードが 66 回以下か 67 回以上であるかが影響した。すなわち、資料を複数ダウンロードした影響と解釈される。資料ダウンロード 67 回以上で変化が 11.2 で、66 回以下では 2.7 だった。次の分岐では、CP 資料ダウンロード数 66 回以下のグループではダウンロード数 40 回以上 66 回以下で 5.6 変化し、39 回以下で 2.5 変化した。CP 資料ダウンロード数 67 回以上のグループではダウンロード 129 回以上で 19.9 変化し、67 回以上 128 回以下では 9.1 変化した。この回帰木から CP 資料ダウンロード数が多いほど偏差値上昇が大きいことが分かる。

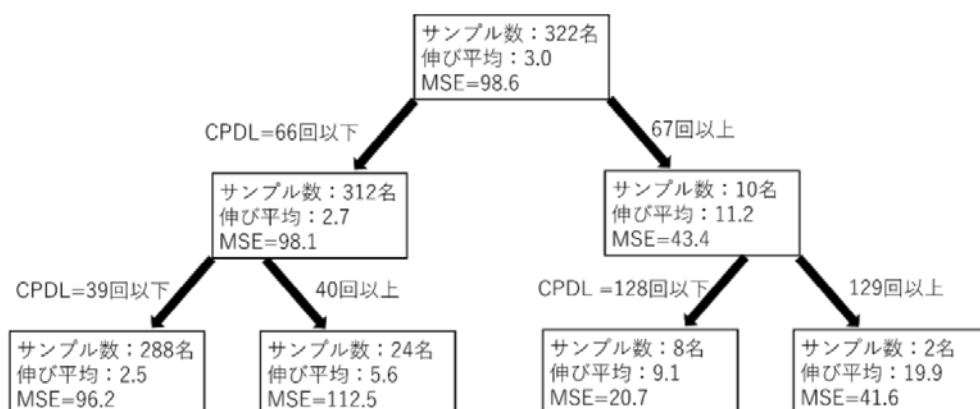


図4 23年度入学生学習支援センター物理利用者の1クォータ間学力変化についての回帰木分析

目的変数は図1と同じ。CP 資料ダウンロード数（CPDL）のみを説明変数とした。

## 3.2 マーク点への影響

ここまでは習熟度調査と試験総点間の偏差値変化を目的変数としたが、1Q 末実施のマーク試験点（以後マーク点）との間の偏差値変化を目的変数とした場合を議論する。1 度限りのマーク試験であるため、物理概念の理解やその定着、また計算力を抽出して評価しているとみなせる。全体の偏差値変化は偏差値の特性から平均 -0.0 であった。利用者については平均 1.6 の上昇で、非利用者については平均 -0.9 でその差は 2.5 であり、マーク点についても当センター物理の利用による学力上昇効果があった（表2）。この効果の詳細についての回帰木分析の結果を以下に述べる。

表 2 23 年度入学生学習支援センター利用者 / 非利用者の学力変化の比較

偏差値変化	全体	利用者	非利用者	差
全学力層	-0.0 (911)	1.6 (322)	-0.9 (589)	2.5
上位層 習熟度偏差値 55 超	-4.1 (349)	-4.9 (83)	-3.9 (266)	-1.0
中位層 習熟度偏差値 45 ～ 55	-0.2 (236)	0.4 (84)	-0.5 (152)	0.9
下位層 習熟度偏差値 45 未満	4.6 (326)	5.7 (155)	3.5 (171)	2.2

入学時「習熟度調査」と 1Q 末「物理学及び演習 I」マーク点との間の偏差値変化。なお、差は利用者と非利用者の変化の差であり、また括弧内は人数である。

### c) 全サービスでの回帰木分析

当センター物理科利用者 322 名を母集団とし、マーク点との間の偏差値変化を目的変数に変更した上で、全サービスを説明変数として選んだ場合の回帰木分析の結果を図 5 に示す。最上位分岐は、試験総点の場合と異なり、基礎講座出席 1 回以下か 2 回以上かどうか、すなわち、基礎講座に複数回出席したかどうかが大きく影響した。なお、2 回以上の利用では偏差値変化が 5.9 で、1 回以下では 1.0 だった。次の分岐では、基礎講座に 1 回以下出席したグループには CP 資料ダウンロードが大きく影響し、71 回以上ダウンロードで 16.9 の変化、70 回以下では 0.8 だった。基礎講座に 2 回以上出席したグループでも CP 資料ダウンロードが大きく影響し、15 回以上ダウンロードで 7.7 の変化、14 回以下では 2.1 だった。この回帰木から、基礎講座に複数回出席するか、CP 資料を多くダウンロードすることで大きく偏差値上昇したことが分かる。

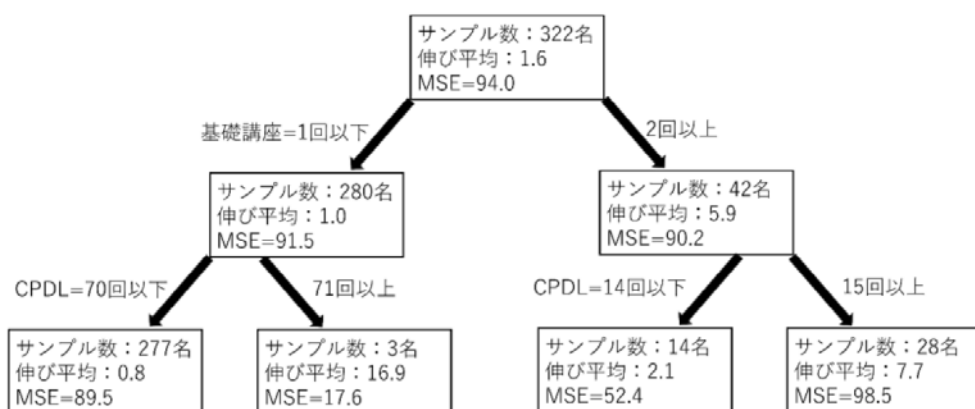


図 5 23 年度入学生学習支援センター物理利用者の 1 クォータ間学力変化についての回帰木分析

入学時「習熟度調査」と 1Q 末「物理学及び演習 I」マーク点の偏差値変化を目的変数とし、3 つのサービス全てを説明変数とした。

なお試験総点の場合と比べて個別指導利用の影響が明らかに小さくなっている。質問対応を基本とする個別指導と体系的に解説を行う基礎講座の性質の違いが、授業内容に習熟しているかどうかを測る期末試験の結果に影響したと思われる。

### 3.3 レポート点への影響

「物理学及び演習Ⅰ」ではレポート課題が課されており、運動学について自ら初期条件を設定した上で運動を論じることが要求されている。自ら問題設定をすることや図示することに不慣れな学生が多いため、当センター物理科ではレポート課題に関する質問が圧倒的に多い。したがって、レポート点への寄与が予測される。そこで目的変数にレポート点を採用した場合の回帰木分析を行った。なお、習熟度調査からの変化ではなく、レポート点への直接の影響を調べる意味で、レポート点の素点をそのまま目的変数として採用した。レポート点の全体平均は21.0点、利用者平均22.5点でこちらも当センター物理科利用による効果があった。この効果の詳細についての回帰木分析の結果を以下に述べる。

#### d) 全サービスでの回帰木分析

当センター物理科利用者322名を母集団とし、レポート点を目的変数に変更した上で、全サービスを説明変数として選んだ場合の回帰木分析の結果を図6に示す。最上位分岐は、個別指導利用が0回か1回以上かどうか、すなわち、個別指導を利用したかどうか大きく影響した。なお、1回以上の利用ではレポート点平均は24.0点で、0回では20.4点だった。次の分岐では、個別指導利用0回のグループではCP資料ダウンロードが影響し、9回以上ダウンロードで18.8点、8回以下では21.9点だった。個別指導利用1回以上のグループでは個別指導を複数回利用したかどうかの影響が影響し、2回以上利用で24.8点、1回の利用で23.3点だった。この回帰木から個別指導を利用せずにCP資料ダウンロードした場合に、レポート点への影響に逆転現象が起きており、CP資料ダウンロードがレポート点を上昇させることに寄与しなかったことが分かる。一方個別指導をより多く利用するとレポート点を大きく上昇させている。

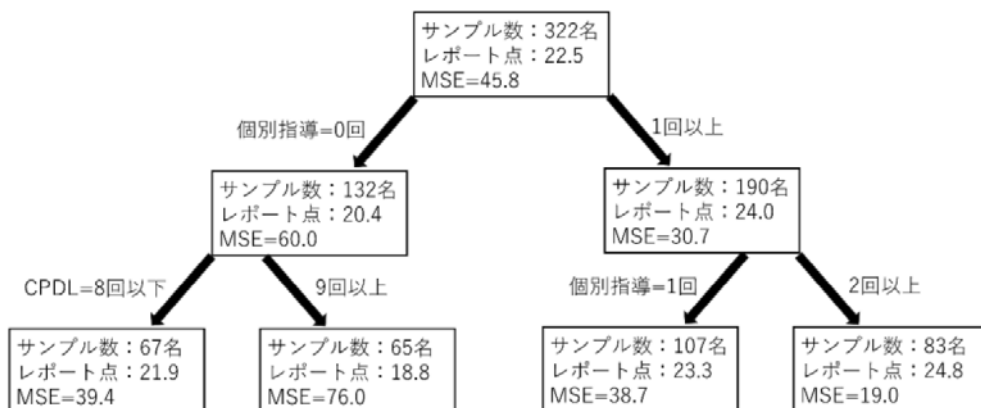


図 6 23 年度入学生学習支援センター物理利用者のレポート点についての回帰木分析

「物理学及び演習 I」のレポート点を目的変数とし、3つのサービス全てを説明変数とした。

### 3.4 学力層毎の分析

当センターは、学習環境や入試形態の多様化を受け、大学の授業レベルに不安を感じる学生、さらには高校レベルの内容に不安な学生に対してフォローアップする役割を担っている。したがって学力的に下位層への貢献が期待されている訳ではあるが、実際には、中・上位層も学習支援センターを利用している。そこで、

- 下位層 = 「習熟度調査」偏差値 45 未満
- 中位層 = 「習熟度調査」偏差値 45 以上 55 以下
- 上位層 = 「習熟度調査」偏差値 55 超

のように定義した上で、それぞれの層の利用効果も分析した。ここではいずれも目的変数として試験総点との偏差値変化を採用した。

#### e-1) 下位層

下位層に当たるのは全体の 316 名であり、そのうち 155 名が当センター物理科を利用した。表 1 に示すように下位層全体の試験総点までの偏差値変化は 5.6 だった。そのうち利用者の偏差値変化が 7.9、非利用者では 3.5 の変化で、その差は 4.4 だった。

学力下位層の当センター物理科利用者 155 名を母集団とし、試験総点との間の偏差値変化を目的変数に戻した上で、全サービスを説明変数として選んだ場合の回帰木分析の結果を図 7 に示す。最上位分岐は、個別指導を 2 回以上利用したか 1 回以下か、すなわち、個別指導を複数回利用したかどうかが大きく影響した。なお、個別指導 2 回以上の利用では偏差値が 11.1 変化し、個別指導 1 回以下では偏差値が 6.6 だった。次の分岐では、個別指導 1 回以

下利用のグループでは基礎講座に多数参加したかどうかの影響し、基礎講座 5 回以下の出席で 6.2 の変化、6 回の出席で 19.5 の変化だった。個別指導 2 回以上利用のグループではより多く個別指導を利用したかどうかの影響し、5 回以上の利用で 14.5 変化し、2 回以上 4 回以下の利用で 10.4 だった。この回帰木から、下位層に対しては主に個別指導を複数回利用することの影響が大きく、それにより偏差値上昇したことが分かる。

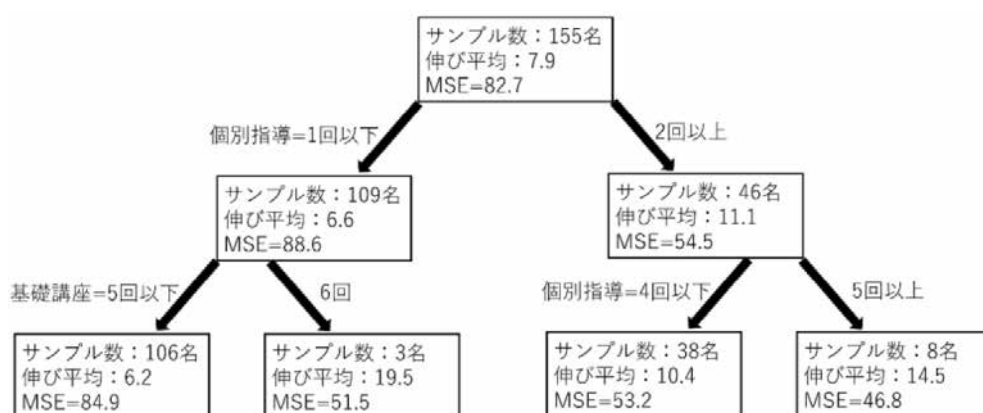


図 7 23 年度入学生学力下位層（習熟度偏差値 45 未満）のうち学習支援センター物理利用者の 1 クォータ間学力変化についての回帰木分析

目的変数と説明変数は図 1 と同じ。

#### e-2) 中位層（「習熟度調査」偏差値 45 以上 55 以下）

中位層に当たるのは全体の 236 名であり、そのうち 84 名が当センター物理科を利用した。表 1 に示すように中位層全体の試験総点までの偏差値変化は  $-0.2$  だった。そのうち利用者の偏差値変化が 1.4、非利用者では  $-1.0$  で、その差は 2.4 だった。

学力中位層の当センター物理科利用者 84 名を母集団とし、試験総点との間の偏差値変化を目的変数に、全サービスを説明変数として選んだ場合の回帰木分析の結果を図 8 に示す。最上位分岐は、個別指導を 2 回以上利用したか 1 回以下か、すなわち、個別指導を複数回利用したかどうかが大きく影響した。なお、個別指導 2 回以上の利用では偏差値が 5.3 変化し、個別指導 1 回以下では偏差値が  $-0.1$  だった。次の分岐では、個別指導 1 回以下利用のグループでは基礎講座に複数回出席したかどうかの影響し、基礎講座 1 回以下の出席で  $-0.8$  の変化、2 回以上の出席で 4.7 の変化だった。個別指導 2 回以上利用のグループでは CP 資料ダウンロードをしたかどうかの影響し、1 回以上ダウンロードで 6.2 の変化、ダウンロード 0 回で 2.7 の変化だった。この回帰木から、中位層ではまずは個別指導を複数回利用したことが影響し、次いで基礎講座や CP 資料のダウンロードが影響した。このことから複数のサービスを使い分けながら多く利用することで偏差値上昇したことが分かる。

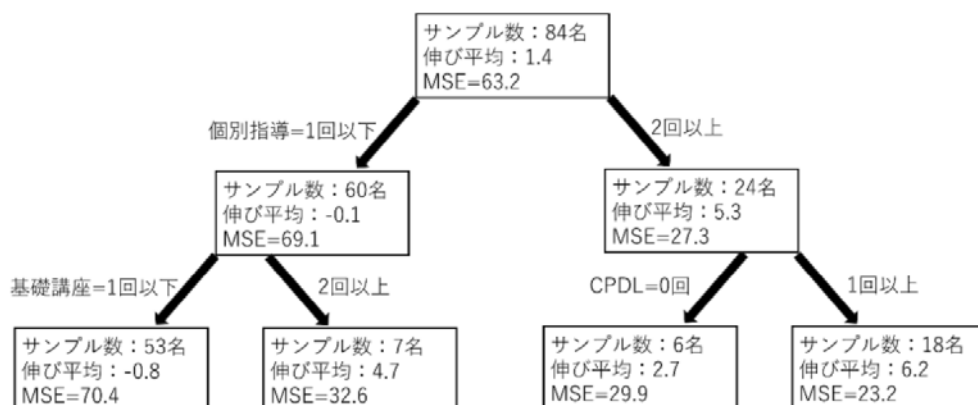


図 8 23 年度入学生学力中位層（習熟度偏差値 45 以上 55 以下）のうち学習支援センター物理利用者の 1 クォータ間学力変化についての回帰木分析

目的変数と説明変数は図 1 と同じ。

### e-3) 上位層（「習熟度調査」偏差値 55 超）

上位層に当たるのは全体の 349 名であり，そのうち 83 名が当センター物理科を利用した．表 1 に示すように上位層全体の試験総点までの偏差値変化は  $-5.1$  だった．そのうち利用者の偏差値変化が  $-4.7$ ，非利用者では  $-5.3$  で，その差は  $0.6$  だった．上位層の偏差値はそもそも上がりにくい，むしろ下降する傾向があるが，当センターの利用により下降幅が小さくなり，わずかながら利用効果があったことが分かる．

学力上位層の当センター物理科利用者 83 名を母集団とし，試験総点と間の偏差値変化を目的変数に，全サービスを説明変数として選んだ場合の回帰木分析の結果を図 9 に示す．最上位分岐は，CP 資料ダウンロードを多数回したかどうかが大きく影響した．なお，ダウンロード 38 回以上の利用では偏差値が  $-9.5$  の変化，37 回以下では  $-4.3$  だった．次の分岐でも CP 資料ダウンロードを多数回したかどうかの影響し，CP 資料ダウンロード 37 回以下のグループでは，ダウンロード 29 回以下で  $-4.5$  の変化，30 回以上で  $0.4$  の変化だった．CP 資料ダウンロード 38 回以上のグループでは，46 回以上ダウンロードで  $-3.5$  の変化，38 回以上 45 回以下で  $-15.5$  の変化だった．



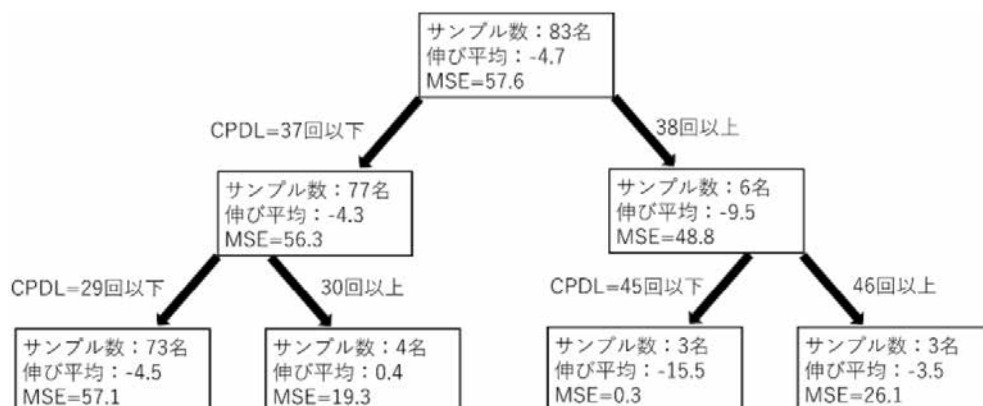


図9 23年度入学生学力上位層（習熟度偏差値55超）のうち学習支援センター物理利用者の1クォータ間学力変化についての回帰木分析

目的変数と説明変数は図1と同じ。

上位層では利用傾向が大きく異なり、全てCP資料ダウンロードが影響した。最上位の分岐でCP資料ダウンロード回数と偏差値変化の関係に逆転現象が起きたが、次の分岐はいずれもCP資料ダウンロード回数に応じた偏差値変化を示した。

#### 4. 考察

レポート点を含んだ試験総点には、図1が示すように個別指導の複数回利用が大きく影響し、図2から図4の回帰木分析からは、各サービスの利用回数が増えると偏差値変化が大きくなることが分かる。このことから当センターの継続的利用が非常に効果的であると結論できる。

詳細を調べると、マーク点の回帰木分析（図5）は基礎講座の複数回出席が大きく影響したことを示し、試験総点とは異なる分岐が最上位に来了。この試験総点とマーク点の違いはレポート点による違いであり、図6が示すレポート点についての回帰木分析は、個別指導の利用の有無が大きく影響している。自ら問題を設定し論理立てて述べることは、高校等の教育環境によってはあまり学ぶ機会が無い場合がある。そこで当センターの個別指導を利用してその方法を学んでいる様子が窺え、ゼミ形式の指導の効果が現れていると言える。

また興味深いことに、図6のようにCP資料利用のレポート点への影響は小さく、図5のマーク点では基礎講座による分岐の次にCP資料の利用が影響を与えていることは、CP資料ではレポート問題設定の方針が汲み取れなかった可能性がある一方、設定が与えられた問題を解くことに関しては、講義形式の基礎講座やCP資料の解説から問題の解法を学んでいるようである。実際にCP資料を多数回ダウンロードした学生の大きな学力向上が目立つ。

すなわち当センター物理科は、レポートには個別指導で論理力向上に寄与しており、期末マーク試験には基礎講座を通じた体系的解説と CP 資料の解説を通じて学力向上に寄与していると解釈することができる。

先に述べたように、自ら問題を設定するレポートの書き方を学んだかどうかは、これまでの教育環境に大きく依存することから学力上位層でも苦手とする学生が多い。また大学物理と高校物理のギャップに悩む学生はどの学力層にも一定数いる。このことから学力下位層だけでなく上・中位層の当センター利用者も多い。表 1 の結果が示すように、全ての学力層において試験総点との偏差値変化に利用者と非利用者との間で差があることを示し、物理が苦手な学生に対してだけでなく、得意な学生に対しても当センターの学習支援の効果があった。

また利用方法についても、図 7 と図 8 が示すように中・下位層には個別指導の影響が大きい一方で、図 9 が示すように上位層には CP 資料ダウンロードの影響が現れ、学力層によって利用方法が異なった。ここに学生の能力や事情に応じた利用のされ方が浮き彫りになった。また上位層においては、CP 資料を多くダウンロードすれば学力が向上したとは一概には言えない結果であった。ダウンロードすることが学習することとは直接結び付けられないことと利用数が少ないことから早計な判断はできないので今後も継続的な調査が必要だろう。

いずれにせよ、当センター物理科は学生の多様なニーズに合わせつつ学生の総合的な学力向上に貢献していると結論できる。

## 5. まとめ

2023 年度入学生の工学院大学学習支援センター利用者が入学時点から 1 クォータ末までに当センターの 3 つのサービス（個別指導、基礎講座、コースパワー資料）をどのように利用して学力変化したかを回帰分析により調べた。結果、当センター利用者は各サービスの継続的な利用により非利用者に比べて学力が向上した。それには、試験総点、特にレポート点には個別指導の影響が、期末試験のマーク点には基礎講座とコースパワー資料が大きく影響したことが分かった。

また、3 つの学力層に分けて分析したところ、中・下位層と上位層で利用方法が異なり、学生の能力やニーズに合った利用のされ方をした。そのような利用のされ方に違いがあっても、どの学力層においても試験総点の偏差値変化には利用者と非利用者との間で差があり、全ての学力層に教育効果があった。

### 謝辞

センター長の熊ノ郷直人先生には、学習支援センターの利用状況を分析する環境を整備していただくとともに内容に関する議論をしていただきました。数学科の奥田喬之先生には統計的手法についてご教示ならび

に議論をしていただきました。心より御礼申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 永井朋子, 紀基樹, 細谷哲雄, 松本拓也, 高橋浩久, 武藤恭之, 工学院大学研究論叢, **58-2** (2021) 1.
- 2) 永井朋子, 紀基樹, 細谷哲雄, 高橋浩久, 松本拓也, 武藤恭之, 大学の物理教育, **27** (2021) 110.
- 3) 永井朋子, 紀基樹, 細谷哲雄, 高橋浩久, 露木孝尚, 武藤恭之, 大学の物理教育, **28** (2022) 94.
- 4) 元田浩, 津本周作, 山口高平, 沼尾正行, 『データマイニングの基礎』オーム社 (2006).
- 5) L. Breiman, J. H. Friedman, R. A. Olshen, and C. J. Stone, *Classification and Regression Trees*, Wadsworth International Group (1984).
- 6) 福田剛志, 森本康彦, 徳山豪著, 『データマイニング』共立出版 (2001).

(たかはし ひろひさ 学習支援センター 講師)

(ながい ともこ 国際医療福祉大学 小田原保健医療学部 講師)

(きの もとき 学習支援センター 講師)

(ほそや てつお 学習支援センター 講師)

(つゆき たかなお 学習支援センター 講師)

(むとう たかゆき 教育推進機構 准教授)

(こむぎ しんや 教育推進機構 准教授)



# COVID-19 下で障害のある子どもたちが直面する 英語教育の環境と格差

—— 質問紙調査による特別支援学校と一般校の比較から ——

貝 原 千馨枝

柴 田 邦 臣

English Education for Children  
with Disabilities during COVID-19:  
Insights from a Questionnaire Survey Focusing  
on Learning Difficulties and Educational Environments

KAIHARA Chikae, SHIBATA Kuniomi

## Abstract

2020 年度小学校外国語教科化、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大、そしてそれに伴う GIGA スクール構想の前倒しにより、英語教育は大きな変化を迎えている。2020 年度実施の新学習指導要領により、小学 3・4 年生から「外国語活動」、そして小学 5・6 年生から「外国語」の授業を受けることになってはいるものの、障害のある児童・生徒の英語教育の状況がどのようなものなのか、相当程度の規模で調査し、量的に把握しているものはない。そこで、2021 年度の 7 月から 8 月にかけて、4 都県（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県）の特別支援学校と一般校の特別支援学級・通級設置校を対象に、障害のある児童・生徒の英語教育の状況について調査を行なった。この調査から、特別支援学校と一般校において、特に文字の形の識別や、文字と音の対応の自動化など、読み書きの学習上の困難は共通している一方で、英語の指導のための機材・人材やノウハウは、特別支援学校のほうが枯渇していることが示された。本調査は、学習環境が整備されていないことが、障害のある児童・生徒の英語学習上の不利の深刻化をもたらす可能性と、その解消、つまり英語教育の UDL（Universal Design for Learning）の社会的責務や、学びの社会的構成の検討の必要性を示している。

## 1. はじめに

### 1.1 背景と課題設定

日本社会における「英語」の社会的位置付けは、それが母語ではないにもかかわらず、ほぼ全ての構成員が必ず学ばなければならないという、事実上必修が義務付けられている唯一の言語であるというところに、その特徴がある。実際のところ、グローバル化するこの時代における、世界共通言語である英語の必要性は、日本社会のすべての児童・生徒たちに、つまり障害の有無に関わらず求められ、かつ望まれているとすることができる。2020 年度の小学校英語教科化は、そのようなトレンドをまさに象徴するような出来事であったと言えよう(文部科学省、2014)。

そのような「英語教育熱」の高揚感に背中を押された多くの子どもたちが、英語を習得し世界に羽ばたこうとしている一方で、その陰に隠れるかのように、英語学習に苦勞していたり、時には深刻な困難を抱えていたりする子どもたちも確かにいる。例えば村上(2018)は、ディスレクシア<sup>1</sup>の児童における英語学習の課題を指摘しその重厚な実践を論じているし、河合(2022)は、難聴など聴覚障害の領域における英語の音の指導について、精緻な研究をおこなっている。

しかしながら、これらの先進的な取り組みを除くと、英語教育研究の分野において、障害や事情のある子どもたちに注目した研究は、十分だとは言えない。そもそも、種別に限らず、障害のある子どもたち全体を視野に入れようとした英語学習の実態調査は、ほとんどなされていないと言ってよい。同じ状況は、特別支援教育の側からみても言うことができる。特別支援教育の分野においても、障害児の英語学習は十分に注目されてきたわけではなく、それを正面から取り上げたものはほとんどないと言える。このように、障害児の英語学習が十分に論じられてこなかった理由は、いくつかあるだろう。そもそも日本の教育業界において英語という教科は、受験競争を勝ち残ったり、国際的に羽ばたいたりするような、“優秀な子どもたち”向けであって、そのような存在ではない(とされてしまっている)障害のある児童・生徒には無関係である、という勝手な思い込みもあったかもしれない。しかしそれは、それでも英語を学びたい・英語を学んで希望する進路に進みたいという障害のある子どもたちの学習機会を制限してしまいかねず、また英語が「できない」ことにより、学校や社会からドロップアウトしてしまう可能性も指摘されている(Collins and Wolter, 2018)。そのような子どもたちは、グローバル社会の進展の中で、新たな格差に苦しむことになりかねない。

貝原・柴田(2020)は、英語力がますます重視されてきている日本社会において、その子に障害があるというだけで、英語教育のルートにのる可能性がきわめて低く見積もられてしまう傾向は、著しい社会的不利に結びつきかねないと指摘した。ある一定の障害のある子どもたちにとって、英語学習環境や学習状況が不利に働きうるという現実、これまで十分に論じられてこなかった。英語が事実上の必修言語として学校教育において教科化されてい

くなかで、それが障害のある子どもたちにとってどのように機能しており、どのような問題を孕みうるかについては、彼ら彼女らの英語学習の実態を把握するための社会調査によって、より検討されなければならないだろう。そこで本稿の課題を、障害のある児童・生徒が英語を学ぶ状況に設定し、主として定量的な社会調査によって、その実像に迫るものとする。

## 1.2 先行研究の整理

小学校英語教育の実態について量的な把握を行なった先行研究には、松宮・大谷・中山ほか（2021）による調査がある。この調査は、中国・四国地方の公立小学校の通常学級の外国語科を指導する学級担任と外国語の専科教員を対象とした質問紙調査で、学級担任と専科教員では児童の英語学習上のつまづきへの異なる着眼点や見取り方があるため、両者の視点を相補的に生かした支援のあり方の検討が必要であると述べている。しかし、この調査はあくまで一般校の小学校英語教育に関する調査で、障害のある子どもたちの英語教育に焦点を当てたものではない。また、一般校の通常学級における英語学習上の困難や、行動上の困難に関する調査であって、英語の学習環境に関する質問項目は含まれていないため、障害のある児童・生徒の英語の学習環境全体を量的に把握する試みではないと言える。加えて、障害のある子どもたちの COVID-19 拡大を経た英語教育の実態に関する量的研究はまだなされておらず、本稿で報告する調査が、初めての量的な調査となっている。

一方で、英語の学習や指導に関する個別の工夫は、これまでさまざまに積み重ねられている。例えばディスレクシアのある児童へのアルファベットや音韻認識、単語の読みの指導の実践や（村上、2018；成田、2019 など）、特別支援学級における ICT を利用した外国語活動（久保・金森・中山、2012）、視覚障害やろう・難聴のある学生への英語学習教材の開発（斉藤、2009）、知的特別支援学校における英語の活動・授業の実践に関する調査（高野・上田・武田ほか、2022）など、それぞれの障害ごとに、調査や工夫の実践がなされてきた。しかし、障害のある児童・生徒の英語学習上の困難の把握に加え、彼ら彼女らの英語学習環境についての把握を行なった大規模な調査は行われていない。つまり、先行研究においては、基本的に英語学習上の困難とその解消のための有効な学習法や工夫と英語学習環境は、障害の種別や学校別に調査・分析がなされている。しかし、特に、2020 年度から小学校で「外国語」が教科化され、奇しくも同じタイミングで COVID-19 の拡大が起これ、GIGA スクール構想が前倒しされるといふ、教育の大きな変化を迎えたこの時、障害の種別や学校別という枠組みを超えて、障害のある子どもたちの英語教育がどのような状況にあるのか、その社会・学習環境は、全体的に把握する必要があるのではないだろうか。

## 2. 方法

### 2.1 目的（仮説の設定）

前節まで言及してきた通り、障害のある子どもたちの英語教育に関する研究には、障害種別の教授法の工夫や、先進的な実践については白眉なものがあるものの決して多いとは言えず、特別支援教育内において注目を集めているとも言えない。特に小学英語の教科化など、英語学習の位置付けが大きく変わった新学習指導要領の導入と同時に、COVID-19 の感染拡大によって、学校での英語教育が大きく影響を受けたことは、想像に難くない。

そこで本稿の仮説を、そのような社会状況の中で「特に工夫や努力が必要であるにも関わらず、十分に考慮されていない障害のある児童・生徒の英語教育が、いくつかの課題に直面している」と設定する。実際にどのような点に問題を抱えているのかを探り、仮説を立証することを目的として、「障害のある子どもたちの英語学習に関する調査」（以下、本調査）を実施した。

### 2.2 質問紙調査の概要

本調査は、2021 年の 7 月から 8 月にかけて、東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県の 4 都県の特別支援学校（視覚（盲）、聴覚（ろう）、知的、肢体不自由）の小学部・中学部・高等部と、一般校（小学校・中学校・高等学校）の特別支援学級・通級指導教室設置校を対象に行なった。これら 4 都県に調査範囲を限定した理由は、調査時点においては COVID-19 の感染が拡大しており、さらに地域ごとに偏りがあったため、同じような感染状況の地域に限定して、英語学習について把握する必要があるからである。そのため本調査は、英語学習上の困難や、学校現場の状況や工夫に加え、現在進行形の COVID-19 感染拡大と GIGA スクール構想が学校現場へどのような影響を及ぼしているのかについての設問も設け、分析可能にした。調査の概要は、表 1 の通りである。



表 1 「障害のある子どもたちの英語学習に関する調査」概要

1. 調査期間・方法	2021 年 7 月 26 日—8 月 31 日 郵送調査
2. 標本抽出方法	層化抽出法
3. 調査対象校	4 都県（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県） 特別支援学校：（小学部・中学部・高等部）223 校 特別支援学級・通級指導教室設置一般校： （小学校・中学校・高等学校）288 校 計 511 校
4. 調査対象者	各学校の代表者・英語関連授業担当者
5. 調査協力校（回収率）	115 校（22.5%）
6. 調査協力校の運営	国立：4.5% 公立：94.5% 私立：0.9%
7. 調査協力校の内訳	一般校・小学校：23.0% 一般校・中学校：16.8% 一般校・高等学校：0.9% 特別支援学校・小学部：14.2% 特別支援学校・中学部：16.8% 特別支援学校・高等部：28.3%
8. 特別支援学校調査協力校の種別	ろう・聴覚：20.0% 盲・視覚：9.2% 知的：41.5% 肢体不自由：29.2%

本調査にご協力くださった一般校の全校生徒数の平均と、障害の種別は表2の通りである。

表 2 一般校の障害のある児童・生徒の割合

各校全生徒数の平均 = 403.69 人	平均（人）	割合（%）
1. 自閉症スペクトラム障害（ASD）	4.91	1.22
2. 情緒障害	6.34	1.57
3. 学習障害（LD）	2.24	0.55
4. 注意欠陥多動性障害（ADHD）	4.48	1.11
5. 難聴	0.71	0.18
6. 言語障害	2.32	0.57
7. 弱視・視覚障害	0.09	0.02
8. 知的障害	6.50	1.61
9. その他	0.27	0.07

### 3. 結果

#### 3.1.1 英語学習の「困難」

まずは本調査の結果から、学校において「英語学習」の困難がどのように表れているのかについて整理する。なお、英語学習の困難については、小学3・4年次に「外国語活動」、小学5・6年次に「外国語」と、履修する科目が異なるため、特別支援学校の小学部と一般校の小学校には小学3・4年「外国語活動」の授業担当者向けの質問紙と、小学5・6年「外国語」の授業担当者向けの質問紙を一緒に送付し、それぞれを1校として計算している。そのため、3.1.1以降の調査結果の回答校数は、表1で報告した調査協力校数(N=115)よりも多くなっている。

英語を「読むこと」「書くこと」「聞くこと」「話すこと」、いわゆる4技能の学習に関する困難について、英語の授業の担当教員<sup>2</sup>に尋ねた結果、特別支援学校と一般校の障害のある子どもたちに、特に「文字の形の識別」と「文字と音の対応」に関する困難が、共通して見られる可能性がうかがわれた。

英語を「書くこと」について、表3「似たアルファベットの形と間違えて書く児童がクラスにいる(例:bをd、pをqなどと間違える)」と回答した学校は<sup>3</sup>、141校中、特別支援学校・一般校合わせて117校と、回答校全体の83.0%を占めており、その傾向は一般校と特別支援学校とで差はない。

一方、「読むこと」、特に文字と音の対応の学習困難に関する回答結果をまとめたのが、次の表2と表3である。表4「アルファベット1文字1文字を読むのに時間がかかるなど、文字と音の結びつきを覚えるのに困難がある児童・生徒がクラスにいる」と答えた学校は、一般校85.8%、特別支援学校76.9%であった。ディスレクシアのなかでも、特に視覚情報の処理に難しさがある場合は、bとd、pとqなどの文字の形の識別に困難があるとされているが(平林, 2019; 宇野, 2019 など)、表5の「似たアルファベットの形と間違えて読むことがある」についても、一般校は85.7%、特別支援学校は80.8%と、ともに非常に高い割合で「そう思う」という回答を得た。

このように、本調査の結果は、特別支援学校だけではなく、一般校においても、幅広く英語学習における困難に直面している障害のある子どもたちが多い現状を示している。それでは、その英語学習の「困難」は、何によってもたらされているのだろうか。

表3 「似たアルファベットの形と間違えて書くことがある児童がクラスにいる（例：bをd、pをqなどと間違える）」の回答結果（N=141）

		そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	合計
一般校	度数	60	8	2	70
	行%	85.7%	11.4%	2.9%	
特別支援学校	度数	57	8	6	71
	行%	80.3%	11.3%	8.4%	
合計		117	16	8	141

表4 「アルファベット1文字1文字を読むのに時間がかかるなど、文字と音の結びつきを覚えるのに困難がある児童・生徒がクラスにいる」の回答結果（N=155）

		そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	合計
一般校	度数	66	5	6	77
	行%	85.8%	6.5%	7.8%	
特別支援学校	度数	60	5	14	78
	行%	76.9%	6.4%	17.9%	
合計		126	10	20	155

表5 「似たアルファベットの形と間違えて読むことがある児童・生徒がクラスにいる。（例：bをd、pをqなどと間違える）」の回答結果（N=155）

		そう思う	どちらとも言えない	そう思わない	合計
一般校	度数	66	4	7	77
	行%	85.7%	5.2%	9.1%	
特別支援学校	度数	63	5	10	78
	行%	80.8%	6.4%	12.8%	
合計		129	9	17	155

### 3. 1. 2 COVID-19 の英語教育への影響

本調査実施時期の特有の課題として、COVID-19 拡大による、学校での英語教育への影響について事前に確認し、考慮できるようにしておく必要があるだろう。表6は一般校、表7は特別支援学校それぞれに、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による影響を尋ねたものであるが（図1は表6、図2は表7それぞれをグラフ化したもの）、いずれも、「発音指導の困難」「グループワークの困難」「スキミングの制限」が上位を占めている。一般校・

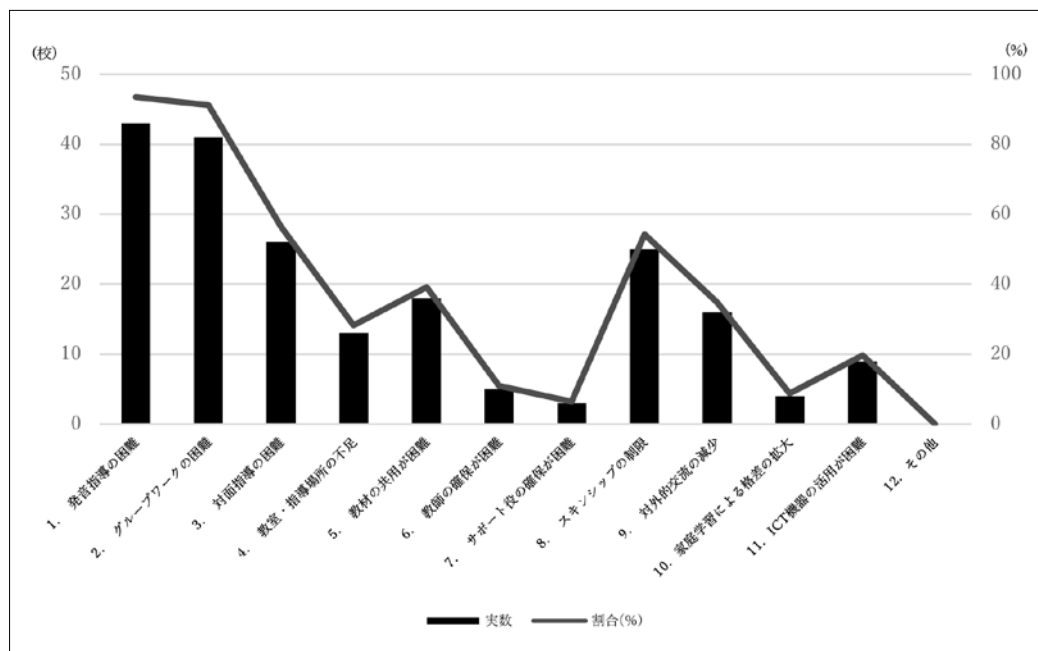


図 1 一般校・新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の英語教育への影響の回答結果のグラフ

表 6 一般校・新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の英語教育への影響の回答結果（N=46 複数回答）

	実数	割合 (%)
1. 発音指導の困難	43	93.5
2. グループワークの困難	41	91.1
3. 対面指導の困難	26	56.5
4. 教室・指導場所の不足	13	28.2
5. 教材の共用が困難	18	39.1
6. 教師の確保が困難	5	10.9
7. サポート役の確保が困難	3	6.5
8. スキンシップの制限	25	54.3
9. 対外的交流の減少	16	34.8
10. 家庭学習による格差の拡大	4	8.7
11. ICT 機器の活用が困難	9	19.6
12. その他	0	0.0

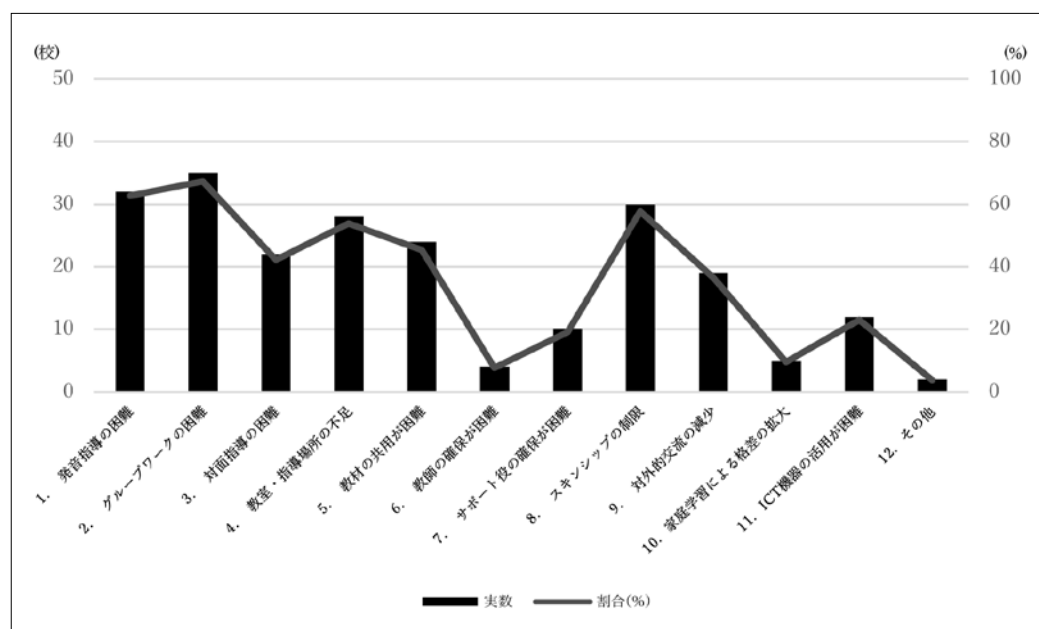


図2 特別支援学校・新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の英語教育への影響の回答結果のグラフ

表7 特別支援学校「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の英語教育への影響」の回答結果（N=54 複数回答）

	実数	割合 (%)
1. 発音指導の困難	32	62.7
2. グループワークの困難	35	67.3
3. 対面指導の困難	22	42.3
4. 教室・指導場所の不足	28	53.8
5. 教材の共用が困難	24	45.3
6. 教師の確保が困難	4	7.7
7. サポート役の確保が困難	10	19.2
8. スキンシップの制限	30	57.7
9. 対外的交流の減少	19	36.5
10. 家庭学習による格差の拡大	5	9.6
11. ICT 機器の活用が困難	12	23.1
12. その他	2	3.8

特別支援学校ともに、これまでの指導や学びの工夫が、COVID-19 によって大きく制限を受けている様子が見えかわれた。

特に、英語の指導に伴う発音・発声や、グループワークなどの集団での活動が、制約を受けている様子が見受けられる。また、英語の文字と音を結びつけて学ぶことは、いかなる英語による活動にとっても土台となる重要な学びだと思われるが、マスクやフェイスシールドの装用により、児童・生徒が発音を聞きとれなかったり、口の形がよくわからず発音の仕方を真似できない、あるいは、教諭が子どもたちの口の形や発音を確認することが難しくなっているようであった。また、学校で共有している教材や、学校の備品や機材の消毒が教諭の負担となっていたり、感染拡大防止という理由で、英語系の部活動・クラブ活動の大会や、学校行事が中止される、あるいは延期となっていることもうかがわれた。

他者とのコミュニケーションのための言葉の学びは、COVID-19 拡大によってその学習環境が変化したことにより、おそらく障害の有無に関わらず、子どもたちの英語学習に対し大きく影響を与えていることが確認できる。

しかし、その英語の「学習環境」をさらに詳細にみていくと、一般校と特別支援学校に、いくつかの違いを見出すことができる。引き続いて、その学習環境の要因をひとつひとつ分析していきたい。

### 3.2 英語の学習環境に関する問題

続いて英語学習の実態を明らかにするため、本調査では、障害のある児童生徒が、どのような環境で英語を学んでいるのか尋ねた。ここではその結果を整理する。

#### 3.2.1 設備・機器の問題

上述の通り、本調査は 2021 年の夏に実施したものである。当時、東京都は 4 度目となる緊急事態宣言発令下にあり、学校でのクラスターも頻繁に発生していた。文部科学省は、長引く COVID-19 の拡大を鑑み、もともと 2019 年度から 5 カ年計画で行う予定だった GIGA スクール構想の前倒しを行った（小学校・中学校の児童生徒への 1 人 1 台 ICT 端末の配布の実施）。そこで、2021 年夏時点の GIGA スクール構想の進捗状況を尋ねたところ、一般校の結果が表 8、特別支援学校の結果が表 9 の通りであった。これらの結果を比較してみると、一般校は 9 割以上の学校で全員配布が完了していた一方で、特別支援学校は一部の端末を共有して使用するという段階にとどまっており、全員配布が完了している学校は 4 割に満たなかった。一般校と比べ特別支援校では、GIGA スクール構想などデジタル化の進捗に、差が生じていたようである。

表 10 は、授業における「電子黒板、パソコン、タブレットなどの ICT 機器の利用」に関する一般校と特別支援学校の回答のクロス集計結果である。電子黒板など、1 つの教室に 1 台設置するような ICT 機器は、GIGA スクール構想の前から実施していた学校もあったこと

表 8 一般校の 2021 年 7 月—8 月時点の GIGA スクール構想の進捗状況回答結果 (N=46)

	実数	割合 (%)
1. 全員配布、校内・家庭学習で使用	12	26.7
2. 全員配布、校内で使用	30	66.7
3. 一部の端末を共有して使用	1	2.2
4. 限られた学年・クラスでしか使用できていない	1	2.2
5. 実質的にほとんど使用できていない	1	2.2
6. その他	1	2.2
合計	46	100

表 9 特別支援学校・2021 年 7 月—8 月時点の GIGA スクール構想の進捗状況回答結果 (N=55)

	実数	割合 (%)
1. 全員配布、校内・家庭学習で使用	7	12.7
2. 全員配布、校内で使用	15	27.2
3. 一部の端末を共有して使用	18	32.7
4. 限られた学年・クラスでしか使用できていない	3	5.5
5. 実質的にほとんど使用できていない	7	12.7
6. その他	5	9.1
合計	55	100

表 10 「電子黒板、パソコン、タブレットなどの ICT 機器を利用している」工夫の学校別クロス表

		行っている	どちらとも言えない	行っていない	合計
一般校	度数	72	2	3	77
	行%	93.5%	2.6%	3.9%	
	期待値	66.766	4.386	5.848	
特別支援学校	度数	65	7	8	81
	行%	80.2%	8.6%	10.1%	
	期待値	70.234	4.614	5.571	
合計		137	9	12	158

 $\chi^2(2)=6.038, p<.05$  Cramer's  $V=0.195$

が予想されるが、このような ICT 機器の利用も一般校の方がより行っていて、特別支援学校はより行っていないと言うことができ、またその差はある程度、有意であるとみなすこともできる。ICT などのテクノロジーは、障害がある子どもにとって切り札とも言える学習用機材ではあるが、現状は一般校よりも縁遠いものとなっており、環境面での不利がさらに際立っていると言わざるを得ない。ICT 機器の利活用という、現在の英語教育にとって最も重要な環境上の工夫についても、一般校と特別支援学校では差が開いていることがうかがわれる。

### 3. 2. 2 人員・人材の問題

次に、英語学習に関する人員・人材について尋ねた。表 11 は、英語の専科教員の有無をクロス集計して分析し、一般校と特別支援学校とで比較したものである。結果を見ると、専科教員は一般校の方が多く配置されていて、特別支援学校では配置されておらず、有意に差がある ( $p<.01$ )。「外国語活動」「外国語」という科目・教科としての「英語」は、教諭にとって、知識の量のみならず、そもそもその言語を卓越して使用できるかどうかとも問われる、相当程度に専門性が問われる科目と言える。確かに特別支援学校では学習指導要領上、外国語教育が必修化されていないこともあるだろうが、それでも「準ずる過程」の支援学校をはじめ、ほとんどの特別支援学校が何らかの英語教育を取り入れている。そのような状況の中で、人手やノウハウなどといった、学ぶための支援がより求められると想定される特別支援学校のほうが英語の専科教諭が少ないという結果は、障害児が英語を学ぶための人的資源が、特別支援学校のほうがより配置されていないことをうかがわせる。

英語教育における、環境の充実度を把握するもう 1 つの要素として、ALT (Assistant Language Teacher、外国語指導助手) の配置状況が挙げられる。表 12 は、ALT の配置状況をクロス集計し、一般校と特別支援学校で比較して分析したものである。一般校では、ALT が積極的に配置されていると見受けられるのに対して、特別支援学校は配置されていない学

表 11 専科教員の有無に関する学校別クロス表

		専科教員 有り	専科教員 無し	合計
一般校	度数	28	18	46
	行%	60.9%	39.1%	
	期待値	19.540	26.460	
特別支援学校	度数	20	47	67
	行%	31.7%	68.3%	
	期待値	28.460	38.540	
合計		48	65	113

$$\chi^2(1)=9.508, p<.01 \quad \phi=0.290$$



表 12 ALT（外国語指導助手）の配置有無に関する学校別クロス表

		ALT の配置 有り	ALT の配置 無し	合計
一般校	度数	38	8	46
	行%	82.6%	17.4%	
	期待値	28.088	17.912	
特別支援学校	度数	31	32	67
	行%	46.3%	53.7%	
	期待値	40.912	26.088	
合計		69	44	113

 $\chi^2(1)=13.659, p<.01 \quad \phi=0.348$ 

校が多く、有意な差がある ( $p<.01$ )。ALT による指導や、ALT との交流は、英語の発音に触れる貴重な機会である。特に学外で英語が学べる施設や機関がほとんどない、特別支援学校に通学する児童・生徒にとっては、極めて貴重な英語話者との交流の機会だと想定されるが、調査の結果からは、配置されていない傾向が見受けられた。

### 3. 2. 3 英語を教えること・ノウハウの問題

次に、障害のある児童・生徒の英語教育の実践やノウハウに関する結果を整理したい。例えば表 13 は、「[フォニックス] や「マジック e」<sup>4</sup> といった文字と音の規則を意識して教えている」か否かという、英語の指導ならではの工夫について尋ねた結果をクロス集計したものである。フォニックスは学習指導要領には記載がないものの、読み書き障害のある子ども向けの有効な英語の文字と音の学習法・指導法とされており、もともとは英語圏で生まれ、それが日本にも輸入され、実践が積み重ねられているところである。フォニックスなどの文字と音の対応の学習の工夫は、論文や学会報告などで積極的に実践報告がなされており、読み書き障害のある子どもたち向けに、フォニックスを指導している民間の教室やフォニックス教材も複数存在する（松香フォニックス、Jolly phonics、もじこ塾など）。表 13 を見ると、一般校の特別支援学級・通級ではそのような工夫がなされている様子が概ね半分程度の学校で見受けられたものの、特別支援学校では特に低い実施割合で、その差は有意であると言えるものであった。文字と音の規則を明示化するという、障害がある子どもたちにとってわかりやすいような工夫が、むしろ特別支援学校でなされていないという実態は、環境面での不利の一例と言えるのではないだろうか。このような、教授法・ノウハウ面においても、障害のある子どもたちの英語学習に不足や課題があることが理解できるだろう。

表 13 「[フォニックス]や「マジック e」といった文字と音の規則を意識して教えている」工夫に関する学校別クロス表

		かなり 行っている	行っている	どちらとも 言えない	あまり 行っていない	全く 行っていない	合計
一般校	度数	20	18	15	16	9	78
	行%	25.6%	23.1%	19.2%	20.5%	11.5%	
	期待値	12.917	17.885	17.389	15.401	14.408	
特別支援 学校	度数	6	18	20	15	20	79
	行%	7.6%	22.8%	25.3%	19.0%	25.3%	
	期待値	13.083	18.115	17.611	15.599	14.592	
合計		26	36	35	31	29	157

 $\chi^2(4) = 10.846, p < .05$  Cramer's V = 0.261

#### 4. 考察

本調査では、4 都県の小・中・高等学校と特別支援学校（小学部・中学部・高等部）に、英語教育の現況を尋ねる質問紙調査を行った。まず全体的な傾向として、英語学習の「困難」とも呼べるような状況が、確かに存在していることが示された。その一部は、おそらく COVID-19 拡大危機の影響もあると確認でき、今後の英語教育を構築していく際の課題であると言えることができるだろう。

しかし、その論点を、「学習環境がどう整備されているか」に限定し、一般校と特別支援学校に分けて分析していくと、有意に異なると思われる差が、いくつも確認された。まず、設備・機器関係、特に、GIGA スクール構想を中心とした ICT 機器の利用という点では、明らかに一般校よりも特別支援学校の方が進んでおらず、その進捗が大きく異なっていた。2023 年現在は、COVID-19 感染拡大がこれまでよりは落ち着いたこともあり、基本的には 1 人 1 台の ICT 機器の配布は終了していると思われ、Assistive Technology（支援技術）の観点から障害児むけのテクノロジー導入がどんどん進んでいるようにも思われるものの、その理想に現実がどこまで追いついているのか、また単に ICT 機器を利用するだけではなく、英語学習において活用することができているのかについては、今後の調査で明らかにしたい新たな論点の 1 つである。

人員・人材の面でも、一般校と特別支援学校の差は大きかったと言える。調査の結果から、英語の専科教員、および ALT の配置のいずれも、特別支援学校は比較的不十分であったと判断することができる。確かに特別支援学校は学習指導要領上、必ず英語を学ばなければならないという条件がつけられているわけではなかったり、そもそも、障害のある子どもたちが英語を学ぶという意識が社会全体で軽んじられている風潮の中で、専科の教員や ALT が配置されていなかったりするというのは、止むを得ないところがあるのかもしれない。しか

し、踏み込んで考えてみると、これまで学内だけでなく、学外でも英語に触れる機会が限られており、各種のサポートや合理的配慮がなければ勉強できない子どもたちだからこそ、特別支援学校で英語を学ばなければ学ぶ機会が奪われてしまうし、むしろそのために時間をかけて指導できる専科教員や ALT は本来はもっと必要で、一般校よりも拡充されるべきだと言うこともできるのではないか。

さらに、英語教育の「質」ともいうべきノウハウの部分に関しても、特別支援学校は恵まれていないといえることができる。これまでに、ディスレクシアにおけるフォニックス導入の有用性がいくつも説かれているように（平井・深谷、2000; 増田、2002; 赤沢、2007 など）、特別支援学校でこそ、これらのノウハウが積極的に導入される効果が高いとも言える。現状のままでは、障害のある子どもたちの英語学習の学びは、ますます格差が広がってしまうと言ったことさえできよう。

## 5. 結論

本調査の結果は、より手厚い支援や配慮が必要な子どもたちが在籍している特別支援学校の方が、英語学習という点においては、逆に不十分な環境に置かれている可能性を示してきた。この傾向は、おそらく学校教育に留まらないのではないか。英会話、英語塾など、障害のない子どもたちが、課外で英語を学ぶ場や教材は、幼少期から幾重にも用意されている。一方で、障害のある子どもたちにとっては、やっと英語感覚を取り入れた放課後等デイサービスや療育塾などの、萌芽的な試みが出てきた段階に過ぎない。

障害に軽重はないが、一般校と比べて丁寧で緊密な配慮と教育支援を実施するために、特別支援学校が存在していることをふまえると、日本における児童・生徒向けの英語学習の環境は、ある種の「逆転構造」にあると言える。つまり、配慮や支援が必要な子どもほど、英語学習のための機器や人材は配分されずノウハウもなく、一方で、自力で十分学べ、特に配慮や支援が必要ではない子どもたちほど、充実した機材、人材、そしてノウハウの恩恵を受けることができていると、言うことができるかもしれないのである。これは、典型的な教育格差といってもよい社会的な問題であると見なせよう。

英語教育の UDL (Universal Design for Learning) は、積極的に果たされなければならない。しかしそれは、単に教室の中だけに留まらないかもしれない。ますますグローバル化する社会において、英語が必須のリテラシーとなるのであれば、障害のある子どもたちの英語学習の UDL は、社会全体が実現すべき責務であると言える。

本研究には、いくつかの課題が残されている。まず、COVID-19 危機下の調査であったこともあり、対象とできた地域もサンプル数も限られたものであった。首都圏と異なった地域では、また異なった傾向を示す可能性があり、できる限り全国を視野に入れた調査を企図したい。また、定量的な調査であったため、障害のある子どもたちの具体的な学びについて切

り込むことができていない。障害のありようによって、その学びにおける課題はさらに重層化していると予見される。定性的な調査を実施し、より深く問題構造を把握したいと考えている。

さらに、この問題が典型的な社会問題であるのならば、社会における英語学習の UDL 化を果たすべく、具体的な改善方法の構想をめざすべきだとも考えている。障害や事情があるから英語以前の話、なのではなく、障害や事情があるからこそ、英語にチャレンジできた、という丁寧で開かれたノウハウや方法は、あり得るのではないか。本研究の考究の過程で、その成果をめざしたい。

## 謝辞

本論文の執筆のために、質問紙調査にご協力いただいた一般校・特別支援学校の先生方に、多大なご協力をいただきました。あらためて深くお礼申し上げます。また本論文執筆のための研究は、公益財団法人小林製薬青い鳥財団事業助成、独立行政法人国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金教材開発・普及活動助成、公益財団法人電気通信普及財団研究調査助成、一般財団法人言語教育振興財団研究助成、及び JSPS 科研費 JP20K12550 の成果の一部である。ここで関連各位に厚く感謝申し上げます。

## 注

- 1 ディスレクシアには読み書き障害などの他の用語もあるが、本論文はその用語の意味を論じることを目的としていないため、ディスレクシアと表記を統一している。
- 2 今回の調査の英語学習に関する質問は、英語の教員免許を持つ英語教諭だけではなく、英語の教員免許を持たないが、英語に関する授業や時間を担当している教諭にも回答を依頼している。
- 3 英語学習上の困難や、指導上の工夫は、5 スケール（「非常にそう思う」「そう思う」「わからない」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」）で尋ねているが、本稿では「非常にそう思う」「そう思う」を肯定的な「そう思う」、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を否定的な「そう思わない」、「かなり行っている」「行っている」を「行っている」、「あまり行っていない」「全く行っていない」を「行っていない」と 3 スケールにまとめ、表に示している。
- 4 「マジック e」は、make や note などの単語で、e の前の母音が長母音になり、e は読まない黙字となるルールのことで、フォニックスの例外としてよく挙げられている。

## 参考文献

- 赤沢真世. (2007). 「小学校英語活動における文字指導の現状と課題」『教育方法の研究』(10) : 17-24. <https://doi.org/10.14989/190338>
- 安東明珠花・岡典栄・庵功雄. (2019). 「ろう児に対する書記日本語教育：格助詞の定着に向けた指導法の開発」『人文・自然研究 Hitotsubashi Review of Arts and Sciences』一橋大学全学共通教育センター, (13) : 132-145. <https://doi.org/10.15057/30145>
- 米国精神医学会. (2014). 『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 第五版』東京：医学書院.
- Collins, G. and Wolter, J. A. (2018). "Facilitating postsecondary transition and promoting academic success through language/literacy-based self-determination strategies," *Speech, Language, and Hearing Services in the Schools*, 49 (2) : 176-188.
- 平林伸一. (2019). 「医学領域における学習障害——MBD から限局性学習症へ」宮本信也編『学習障害の

- ある子どもを支援する』東京：日本評論社, 18-38.
- 平井由美子・深谷計子. (2000). 「学習障害とその近接領域児に対する教科教育——英語学習の指導法(2)——つまずきの軽減を考慮したアルファベット学習の指導——」『日本女子体育大学紀要』(30): 165-172. <https://doi.org/10.34349/00000723>
- 貝原千馨枝・柴田邦臣. (2020). 「社会的マイノリティとしての言語学習障害——第二言語としての英語学習からの再定義——」『津田塾大学紀要』(52): 263-296.
- 河合裕美. (2022). 「公立小学校に在籍する聴覚障害児童への長期的な英語音声指導」『AUDELL Journal』(1): 12-27.
- 久保稔・金森強・中山晃. (2012). 「ICT を利用した特別支援学級における外国語活動」『小学校英語教育学会紀要』(12), 4-18. [https://doi.org/10.20597/jesjournal.12.0\\_4](https://doi.org/10.20597/jesjournal.12.0_4)
- 増田恵子. (2002). 「学習障害 (LD) 児に対する英語指導——フォニックスを中心に——」『上智短期大学紀要』(22): 41-59.
- 松宮奈賀子・大谷みどり・中山晃・河合紀宗. (2021). 「小学校外国語科における6年生のつまずきの実態——学級担任及び専科教員を対象とした調査結果の分析——」『JES journal/ 小学校英語教育学会 編』(21): 95-110. [https://doi.org/10.20597/jesjournal.21.01\\_95](https://doi.org/10.20597/jesjournal.21.01_95)
- 文部科学省. (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」 [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm).
- 村上加代子. (2018). 「読み書き困難のある小学生へのアルファベット・音韻認識・単語読み指導」『神戸山手短期大学紀要』(61): 39-53.
- 成田あゆみ. (2019). 「読み書き困難(ディスレクシア)のための英語指導法に向けて」津田塾大学インクルーシブ教育支援室主催講演会, 津田塾大学, 2019年7月2日.
- 斉藤くるみ. (2009). 「英語教育のバリアフリー学習教材の開発」『日本社会事業大学研究紀要』(55): 39-57.
- 高野美由紀・上田直子・武田博子・有働真理子. (2022). 「兵庫県知的障害特別支援学校における英語の活動・授業の調査研究」『兵庫教育大学研究紀要』(60): 53-62.
- 宇野彰. (2019). 「発達性読み書き障害とは」宮本信也編『学習障害のある子どもを支援する』日本評論社, 39-50.
- 脇中起余子. (2007). 『よく似た日本語とその手話表現 第2巻: 日本語の指導と手話の活用に思いをめぐらせて』東京: 北大路書房
- 脇中起余子. (2012a). 『助詞の使い分けとその手話表現 第1巻: 格助詞を中心に』東京: 北大路書房
- 脇中起余子. (2012b). 『助詞の使い分けとその手話表現 第2巻: 副助詞・接続助詞・接続詞を中心に』東京: 北大路書房

(かいほら ちかえ 工学院大学 教育支援機構学習支援センター講師)  
(しばた くにおみ 津田塾大学 学芸学部国際関係学科教授)



編集委員

内山 宗昭	小野 一
数馬 広二	勝田 由美
飛松敬二郎	林 真理

工学院大学研究論叢 第 61-2 号

2024 年 3 月 11 日 印 刷  
2024 年 3 月 11 日 発 行

東京都新宿区西新宿 1-24-2 (☎ 163-8677)

電 話 03 (3340) 0 1 3 3

F A X 03 (5322) 8 5 7 0

発 行 者 工 学 院 大 学

編集責任者 勝 田 由 美

非 売 品

印 刷 所 株式会社 外為印刷

